

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII - 8

1985

滋賀県教育委員会  
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

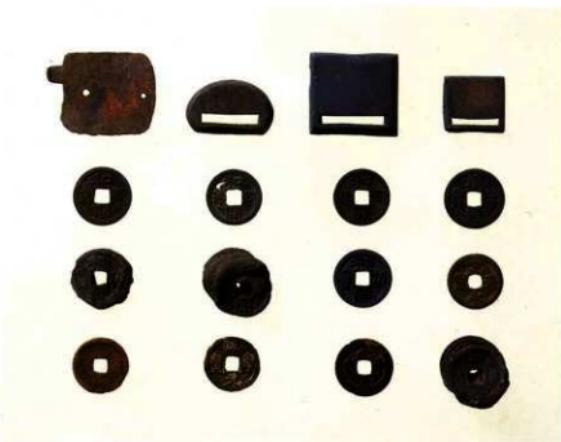
XII-8

1985

滋賀県教育委員会  
財団 法人 滋賀県文化財保護協会



(帶金具と貨幣)



1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

## 序

滋賀県下の県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、は場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加し今年度は36遺跡を数えることになりました。

ここに、実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと存じます。

なお、今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました25遺跡を9冊に分けて刊行するものであります。

最後になりましたが、は場整備に伴う発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申しあげますとともに、この報告書の刊行にご協力いただきました方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局  
文化部文化財保護課長

市 原 浩

# 目 次

## 第一 章 高島郡マキノ町小荒路十寺遺跡

1. はじめに(白井).....	1
2. 位置と環境(白井).....	1
3. 調査の経過(白井).....	4
4. 調査の結果(白井).....	4
5. 遺物(横田・白井).....	6
6. まとめ(横田・白井).....	19

## 第二 章 高島郡今津町北仰・桂遺跡

1. はじめに(尾崎).....	23
2. 位置と環境(尾崎).....	23
3. 調査の経過(尾崎).....	26
4. 調査の結果(尾崎).....	26
(1) 層位.....	26
(2) 遺構.....	26
5. 北仰・桂遺跡出土遺物(尾崎・鶴田・山崎・下田).....	29
6. まとめ(尾崎).....	31

## 第三 章 高島郡安曇川町四津川遺跡

1. はじめに.....	39
2. 位置と環境.....	39
3. 調査の経過.....	43
4. 層序・遺物.....	47
5. まとめ.....	48

## 第四 章 高島郡高島町永田遺跡

1. はじめに.....	51
2. 地理的環境.....	51
3. 歴史的環境.....	53
4. 調査の経過.....	54
5. 調査の結果.....	55
(1) 遺構.....	55
(2) 遺物.....	60
6. まとめ.....	64

## 図 版 目 次

### 第一 章 高島郡マキノ町小荒路十寺遺跡

グラビア 緑釉陶器、墨書き土器（巻頭）

図版1 調査地区北側の山の上より琵琶湖をのぞむ

調査地区全景（東より）

図版2 第50トレンチ（西より）

第50トレンチ（東より）

図版3 第41トレンチ（北より）

遺物包含層調査風景

図版4 遺物・須恵器

図版5 遺物・須恵器

図版6 遺物・須恵器

図版7 遺物・須恵器

図版8 遺物・須恵器、土師器

図版9 遺物・土師器、転用硯

図版10 遺物・緑釉陶器、無釉陶器、灰釉陶器

図版11 遺物・遺物・灰釉陶器、須恵器、その他

図版12 遺物・須恵器

図版13 遺物・須恵器、灰釉陶器

図版14 遺物・土師器

図版15 遺物・土師器

図版16 遺物・墨書き土器

図版17 遺物・墨書き土器

図版18 遺物・転用硯

図版19 遺物・緑釉陶器

図版20 遺物・無釉陶器

図版21 遺物・木製品

### 第二 章 高島郡今津町北仰・桂遺跡

図版1 北仰・桂遺跡（遺構）（上）遺跡遠景

（下）調査風景

図版2 北仰・桂遺跡（遺構）（上）B T 3（西より）

（下）T 63（南より）

図版3 北仰・桂遺跡（遺構）（上）B T 1（西より）

（下）B T 1・S K 1

図版4 北仰・桂遺跡（遺構）（上）B T 2（西より）

(下) B T 2 · S K 1

- 図版5 北仰・桂遺跡（遺物） 土器  
図版6 北仰・桂遺跡（遺物） 土器  
図版7 北仰・桂遺跡（遺物） 土器  
図版8 北仰・桂遺跡（遺物） 土器  
図版9 北仰・桂遺跡（遺物） 土器  
図版10 北仰・桂遺跡（遺物） 土器  
図版11 北仰・桂遺跡（遺物） 石器  
図版12 北仰・桂遺跡 遺物実測図(1)  
図版13 北仰・桂遺跡 遺物実測図(2)

第三章 高島郡安曇川町四津川遺跡

- 図版一 1. A地区遠景（南から）  
2. A地区近景（北東から）  
図版二 1. バックホーによる掘削（北から）  
2. A地区全景（南から）  
図版三 1. A地区トレンチ（南から）  
2. A地区第1トレンチ（北から）  
図版四 1. A地区第2トレンチ（東から）  
2. A地区第3トレンチ（東から）  
図版五 1. B地区遠景（藤江集落から）  
2. B地区全景（西から）  
図版六 1. B地区トレンチ（西から）  
2. B地区トレンチ（東から）  
図版七 1. B地区第1トレンチ（西から）  
2. B地区第1トレンチ層序（東から）  
図版八 1. B地区第2トレンチ（西から）  
2. B地区第2トレンチ層序（北東から）  
図版九 1. B地区第3トレンチ層序（南西から）  
2. B地区第3トレンチ（西から）  
図版十 1. B地区出土遺物  
2. A地区出土遺物

第四章 高島郡高島町水田遺跡

- グラビア (帶金具と貨幣) (巻頭)  
図版1 1. 全景嶽山をのぞむ（北東より）  
2. 全景鶴遺跡よりのぞむ（北より）

- 図版2 1. 第B 2トレンチ（西より）  
2. 第B 5トレンチ（東より）
- 図版3 1. 第B 7トレンチ（西より）  
2. 第B 8トレンチ（東より）
- 図版4 1. 第B 5トレンチ（東より）  
2. 第B 8トレンチ（東より）
- 図版5 1. 第B 2トレンチ（東より）  
2. 第B 2・9トレンチ（東南東より）
- 図版6 1. 第B 9トレンチ（東より）  
2. 第B 2トレンチ（東より）
- 図版7 1. 第B 2トレンチ 井戸1（南西より）  
2. 第B 2トレンチ 井戸1（北東より）
- 図版8 1. 第B 2トレンチ 井戸1（南より）  
2. 第B 2トレンチ 井戸1（西より）
- 図版9 1. 第B 2トレンチ 井戸1（南より）  
2. 第B 2トレンチ 井戸1（南より）
- 図版10 1. 第B 2トレンチ（鉄帯巡方）  
2. 第B 2トレンチ北区域外（鉄帯鉄具）
- 図版11 1. 第B 9トレンチ（溶着の神功開宝）  
2. 第B 2トレンチ（土師器壺）
- 図版12 1. 第B 9トレンチ（方形遺構1矢板列）  
2. 第B 2・9トレンチ（方形遺構1）
- 図版13 1. 遺物写真（第1号木簡赤外線写真）
- 図版14 1. 遺物写真（須恵器、綠釉陶器）  
2. 遺物写真（墨書き土器）
- 図版15 1. 遺物写真（土師器）
- 図版16 1. 遺物写真（木製品）  
2. 遺物写真（木製品）
- 図版17 1. 遺物写真（木製品）

## 挿 図 目 次

第一 章 高島郡マキノ町小荒路十寺遺跡	
第1図 遺跡位置図	2
第2図 小荒路十寺遺跡トレンチ配置図	3
第3図 第50トレンチ北壁土層断面図	4
第4図 小荒路十寺遺跡土層模式図	5
第5図 出土土器実測図	7
第6図 出土土器実測図	9
第7図 出土土器実測図	13
第8図 出土土器実測図	14
第9図 貨幣拓影	19
第二 章 高島郡今津町北仰・桂遺跡	
第1図 周辺遺跡	24
第2図 北仰・桂遺跡トレンチ配置図	25
第3図 北仰・桂遺跡土層模式図	27
第4図 第63トレンチ断面図	27
第5図 遺構平面図	28
第三章 高島郡安曇川町四津川遺跡	
第1図 藩江地先の方形土盛	39
第2図 遺跡位置図	40
第3図 遺跡周辺の字限図	41
第4図 A地区調査位置図	42
第5図 B地区調査位置図	43
第6図 A地区トレンチ配置図	44
第7図 B地区トレンチ配置図	45
第8図 出土遺物実測図	48
第9図 昭和30年代の湖岸地図	49
第四 章 高島郡高島町水田遺跡	
第1図 高島町全国	52
第2図 位 置 図	53
第3図 トレンチ配置図	54
第4図 現地説明会風景	55

第5図 第B6・7トレンチ平面図	56
第6図 第B2・9トレンチ平面図	57
第7図 第1号木簡略図	60
第8図 帯金具実測図	62

## 表 目 次

### 第一 章 高島郡マキノ町小荒路十寺遺跡

表1 小荒路十寺遺跡出土墨書き土器一覧表	18
----------------------	----

### 第二 章 高島郡今津町北仰・桂遺跡

出土遺物観察表	32
---------	----

### 第四 章 高島郡高島町水田遺跡

表1 斎串計測表	60
表2 その他の木器計測表	61
表3 土器計測表	61
表4 帯金具計測表	62
表5 出土貨幣表	63

## 第一章 高島郡マキノ町小荒路十寺遺跡

## 1. はじめに

本調査報告は、高島郡マキノ町の昭和59年度県営は場整備事業に伴い、知内川北部地区小荒路工区内で実施した小荒路十寺遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

小荒路十寺遺跡は、寺院伝承地として遺跡台帳に記されており、地元では十の寺があったと伝えられている。遺跡地背後の山麓には平垣地が数ヵ所認められ、調査地内で遺構の存在が予想された。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会技術谷吉芳幸を担当者とし、滋賀県文化財保護協会嘱託尾崎好則、滋賀県埋蔵文化財センター嘱託白井順子（旧姓山口）を主任調査員に得て実施した。

調査にあたっては、谷本 博（調査員）、マキノ町教育委員会、マキノ北小学校、地元老人クラブ有志の方々の協力を得た。本報告書は、白井順子が横田洋三（滋賀県文化財保護協会技術）、宇野優子、高田宏司（調査員）、寿福 滋（遺物写真）の諸氏の協力のもとに作成した。また、寺島孝一（平安博物館講師）、山尾幸久（立命館大学文学部教授）、岡本武憲（滋賀県文化財保護協会技術）の諸氏には、遺物及び遺跡の性格等について御教示をいただいた。記して厚くお礼申し上げたい。

## 2. 位置と環境

**遺跡の位置** 国道 161号線を海津から追坂峠を越えると小荒路の集落に出る。集落の南端で敦賀方面と県道287号線の白谷方面とに道が別れ、知内川の上流が集落の西を流れしており、今回の調査地はその道の分岐点に位置し、知内川が西へ曲がって山を切り開いて形成した谷状盆地の東側の出入口にあたる。

調査の対象となった小荒路工区は、東が知内川から西はマキノ北小学校までの約 750m、南北は山裾の水路から知内川までの約 250m の範囲である。今回の調査で遺物が検出された地点は、マキノ北小学校から山裾の水路沿いに東へ約 300m 行った所にあたる。

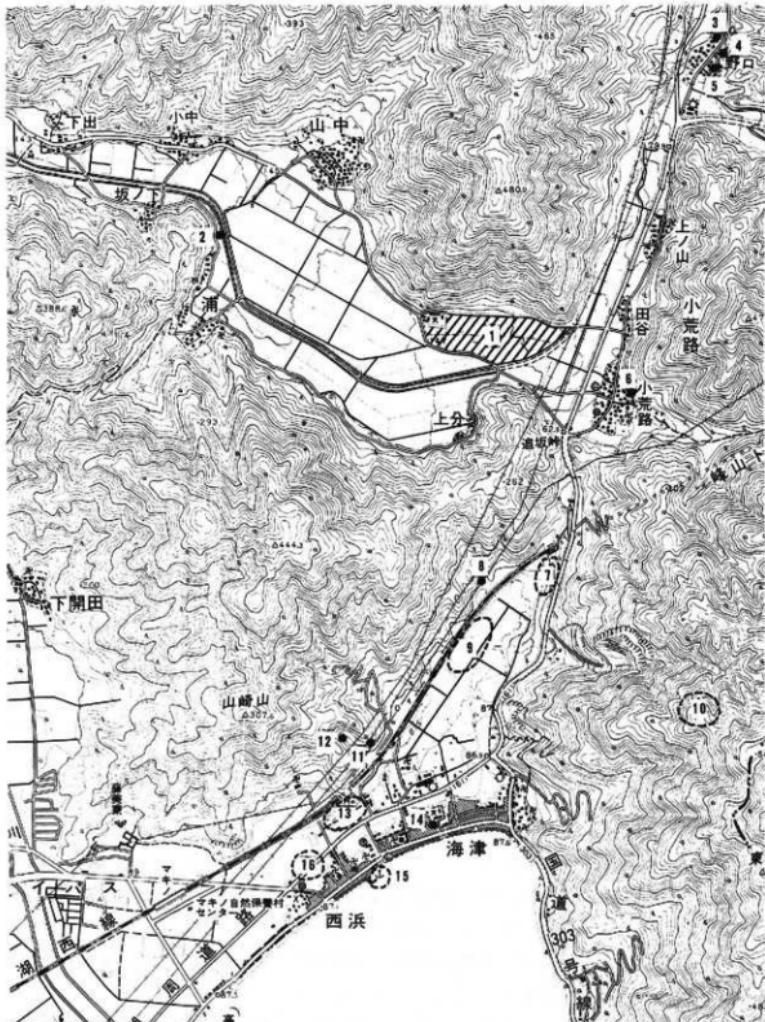
地形的みると知内川の氾濫原であり、調査結果から判るように葦原、湿地、砂田が作られ、気候は秋から冬にかけての時雨と積雪が多い所である。

**歴史的環境** 高島郡誌によると、小荒路の地名は往古の荒乳山路の山口の意でつけられた。中世には小荒乳村、江戸時代から明治22年までは小荒路村、明治22年から昭和29年までは剣熊村と変わっているが、古くから北陸や湖北に通じる交通路の要地であった。

律令制下の北陸道（西近江路）は、大津～勝野津～石庭～敦賀のコースが推定され、石庭付近が「延喜式」に記された宿駅の柄結駅であろうとされている<sup>①</sup>。平安時代末頃になると大津～海津～敦賀が主要路となり、七里半越の名称がつけられるようになる。野口字無限家には剣熊関跡があり、小荒路の集落から東山の万治越えは、大浦方面へ抜ける唯一の交通路であった。

また、マキノ町は古代の鉄生産地として注目される。現在町内には 9箇所の製鉄跡があり、昭和43年に発掘調査された北牧野 A 遺跡は奈良時代の製鉄遺跡、昭和54年に調査された北牧野 E 遺跡は平安時代の製鉄遺跡であることが確認されている。そして、これらは「続日本紀」に記された近江国高島郡の鉄穴との関連ある遺跡としてとらえられている。

マキノ町の西部山麓の北牧野、西牧野、白谷、石庭、森西には、横穴式石室をもつ古墳時代後期の群集墳が



第1図 遺跡位置図

1. 調査地
2. 沼岡港跡
3. 野口門所遺跡
4. 野口尼寺遺跡
5. 海道寺遺跡
6. 小荒路遺跡
7. 海津B遺跡
8. 海津A遺跡
9. 海津C遺跡
10. 掌学坊遺跡
11. 天神社裏山B遺跡
12. 天神社裏山A遺跡
13. 海津天神社遺跡
14. 海津大宮遺跡
15. 西浜遺跡
16. 万見寺遺跡

第2図 小荒路十寺道路トレンド配図



あり、中でも北牧野には96基、西牧野には46基が確認され、特に畜糞塚は石棚付横穴式石室をもつ古墳として注目されている。周辺地形と立地からみて、これら大規模な古墳群が形成される背景の一つとして、鉄生産との関連が考えられている。<sup>④</sup>

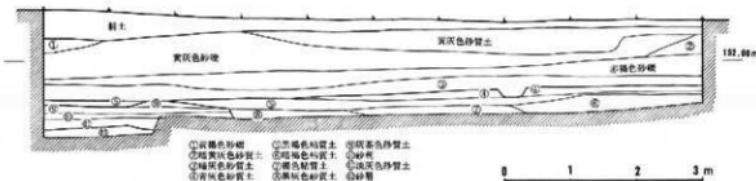
### 3. 調査の経過

発掘調査は、昭和59年4月23日から5月19日まで実施した。調査時にはすでに北側山裾の用水路は完成しており、工事の排土によって水田の旧地形が不明になった箇所もあったが、まず、は場整備によって削平をうける部分にバックホウを使ってトレーナーを設定し、構造・遺物等の確認を行った。地形的に全体に耕土層が薄く、各トレーナーは、耕土と下層の土を区別しながら、掘り下げた。南側から順次2m×5mのトレーナーを設定し、写真撮影、土層図をとりながら調査していくが、遺物、構造は検出されなかった。ただ、第41トレーナーでピットを検出したためトレーナーを拡張して精査したが、数個のピットと平安時代末頃の灰釉陶器1点が出土したにすぎず、明確な建物跡にはならなかった。

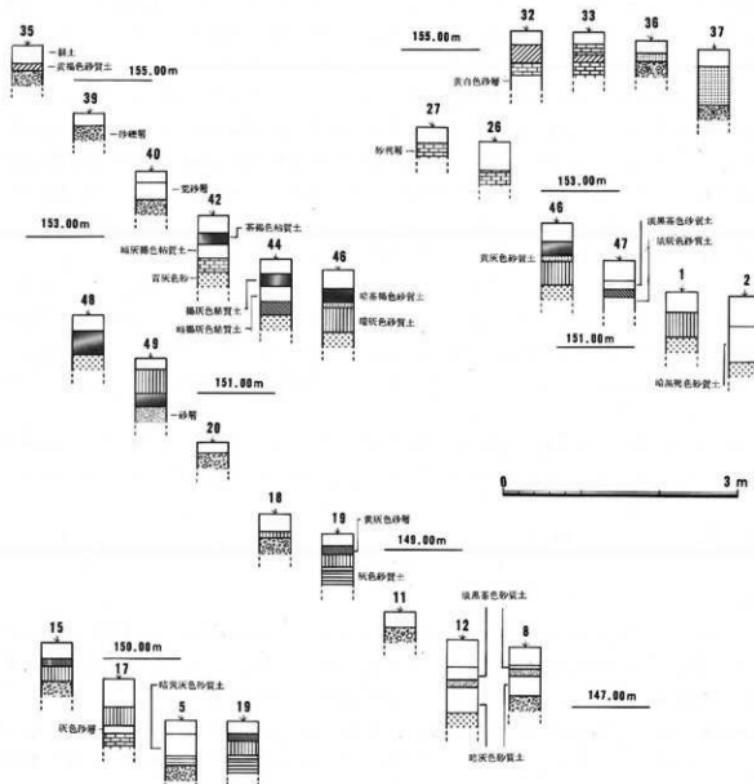
調査がかなり進んだ頃、用水路工事で露出した地層断面に遺物が含まれていることに気づき、周辺を精査したところ排土中から多くの土器片が見つかったため、その地点に第50トレーナーを設定し調査を行った。結果は、地表から約1.4m掘り下げたところで池か沼状の落ち込みの端の部分が検出され、コンテナ箱の遺物が出土した。落ち込みは北へ伸びる様相を示していたが、トレーナーが用水路の際であることや、遺物検査面が深くは場整備の影響を受けないことなどから、今回の調査ではトレーナーを拡張せず、遺物出土の確認のみにとどめた。

### 4. 調査の結果

調査地全体は、東から西へ低くなっている、高低差は約10.3mで、中央部分が葦や蒲のはえた湿地であった。調査トレーナーの主な土層堆積状況をみてみると、第42~49トレーナーでは、約20cmの耕土下は、茶褐色砂質土、暗灰褐色粘質土、青灰色砂等の堆積がみられ、調査後1日たつとトレーナーの半分ほど水が溜るほど湧水が多く、溢田の様相を示している。また、第1、2トレーナーも、約30~40cmの耕土下は、暗黒褐色砂質土、暗灰色砂質土、青灰色砂の堆積がみられ、溢田である。調査地区南端の知内川沿いに設けた第3~5トレーナーでは、約20



第3図 第50トレーナー北壁土層断面図



第4図 小荒路十寺遺跡土層模式図

~30cmの耕土下は、黄灰色砂、灰色砂質土、砂礫層の堆積がみられ、砂田の様相を示している。第16トレンチでは、地表から約80cmが砂礫層で、かろうじて畑として使われていた。

調査地区の北部から東部の標高の高い地点に設けた第13~37トレンチの堆積状況をみてみると、約20~30cmの耕土下は、黄褐色砂質土、砂礫層、砂利層の堆積がみられ、砂田であった。第39、40トレンチも、約20cmの耕土下は荒砂、砂礫層で、砂田であった。

調査地区の西部の標高の低い地点に設けた第6~12トレンチをみてみると、まず、第8~11トレンチでは、約20cmの耕土下は砂層、砂礫層が堆積し砂田であるのに対し、第6、7、12トレンチでは、約20~30cmの耕土下は、淡黒茶色砂質土、砂層、暗灰色砂質土、青灰色砂質土の堆積がみられ、様相が異なる。

次に遺物を検出したトレンチをみてみると、第41トレンチでは、当初約20cmの耕土を除去したところ黄灰色

砂質土層にピットを検出したため、 $10 \times 10$ mにトレンチを拡張して精査した。結果は、大小17個のピットと深い溝状の窪みから11世紀末頃の灰釉陶器1点を検出したが、建物等の明確な遺構にはならなかった。しかしこの地点は、東隣に設けた第38トレンチの堆積状況も、約20cmの耕土下は、黄灰色砂質土、暗黃褐色砂質土、黄白色砂質土の堆積であり、土壤が安定した様相を示していることから、なんらかの遺構があった可能性はある。

最後の第50トレンチだが、調査はまず用水路工事の排土を除去することから始まった。約1m積った排土を取り除くと、厚さ約10~20cmの耕土があり、その下層は、黄灰色砂質土、黄灰色砂礫層、赤褐色砂礫層などが約1m堆積している。それを除去すると、黒褐色粘質土、黒灰色砂質土、褐色粘質土の遺物包含層が検出された。層の厚さは約10~30cmあり、中から土器片、木製品がコンテナ箱出土した。トレンチの西部分には、約40cmの砂質土、砂利層の堆積がみられ、この層中には遺物は含まれていなかった。

平面的にみると、遺物包含層はトレンチ全面ではなく、トレンチの北端から約4mの広がりがあった。各層ごとに遺物を取り上げながら遺物包含層を除去した結果、深さ約30cmの落ち込みになり、その南端に細い杭列が検出された。土層や落ち込みの状況から判断して、池又は沼などの湿地になると考えられる。この湿地はトレンチの北側へ広がる様相を示しており、排土中から検出された土器類は、この遺物包含層と同一のものと考ええた。

用水路の北側に露出していた遺物包含層については、土層、標高、土器の年代等から、第50トレンチで検出された遺物包含層とは異なり、今回の調査範囲からは外れたが、山裾になんらかの遺構があると推定された。

## 5. 遺 物

### (第50トレンチ)

出土遺物は、大部分が黒灰色砂質土、黒褐色粘質土内から検出され、十数点程青灰色砂、砂層からも出土している。分層にもとづき遺物を分けて取り上げたが、明らかな型式差は認められず、また、当初見つかった排土中の土器類も同一地点であることから、ここでは一括して取り扱うことにする。

遺物には、須恵器、土師器、施釉陶器、無釉陶器、墨書き器、転用硯、木製品などがある。種類別では、須恵器が圧倒的に多く出土土器全体の割を占め、土師器は 割、綠釉陶器100数点、墨書き器85点、転用硯31点、無釉陶器50点がおもだった数量である。

### (I) 須恵器

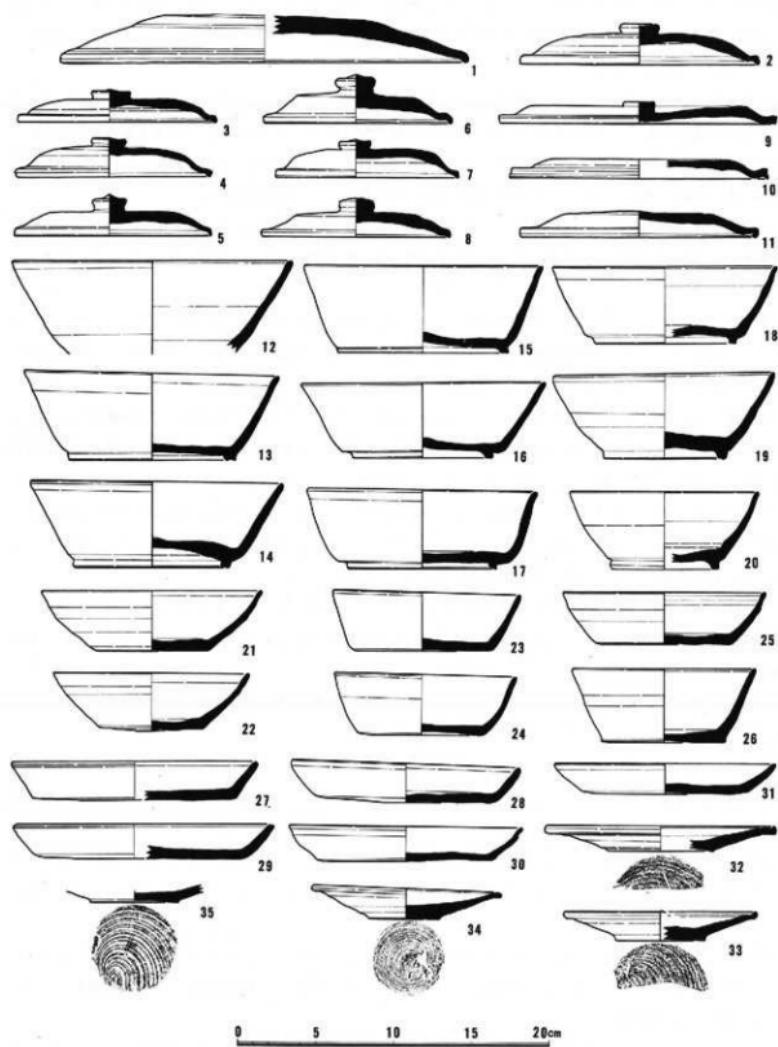
器種には、杯蓋、杯身、皿、壺、甕、鉢などがある。

杯蓋（挿図第5、7図、写真図版4、5、18）（53~56、71、72、74、75、79~81、119、120、203、204）は黒灰色砂質土、（186）は砂層、（11、70、73、205~208）は黒褐色粘質土、（1~10、57、76~78、116~119、121~123、199~201）は排土中から出土した。

杯蓋には宝珠状のつまみが付き返りのつかないもの（1~10、53~57、70~79、116~123、186、199、201、203、205~208）とつまみも返りも付かないもの（11、80、81、200、204）がある。

杯蓋A（1） 直径25.8cmほどの最も大型のものである。口縁端部はわずかに折り曲げて肥厚させる。天井部は回転鎔削り。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈し、焼成はやや軟。

杯蓋B（2、53、54、117） 直径14.1cm~15.9cm、器高 2.3cm~3.2cmほどの大きさで、丸味を帯びた天



第5図 出土土器実測図

井部と屈曲する縁部をもつ。直径 2.5cm~3cm の宝珠状のつまみが付き、天井部は粗いナデ、口縁部から内面にかけて丁寧なナデ仕上げである。胎土は(2)は精良、(53, 54, 117)は2、3mmの砂粒を含む。(2)は暗灰色、(54)は灰色、(53, 117)は灰白色を呈する。焼成は(2)は硬、(53, 54, 117)はやや軟かい。(53, 54)は墨書きがある。

杯蓋C (9, 10, 121~123) 直径16.4cm~17.6cm、器高 1.5cm~2.4cmほどの大きさで、口径の割に器高が低い杯蓋である。つまみは直径 2.2cm~2.4cm の扁平な宝珠状のものがつく。ほぼ水平な天井部をもち、縁部は屈曲し、口縁端部を上下につまみ出すもの(10, 121, 123)がある。天井部は粗いナデ、口縁部から内面にかけては丁寧なナデ仕上げである。胎土は良、暗灰色を呈し、焼成は硬い。

杯蓋D (120) 直径18cmほどの大きさで、杯蓋Cとは大きさのうえで変わりはないが、器高がやや高く、天井部から縁部にかけてやや直線的である。胎土は良、淡灰色を呈し、焼成は硬く、外面に自然釉が付着している。

杯蓋E (75, 79) 直径14cm~14.8cm、器高 2.4cm~2.8cmほどの大きさで、杯蓋Bよりも天井部がやや水平で、つまみもしっかりした宝珠状のものが付く。(75)は天井部に部分的に荒削りが施され、(79)はナデ仕上げである。胎土は良、灰色を呈し、焼成は硬い。どちらも転用窯に使われている。

杯蓋F (3~5, 7, 72) 直径11.6cm~13.3cm、器高 2.1cm~2.7cmほどの大きさで、杯蓋Bを小さくしたものである。胎土は(3)は3mm~1cmの小石を含み、(7)は砂粒を含むが、他は良。(3)は暗青灰色、他は灰色を呈す。焼成は硬い。ナデ仕上げ。(72)は転用窯に使われている。

杯蓋G (6, 8) 直径11.9cm、器高 2.5cm~3.1cmほどの大きさで、天井部から縁部にかけて直線的で、器壁が厚い。(6)は縁部の屈曲が強く宝珠つまみが付く。(8)は縁部の屈曲は弱く、扁平なつまみが付く。胎土は5mmの小石を含み、灰色を呈し、焼成は硬い。ナデ仕上げ。

杯蓋H (70) 直径12.3cm、器高 2.7cmほどの大きさで、天井部が小さく、縁部にかけて直線的である。口縁端部は断面方形で、小さく扁平なつまみが付く。胎土は良、灰白色を呈し、焼成は硬い。ナデ仕上げ。転用窓に使われている。

杯蓋I (116) 直径14.8cm、器高 4.2cmほどの大きさで、縁部は屈曲し、口縁端部は内傾する。胎土は砂粒を含み、暗青灰色を呈し、焼成は硬い。ナデ仕上げ。

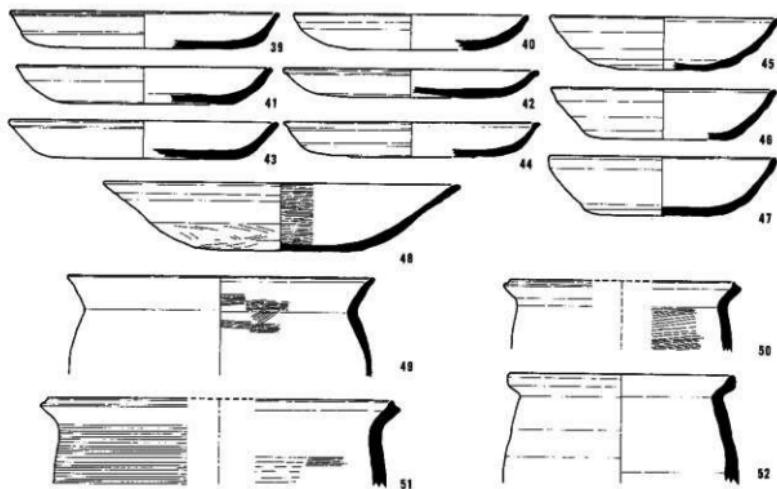
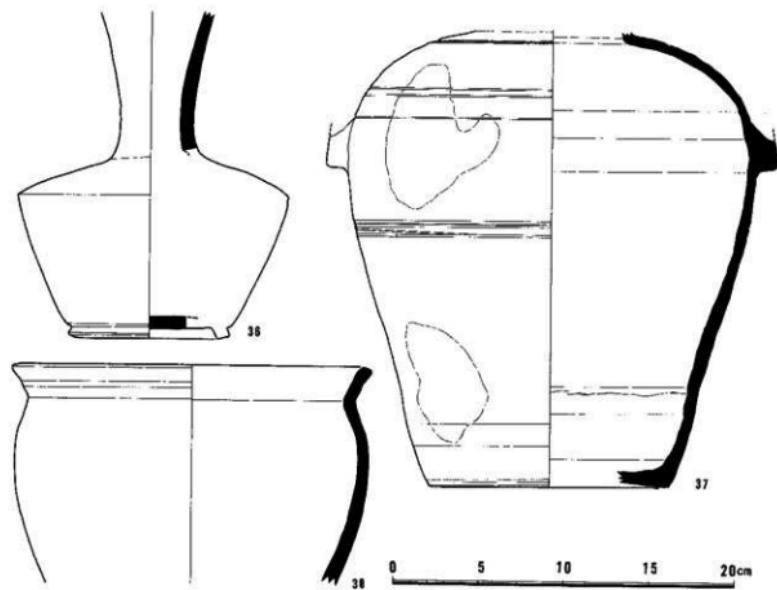
杯蓋J (71) 直径12.8cm、器高 3.1cmほどの大きさで、天井部から縁部にかけてなだらかで、口縁端部は断面三角形である。扁平なつまみが付く。胎は2、3mmの砂粒を含み、青灰色を呈し、焼成は硬い。転用窓に使われている。

杯蓋K (55, 57) 直径12.1cm~12.8cm、器高 2cmほどの大きさで、天井部は水平で広い。器壁は厚く、口縁端部を下方につまみ出す。扁平なつまみが付く。胎土は砂粒を含み、(55)は暗青灰色、(57)は灰白色を呈す。焼成は硬く、ナデ仕上げ。どちらも墨書きがある。

杯蓋L (56, 77, 118) 直径13cm~15.2cm、器高 2cmほどの大きさで、全体に扁平で、口縁端部を下方につまみ出す。胎土は良、(56, 77)は灰色、(118)は暗青灰色を呈し、焼成は硬い。(56)は墨書きがあり、(77)は転用窓に使われている。

杯蓋M (73, 74) 直径12.7cm~13.1cmほどの大きさで、扁平で、天井部が広く、縁部は屈曲する。胎土は良、灰色を呈し、焼成は硬い。どちらも転用窓に使われている。

杯蓋N (76) 直径14.0cm、器高 1.6cmほどの大きさで、扁平で天井部が広く、縁部を弱く屈曲させ口縁



第6図 出土土器実測図

部は丸くおさめる。肩平なつまみが付く。胎土は5mmの小石を含み、灰色を呈し、焼成は硬い。転用碗に使われている。

杯蓋O (78) 直径11.9cm、器高 2.2cmほどの大きさで、天井部から縁部にかけて丸味を帯び、屈曲させて口縁端部は断面方形である。肩平なつまみが付く。胎土は精良で、淡灰色を呈し、焼成は硬い。転用碗に使われている。

杯蓋P (119) 直径12.0cmほどの大きさで、丸味を帯び、口縁端部を下方へつまみ出す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈し、焼成は硬い。

杯蓋Q (11、80、81、200、204) 直直径14.0cm~14.8cm、器高 1.7cmほどの大きさで、つまみが付かない。縁部は屈曲する。胎土は良、灰色を呈し、焼成は硬い。(80、81、200、204)は転用碗として使われている。

以上の他に転用碗として使われている(199、201、203、205~208)墨書のある(186)もあるが、破片のため分類を省略した。

杯身(挿図5、7、写真図版5~7、16~18) (16、26、58、59、86~88、127、128、132、133、136、188~191、195、196)は黒灰色砂質土、(12、19、20、22、61~63、124、126、129、130、135、137、187、193、194、209)は黒褐色粘土質土、(25、140、197、198)は青灰色砂層、(13~15、17、18、21、23、24、60、125、134、138、139、141、242)は排土中より出土した。

杯身には高台の付くもの(12~20、58~61、86~88、124~129、133)、付かないもの(21~26、62、63、130~132、134~141、242)がある。

杯A (12) 口径17.6cm、残存高6cmほどの大きさで、体部は強く外傾する。胎土は3mmの砂粒を含み、灰色を呈す。焼成は硬い。

杯B (13~15、127、133) 口径15cm~16.2cm、器高 5.6cmほどの大きさで、体部はゆるやかに外傾し、断面方形の高台が付く。高台はわずかに外方に踏んばるものと内傾するものがある。胎土、焼成とも良く、暗灰色を呈す。外面に自然釉の付着がみられる。

杯C (16) 口径15.5cm、器高 4.9cmほどの大きさで、体部は強く外傾する。高台は底部と体部の境よりやや内側に付く。胎土、焼成とも良く、暗青灰色を呈す。

杯D (17) 口径14.5cm、器高 5.1cmほどの大きさで、体部は内湾ぎみにあがり、口縁部を外反させる。高台は低く、やや内側に付く。胎土、焼成とも良く、青灰色を呈す。

杯E (18、58、60、126) 口径11.7cm~14.1cm、器高 4.4cm~5cmほどの大きさで、体部はゆるやかに外傾する。胎土は(18、60、126)は良、(58)は砂粒を含む。灰色を呈し、焼成は硬い。(58、60)は墨書がある。

杯F (19) 口径14.4cm、器高 5.5cmほどの大きさで、体部は内弯ぎみに立ちあがり、口径に比べて高台径が小さい。胎土、焼成とも良く、青灰色を呈す。

杯G (124) 口径14cm、器高 6cmほどの大きさで、体部はゆるやかに外傾し、高い高台が付く。胎土、焼成とも良く、青灰色を呈す。

杯H (61) 口径14cm、器高 5.2cmほどの大きさで、体部は内弯ぎみに立ちあがり、口縁部を外へひっくる。高台は高く、外方へ踏んばる。胎土、焼成とも良く、灰色を呈す。墨書がある。

杯I (20、59、125、128、129、132、137、196) 口径11.9cm~12cm、器高 4cm~5cmほどの大きさで、体部はやや内弯ぎみに立ちあがり、しっかりした高台が付く。(125)は暗灰色、(20、59、129、132、

137、 196) は灰色、 (128) は青灰色を呈し、胎土、焼成ともに良い。 (59、 196) は墨書きがある。

杯J (21、 22、 130、 134、 136) 口径12.5cm~14cm、器高 3.8cm~ 3.9cmほどの大きさで、体部は内湾ぎみに外方へ立ちあがる。底部は平底。灰色を呈し、胎土、焼成とも良い。

杯K (62、 63、 190) 口径13.3cm~14.7cm、器高 4.2cm~ 4.3cmほどの大きさで、体部は内湾ぎみに外方へ立ちあがり、丸底ぎみの底部である。胎土は良く、灰白色を呈し、焼成は軟かい。ともに墨書きがある。

杯L (23、 24、 138、 140、 242) 口径11.6cm~12.7cm、器高 3.8cmほどの大きさで、体部は外方に開き、平底の底部である。 (23、 24) は暗灰色、 (138、 140、 242) は暗黄灰色を呈す。胎土、焼成ともに良。

杯M (25) 口径12.8cm、器高 3.4cmほどの大きさで、体部は内湾ぎみに外方へ開き、口縁部を外へつまむ。胎土、焼成ともに良く、灰白色を呈す。

杯N (26、 131、 135) 口径11.6cm、器高 4.8cmほどの大きさで、体部が外方に開く深い杯である。胎土、焼成ともに良く、灰色を呈す。

杯O (139、 141) 口径12cm、器高 3cmほどの大きさで、体部は外方に開き、平底の底部である。胎土は砂っぽく、焼成は軟かい。底部は赤褐色、体部は淡灰色を呈す。

以上の他に転用硯として使われている (86~88、 209)、墨書きのある (187~189、 197、 198) もあるが、破片のため分類は省略した。

皿 (挿図5、 7、 写真図版7、 8、 13、 16、 18) (27、 31、 33、 34、 66、 82、 84、 146) は黒灰色砂質土、 (29、 32、 64、 65、 83、 85、 143、 155~158、 202) は黒褐色粘質土、 (28、 30、 35、 142、 144、 145、 147) は耕土中より出土した。

皿には平底のもの (27~31、 64~66、 142~147、 202) と、底部回転糸切りのもの (32~35、 82~85、 155~158) がある。

皿A (27、 147) 口径15.6cm、器高 2.5cmほどの大きさで、体部は底部より強く屈曲し、直線的に短く立ちあがる。胎土、焼成ともに良、 (27) は暗灰色、 (147) は青灰色を呈す。

皿B (28、 143) 口径14.5cm、器高 2.5cmほどの大きさで、底部から体部にかけて丸味をおび、体部はやや内湾ぎみに立ちあがる。器壁はやや厚く、胎土、焼成ともに良。灰色を呈す。

皿C (29、 31) 口径13.9cm~14.8cm、器高 2 ~ 2.3cmほどの大きさで、体部は内湾ぎみに立ちあがる。器壁はやや薄く、胎土、焼成ともに良。灰色を呈す。

皿D (30) 口径17.4cm、器高 2.3cmほどの大きさで、体部は直線的に外方に開き、口縁端部に平坦面をもつ。胎土、焼成ともに良。灰色を呈す。

皿E (64~66、 142、 144~146、 202) 口径13.4cm~14.8cm、器高 2.2cm~ 2.3cmほどの大きさで、体部は内湾ぎみに立ちあがる。胎土は良、焼成はやや軟。(64、 142、 146) は灰色、 (65、 66、 144、 145) は灰白色を呈す。 (64~66) は墨書きがある。

皿F (32、 33、 83~85) 口径12cm~14.7cm、器高 1.7cm~ 2.3cmほどの大きさで、回転糸切りの底部をもち、縁部を屈曲させる。胎土、焼成ともに良。 (32、 33、 84、 85) は暗灰色、 (83) は灰白色を呈す。 (83~85) は転用硯として使われている。

皿G (82) 口径12.8cm、器高 1.8cmほどの大きさで、回転糸切りの底部をもち、口縁部を外方へつまみ出する。胎土、焼成ともに良。暗灰色を呈す。転用硯に使われている。

皿H (34) 口径11.6cm、器高 2cmほどの大きさで、回転糸切りの底部をもち、口縁部をやや外反させ、縁

部を丸くおさめる。胎土はやや砂っぽく、黄灰色を呈し、焼成は硬い。手法からみると須恵器だが、土師器か無釉陶器の可能性もある。

以上の他に（35、55～158）があるが、底部の破片であるので、分類は省略した。

壺瓶類（挿図6、写真図版8、12）（37、153、154）は黒灰色砂質土、（36）は砂層、（152）は排土中より出土した。

長頸瓶（36）高台径8.1cm、肩高8.4cmほどの大きさで、高台は体部と底部の境に付き、強く外に踏んばる。胎土、焼成ともに良。暗青灰色を呈す。

双耳瓶（37）底径14.1cm、残存高27cmほどの大きさで、平底の底部をもち、方形の耳が付くと思われる。胎土、焼成ともに良。暗青灰色を呈す。

（152～154）は破片のため器形がはっきりしない。

壺（写真図版11、12）（149、150、151）は黒灰色砂質土から出土。（149）は器壁が薄く、体部内面は頸部まで細かい同心円タタキが残る。外面は平行タタキで肩部まで緑色の釉がかかる。胎土は精良、灰白色を呈す。（150）は器壁が厚く、体部内面は頸部まで細かい同心円タタキが残る。胎土、焼成ともに良。暗青灰色を呈す。（151）は、体部外面は強い平行タタキ、内面は頸部まで強い同心円タタキ。胎土、焼成ともに良。暗青灰色を呈す。

鉢（挿図6、写真図版12）（38）は排土より出土した。口径20.3cmほどの大きさで、短く外上方へ開く口縁部と、肩部は余り張らず丸味を帯びた体部をもつ。内外面ロクロナデ。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟かい。暗灰色を呈す。

## （II）土師器

器種には、皿、杯、盤、甕などがある。

皿（挿図6、7、写真図版8、14、15、17）（40、41、44、165）は黒灰色砂質土、（39、67）は黒褐色粘質土、（42、43、178、181）は排土中より出土した。

皿A（39、165、178）口径15.6cm、器高2.2cmほどの大きさで、平底の底部から短く外方に開く体部をもつ。口縁端部はやや外方へつまみ出し外傾斜面をつくる。胎土、焼成ともに良。（39、165）は淡赤灰色、（178）は淡灰白色を呈す。

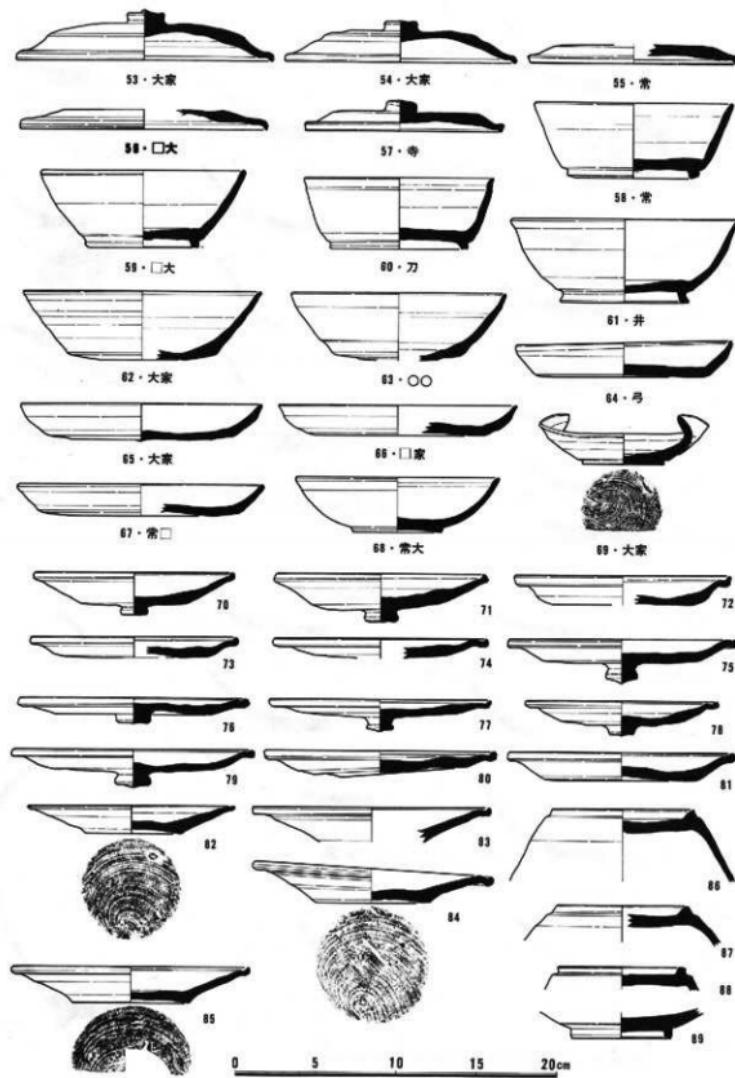
皿B（40、41、67）口径13.6cm～14.7cm、器高2.1cm～2.2cmほどの大きさで、底部から体部にかけて丸味を帯び、体部は内湾ぎみに開き、口縁端部をつまみ出して丸くおさめる。胎土、焼成ともに良。淡赤灰色を呈す。（67）は墨書きがある。

皿C（42）口径14.7cm、器高1.8cmほどの大きさで、底部から体部にかけて丸味を帯び、体部は内湾ぎみに開き、口縁端部を外方へつまみ出し丸くおさめる。胎土、焼成ともに良。赤黄色を呈す。

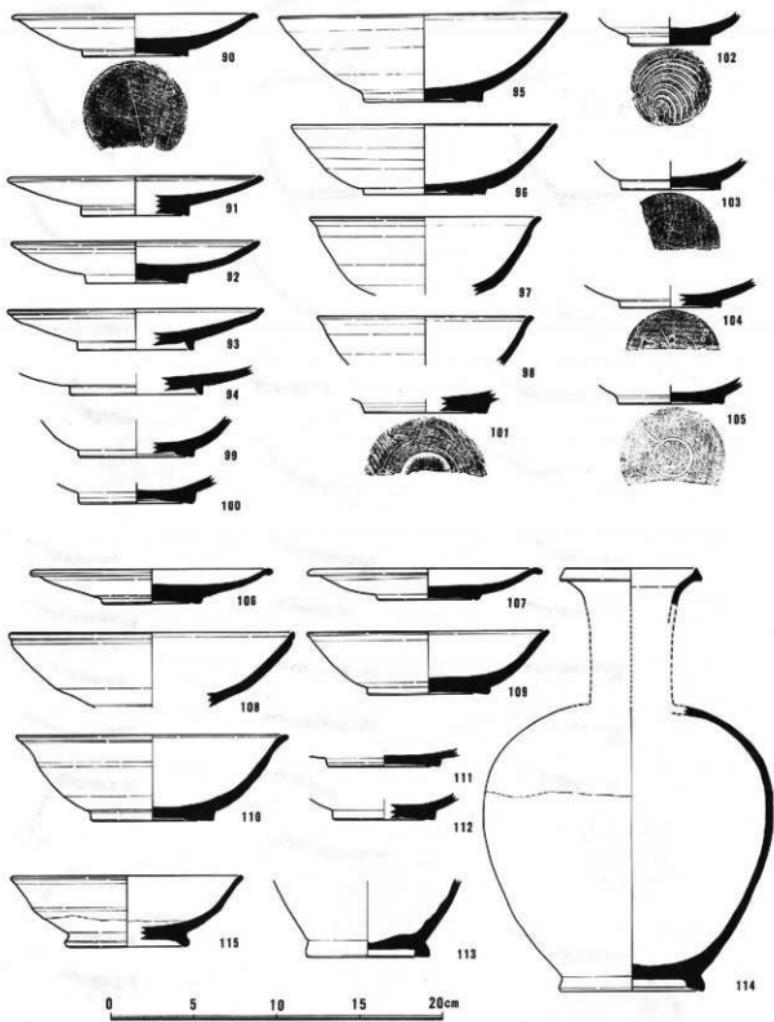
皿D（43）口径15.6cm、器高2.3cmほどの大きさで、平底の底部から外反ぎみに開く体部をもち、口縁端上方に面を作る。胎土、焼成ともに良。淡赤黄色を呈す。

皿E（44）口径14.8cmほどの大きさで、内湾ぎみに開く体部をもち、口縁端部を強く外方へつまみ出し、上方に面を作る。胎土、焼成ともに良。淡赤黄色を呈す。

以上の他に、平底の底部から直線的に開く体部をもち、口縁端部に平坦面をもつ（181）もあるが、破片のため分類を省略した。



第7図 出土土器実測図



第8図 出土土器実測図

杯（挿図6、写真図版14、15、17）（46、166、191、195）は黒灰色砂質土、（45、47、194）は黒褐色粘質土、（179、180、182）は埴土中より出土した。

口径13.2cm、器高3cm～3.5cmほどの大きさで、平底の底部から内湾ぎみに聞く体部をもち、口縁端部を丸くおさめる。胎土、焼成とともに良。赤褐色を呈す。（47）は外面全体に煤が付着する。（191、194、195）は墨書きがある。

盤（挿図6、写真図版9）（48）は埴土中より出土した。

口径20.7cm、器高4cmほどの大きさで、平底の平部から大きく外方へ聞く体部をもち、口縁端部を丸くおさめる。内面は密なヘラ磨きを施した後、炭素を吸着させる。外面は体部中程から底部にかけてヘラ削り、縁部は横ナナ。胎土、焼成とともに良。外面は赤灰色を呈す。

壺（挿図6、写真図版14、15）（49、50、167～169、173）は黒灰色砂質土、（51、52、243）は埴土中より出土した。

（49）口径17.3cmほどの大きさで、口縁部はくの字に外反し、端部を上方につまむ。内面に炭化物付着。胎土は砂粒を含み、焼成は良。暗赤褐色を呈す。

（50）口縁部はくの字に外反し、端部を上方につまみ上げ平坦面をつくる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟。淡赤灰色を呈す。

（51）口縁部は短く外反し、口縁端部を上方につまみ出す。ロクロ成形で体部外面はカキ目調整。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟。赤黄色を呈す。

（52）口縁部は受け口状である。ロクロ成形。胎土は砂粒を含み、焼成は軟。赤灰色を呈す。

（167）口縁部はくの字に外反し、端部は内側に肥厚させる。胎土、焼成ともに良。灰白色を呈す。

（168）口縁部は短く外反し肥厚する。胎土、焼成とともに良。暗赤灰色を呈す。内面に炭化物付着。

（169）口縁部は短く外反し、端部を内側に肥厚させる。胎土、焼成ともに良。暗赤灰色を呈す。

（173）口縁部は受け口状で、ロクロ成形か。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟。暗赤灰色を呈す。

（243）口縁部は短く外反し、端部を上方へつまみ出す。ロクロ成形か。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟。赤褐色を呈す。

以上の他に、椀（172、171）、内黒の椀（170）、回転糸切り（174、175）などの底部もあるが、破片のため詳細は不明。（176、177）は甕の底部と思われる。（183）は台付皿の脚、（184）は甕の口縁かと思われる。

### （III）綠釉陶器

器種には、皿、碗があり、100数点を数える。

皿（挿図8、写真図版10、19）（90～92）は黒灰色砂質土、（93、94）は埴土中より出土した。

皿A（90、91）口径14.2cm～14.8cm、器高2.4cm～2.6cmほどの大きさで、削り出しの平高台である。（90）は口縁端部を強く外反させ、（91）は口縁端部を内側に肥厚させる。高台及び高台近くには強いヘラ削り、体部から口縁部にかけて弱いヘラ削りで調整されている。釉は刷毛塗りで施され、暗緑色を呈す。胎土は灰褐色を呈する硬質のもので、内面に一重の重ね焼き痕がみられる。（90）はヘラ記号がある。

皿B（92）口径14.8cm、器高2.6cmほどの大きさで、削り出しの蛇の目高台である。体部は内湾ぎみに聞く、口縁部内面に一条の浅い凹線が入る。ヘラ削りで調整され、内底面は一方向、口縁部内面は横方向に磨かれる。釉は刷毛塗りで施され、暗緑色を呈す。胎土は灰褐色を呈す硬質のもので、内面に一重の重ね焼き痕が

みられる。

皿C (93、94) 口径15.1cm、器高 2.5cmほどの大きさで、削り出しの輪高台である。(93)は口縁部を上方に折り曲げる。ヘラ削りで調整され、釉は刷毛塗りで(93)は暗緑色を呈す。(94)は黒く銀化している。胎土は(93)が灰褐色、(94)が灰色を呈する硬質のもので、内面に一重の重ね焼き痕がある。

耳皿 (102) 高台径5cmほどの大きさで、回転糸切りの底部である。内外面ロクロナデのみで、ヘラ削りは施されていない。釉は刷毛塗りで暗緑色を呈す。高台には施釉されてない。胎土は灰褐色を呈し硬質のものである。

椀 (挿図8、写真図版10、19) (95)は黒灰色砂質土、(96~98)は排土中より出土した。

椀A (95、96) 口径15.7cm~17.2cm、器高4.3cm~5.3cmほどの大きさで、体部は内ぎみに開き、口縁端部はわずかに肥厚する。(95)は口縁部内に一条の浅い凹線が入る。ヘラ削りで調整され、釉は刷毛塗りで暗緑色を呈す。胎土は灰褐色を呈する硬質のもので、(95)は内面に一重の重ね焼き痕と三又トチ痕がみられる。

椀B (97、98) 口径12.8cm~13.8cmほどの大きさで、口縁端部を外反させる。ヘラ削りで調整され、釉は刷毛塗りで、(97)は黒く銀化しており、(98)は暗緑色を呈す。胎土は(97)が灰色、(98)が灰褐色を呈する硬質のものである。

この他に出土した多数の破片のうち主なものとしては、(102、104、215、216)が黒灰色砂質土、(217)が灰褐色粘質土、(99~101、103、105、210~214)が排土中より出土した。

(103、104、210~212、215、217)は削り出しの平底であるが、破片のため器形は不明。(103、104)は暗緑色を呈し、胎土は灰褐色を呈し硬質のものである。ヘラ記号がある。(210)は黒く銀化し、高台には施釉されてない。胎土は灰色を呈し軟質のものである。(211、215、217)は明緑色を呈し、胎土は淡茶褐色を呈し軟質のものである。(212)は緑色を呈し、胎土は淡茶褐色の軟質のものである。

(99~101、214)は削り出しの蛇の目高台である。(99)は黒く銀化し、胎土は淡茶褐色を呈し軟質である。(100)は明緑色を呈し軟質である。(101)は緑色を呈し、胎土は淡茶褐色を呈し軟質である。高台底部の削りが弱く、糸切り痕が残る。(214)は緑色を呈し、胎土は淡茶褐色を呈し軟質である。

(105)は平高台に一重の沈線を施した、蛇の目高台の退化形態と思われるものである。薄く施釉され黄緑色を呈す。胎土は灰色を呈し硬質である。

(213、216)は削り出しの輪高台である。(213)は暗緑色を呈し、胎土は淡茶褐色を呈し軟質のものである。(216)は暗緑色を呈し、高台内には施釉されてない。胎土は淡茶褐色を呈し軟質である。

#### (IV) 無釉陶器

器種には、皿、椀があり、50数点を数える。

皿 (挿図7、8、写真図版10、20) (106)は黒褐色粘質土、(69、107、220)は排土中より出土した。

(106、107) 口径13.6cm~14.6cm、器高 1.9cm~ 2.1cmほどの大きさで、平底である。口縁端部を外反させる。(106)は外面ヘラ削りが施されているが、内面はナデのみである。胎土は淡茶褐色を呈し、軟質のものである。(107)は内外面ヘラ削りが施されているが、口縁部外面に横ナデが残る。胎土は灰色を呈し、硬質のもので、内面に重ね焼き痕が残る。

(220) 削り出し輪高台で、口縁端部を上方に折り曲げる。内外面ヘラ削りが施され、胎土は灰色を呈し、硬質のものである。内面に重ね焼き痕が残る。

- (69) 耳皿で、回転糸切りの底部である。内外面ともに横ナデのみである。墨書がある。
- 楕（挿図7、8、写真図版10、17、20） (68、110) は黒灰色砂質土、(108、109、222) は黒褐色粘質土から出土した。
- (108) 口径17cmほどの大きさで、口縁部外面に一条の凹線が入る。内外面横ナデ、胎土は灰色を呈し、硬質のものである。
- (109) 口径14.3cm、器高 3.8cmほどの大きさで、平高台である。内外面に粗いヘラ削りが施される。胎土は淡茶褐色を呈し、軟質である。
- (110、222) 口径16.4cm、器高 5.2cmほどの大きさで、蛇の目高台である。口縁端部は外反させる。内外面に粗いヘラ削りを施す。胎土は淡茶褐色を呈し、軟質である。
- 以上の他に底部の破片がある。(89) は拂土から出土した。輪高台で、外面へラ削り、内面はナデのみである。胎土は灰色を呈し、硬質のものである。転用硯に使われている。(111、218、219、221、223) は平高台である。外面へラ削り、内面はナデのみである。(111、218、219、223) は胎土が淡茶褐色を呈し軟質のもの、(221) は胎土が淡灰色を呈し硬質のものである。(224) は回転糸切りの底部で、内外面粗いヘラ削りを施す。胎土は灰色を呈し硬質のものである。
- (V) 灰釉陶器（挿図8、写真図版10）
- (113) は黒褐色粘質土から出土した。輻広な高台が付き、外方へ踏んばる。胎土は灰白色の精良なものである。(114) は黒灰色砂質土から出土した長頸壺である。体部は丸味を帯び、外方に踏んばる高台が付く。
- (VI) 墨書き土器（挿図第7図、写真図版16、17、表1）
- 今回出土した墨書き土器は破片を含めて85点を数えるが、須恵器の杯蓋、杯身、皿、土師器の杯身、皿、無釉陶器の耳皿、柄など、すべて供膳形態である。
- 墨書きされる部位は、杯蓋が天井部外面に記されたもの12点、天井部内面に記されたもの1点、口縁部外面に記されたもの1点、杯身は底部外面に記されたもの30点、体部外面に記されたもの17点、皿は底部外面に記されたもの19点、体部外面に記されたもの1点、楕は底部外面に記されたもの2点、体部外面に記されているもの1点、底部外面・体部外面の2箇所に記されたもの1点を数える。
- 墨書きの内容は、解読可能な文字として「大家」、「常大」、「常大家」、「常」が約半数を占め、他に、「寺」、「刀」、「井」、「○」などが認められる。「大家」はオホヤケと綱むことができ、ミヤケに相対する語としてとらえられ、遺跡の性格を表わすと思われる。<sup>⑤</sup>
- (VII) 転用硯（挿図第7図、写真図版9、18）
- つまみの付く杯蓋の内面を用いたもの(70~79、199、201、203、205~208)、つまみの付かない杯蓋の内面を用いたもの(80、81、200、204)、皿の内面を用いたもの(82~85、202)、高台付の杯の底部外面を用いたもの(86~88、209)以上須恵器30点、無釉陶器の内面を用いたもの(89)1点に分けられる。つまみ付の杯蓋を使用する方法は、杯身との組み合わせで考えられている。<sup>⑥</sup>

表1 小荒路十寺遺跡出土墨書土器一覧表

・鉢文のうち、墨族があっても判読できないものは□とし、推定できる文字には□。を付して示した。

遺物番号	鉢文	器種	墨書部位	出土層位	博物番号	図版番号	備考
53	大 家	須恵器杯蓋	外 面	黒灰色砂質土	第7回	16	
54	大 家	須恵器杯蓋	外 面	黒灰色砂質土	第7回	16	
55	常	須恵器杯蓋	外 面	黒灰色砂質土	第7回	16	
56	大 家	須恵器杯蓋	外 面	黒灰色砂質土	第7回	16	
57	寺	須恵器杯蓋	外 面	排 土	第7回	16	
58	常	須恵器杯身	底部外面	黒灰色砂質土	第7回	16	
59	常 大	須恵器杯身	底部外面	黒灰色砂質土	第7回	16	
60	刀	須恵器杯身	体部外面	排 土	第7回	16	
61	井	須恵器杯身	底部外面	黒褐色粘質土	第7回	16	
62	大 家	須恵器杯身	体部外面	黒褐色粘質土	第7回	16	
63	○	須恵器杯身	体部外面	黒褐色粘質土	第7回	16	2カ所に墨書
64	弓	須恵器皿	底部外面	黒褐色粘質土	第7回	16	
65	大 家	須恵器皿	底部外面	黒褐色粘質土	第7回	16	
66	□ 家	須恵器皿	底部外面	黒灰色砂質土	第7回	16	
67	常 □	土師器皿	底部外面	黒褐色粘質土	第7回	17	
68	常 大	無輪陶器柄	底部外面	黒灰色砂質土	第7回	17	2カ所に墨書
69	大 家	無輪陶器耳皿	底部外面	排 土	第7回	16	底部回転糸切り
186	常	須恵器杯蓋	外 面	砂 層	—	17	転用観
187	常 大	須恵器杯身	底部外面	黒褐色粘質土	—	17	
188	常 大	須恵器杯身	底部外面	黒灰色砂質土	—	17	
189	常 □	須恵器杯身	底部外面	黒灰色砂質土	—	17	
190		須恵器杯身	底部外面	黒灰色砂質土	—	17	
191	大 家	土師器杯身	体部外面	黒灰色砂質土	—	17	
192	□ 太	土師器皿	底部外面	排 土	—	17	
193	常 大	土師器皿	底部外面	黒褐色粘質土	—	17	
194	常 大家	土師器杯身	体部外面	黒褐色粘質土	—	17	
195	常大家	土師器杯身	体部外面	黒灰色砂質土	—	17	
196		須恵器杯身	底部外面	黒灰色砂質土	—	17	
197	□	須恵器杯身	底部外面	青灰色砂層	—	17	
198	寸	須恵器杯身	底部外面	青灰色砂層	—	17	

#### (Ⅷ) 木製品 (写真図版21)

挽物、曲物、箸、下駄などがある。(1~3、6、9、10)は黒灰色砂質土、(4、5)は青灰色砂層、(7、8)は砂層から出土した。

(1、2) 直径21.5cm、器高 1.5cmほどの大きさで、浅い盤状をなす。裏面に細かいきずがみられる。俎として利用されたと思われる。

(3~6) 直径 9.5cm~16.8cm、厚さ 0.5cm~ 0.9cmほどの大きさの曲物の底板である。側板を固定するための木釘が残っている。

(7) かなり損傷しているが、前緒孔に片よりが見られる、左足用の下駄である。歯は削り出され、残存高 3.5cmほどである。前緒孔と齒に使用による磨滅がみられる。

(8) 残存長19.5cm、直径 0.4cmほどの箸である。本と末の区別はない。

(9) 渔網編針と思われる。長さ18.3cm。幅 2.4cm、厚さ 1.6cmの扁平な板を丁寧に削り、先は少しそり反らせてとがらす。中央よりやや後に、 0.4cm× 0.5cmの孔を突つ。

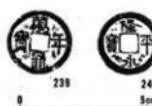
(10) 長さ28cmの有頭棒である。片端を細くして乳頭状に削り出したもの。用途不明。

#### (IX) その他

土錘、貨銭がある。(230~235、238)は排土中より、(236)は黒褐色粘質土より、(239、240)は排土中より出土した。

土錘は2種類あり、(230~236)は直径 1.9cmほどの球形で、直径 0.6cmの孔を突つ。(238)は長さ 3.6cmで、直径 0.4cmの孔を突つ。

(239)は万年通宝で、初鋤は天平宝字四年(760)、(240)は隆平永宝で、初鋤は延暦一五年(796)である。



第9図 貨銭拓影

#### (第41トレンチ)

出土遺物は、灰釉陶器の椀(115)が1点出土したのみである。内湾ぎみに立ちあがる体部から口縁部を外反させる。外方に踏んばるはり付高台で、底部に回転糸切り痕が残る。釉はつけがけで、胎土は粗く、内面に重ね焼痕がある。口径13.7cm、器高 4.3cm。百代寺窯に比定できる。

#### (表 採) (写真図版11、13、15)

調査中に、水路北側の露出していた遺物包含層や第50トレンチ周辺で採集したものが若干あるので、簡単に説明する。

(227、228)は鉄軸、(229)は青磁の小さい玉縁口縁の椀である。(159~164)は灰釉陶器の椀、皿類の底部で、(159)は回転糸切り、(160~164)は回転窓おこしである。(161)は黒窓90号窯、(160、162~164)が折戸53号窯、(159)が東山72号窯に比定されると思われる。

## 6. ま と め

遺物 出土した須恵器や土師器、施釉陶器などから、小荒路十寺遺跡は9世紀初めから中頃の年代があたえ

られよう。

最も量の多い須恵器の中でも、杯蓋、杯身が7割を占めるが、5. 遺物の項で述べたように、杯蓋にバラエティがみられる。天井部が高く口縁部にかけて直線的な杯蓋G～Jのタイプは福井県遠敷郡上中町墓遺跡の出土遺物と類似すると思われ、回転糸切り底部の皿F、Gのタイプとともに北陸との関連も考えられる。また、杯B、Fのタイプの出土遺跡として同郡内にある今津町小依山窯跡がある。これら遺物の詳細については今後の検討にゆだねたいと思う。

綠釉陶器については、すべて削り出し高台であることから、畿内産と思われる。釉厚が薄く、多くは暗緑色に発色するが、これは篠窯、石作窯での出土品より色が深い印象を与える。<sup>⑦</sup> 今のところこの段階（9世紀中葉）での綠釉陶窯は明確でない。

無釉陶は、高台の作り、表面調整、胎土、焼成（一次焼成のみ）など、全て綠釉陶器に共通する。ただ、綠釉陶器が耳皿を除いて内面にはていねいな磨き、外側もヘラ削り調整が施されていたのに対し、無釉陶には内面の磨きが施されていないものが多く、焼成以前から釉薬をかける用意が無かったと思われる。また、内面が回転荒磨きのものがあり、磨きの方法にも綠釉陶器との違いを見ることができる。胎土は綠釉陶器と同じく硬質のものと軟質のものとがあり、一般に言われる釉薬の発色を考えた素地作りに疑問が残るものである。

遺跡の性格 出土した遺物の中で、注目されるものに墨書き器がある。中でも「大家」の文字はオオヤケと読むことができ、この文字の解釈が小荒路十寺遺跡の性格を知るうえで重要だと思われる。「オオヤケ」については吉田孝氏が論考されており、<sup>⑧</sup> それによると地名においても、ウヂ名においても、個人名においても、オオヤケは「小家」・「小宅」ヲヤケに対する相対的な存在であり、「三宅」・「三家」ミヤケよりもはるかに一般的な存在であった。そして、どちらかといえば施設、機関をさす用法が多く、一般的・地地豪族的な性格を持つ語である。この解釈にともづいて考えてみると、ヤケ（ミヤケ）が軍事や交通とも深いかかわりがあったことと遺跡の立地からみて、北陸道とかかわりのある施設と思われ、山尾幸久氏によると、「小荒路」は古くは「小愛発」のこと、「愛発闇」の手前の近江での小関（逢坂関に対して「小関」越えがあるように）と考えられることから、小荒路十寺遺跡の性格として、関所の役割を果す施設であったと思われる。

この地域は、古代には柄結庄に含まれており、「平安文書」に、

慈惠僧正遣告伝、九間二面屋材一具、柄結庄所進、又柄結庄一所、所領田地六十余町、此庄元角好文先祖領也、故判事大膳連口入相添、本公駿永施入了。（天祐三年）

と記されていることや、「続日本紀」に、

賜大師藤原惠美朝臣押勝近江国浅井高嶋二郡鉄穴各一所。（天平宝字六年四月）

焼勢多橋。押勝見之失色。即便走高嶋郡。而宿前少領角家足之宅。是夜有星。落干押勝臥屋之上。其大如模。（天平宝字八年九月）

と記されていることなどを合せ考えると、押勝から鉄穴の管理をまかされており高嶋郡に勢力をもっていた豪族角氏の存在が浮びあがってくる。

また、宿駅の柄結駅の所在について、石庭、浦など説があつて確定していないが、柄結神社のある浦とは約1kmほどの距離にあり、目でみえる範囲にある。

「常」の文字については、地名かとも思われるが、まだ検討する余地があるので、ここではふれない。

余談だが、高嶋郡誌の関の条に、

奈良朝時代に於て七里半越に愛発闇を置く。当時の闇は警固を専としたり。愛発闇は越前の愛発闇と称する

を以て見れば都城外に置かれることは明なるが故に今此に論及せず。鎌倉時代に及びて朝廷は新聞を寺社に寄せ、或は地方の豪族は 新聞を置きたり。是通行税を徴収して收入を図れるものなり。正平元年（貞和二年）同六年（觀応二年）足利幕府は之を厳禁したりしも其令行はれず。其後至る所に新聞あり。或は幕府の料所なり、或は社寺及び地方豪族の領有たり。

とあるも参考になると思う。

以上簡単にまとめたが、ここに掲載されていない遺物も多く、十分に検討しきれず、後日に課題を残した。

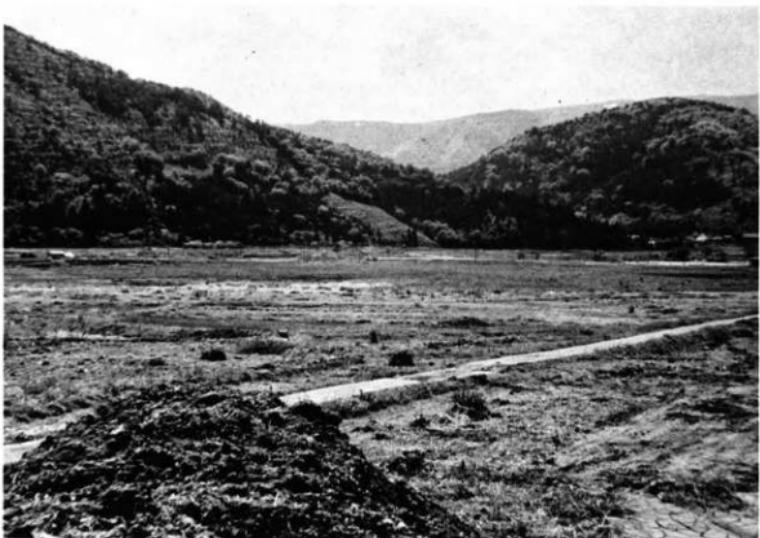
(注)

- ① 森岡謙二郎編「古代日本の交通路II」（大明堂 昭和53年）
- ② 森浩一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告」（『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告第4冊、同志社考古学研究室、昭和46年）
- ③ 昭和54年、滋賀県教育委員会調査
- ④ 前掲②
- ⑤ 吉田孝「律令国家と古代の社会」（岩波書店、昭和58年）
- ⑥ 『飛鳥京跡II』
- ⑦ 寺島孝一氏の御好意により、石作窯出土品と比較検討させていただいた。ただ、石作、篠は10世紀段階のものであり、今回のものとは時期が異なる。
- ⑧ 大阪府吹田市の岸部窯跡が知られるが、「概報」のみで綠釉陶器がどのようなものか定かでない。  
「篠窯跡群」昭和59年、京都府埋蔵文化財調査研究センター、他同所発行の年報。
- ⑨ 寺島孝一氏が石作窯での検出品に、陶片の断面がカマボコ状に磨かれたものがあるのに注目し、これが内面の磨きに用いたものとされている。
- 寺島孝一「畿内の綠釉陶窯」（考古学ジャーナルNo211、1982、ニュー・サイエンス社）
- ⑩ 緑釉陶器の素地には灰色を呈する須恵質のものと、淡茶褐色を呈する土師質のものがあり、釉薬の発色を良くするためあえて軟陶のものも使用したと言われている。このことは、二、三彩等の透明釉を使用する場合は素地の色が強く出るためよく指摘される。
- ⑪ 吉田孝「律令国家と古代社会」（岩波書店、昭和58年）
- ⑫ 前掲①  
高島郡誌全（高島郡教育会、昭和47年）

# 図 版



調査地区北側の山の上より琵琶湖をのぞむ



調査地区全景（東より）



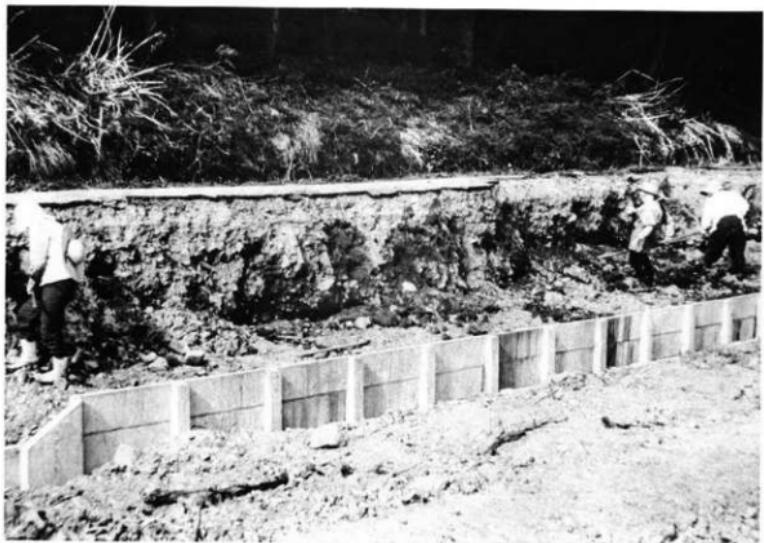
第50トレンチ（西より）



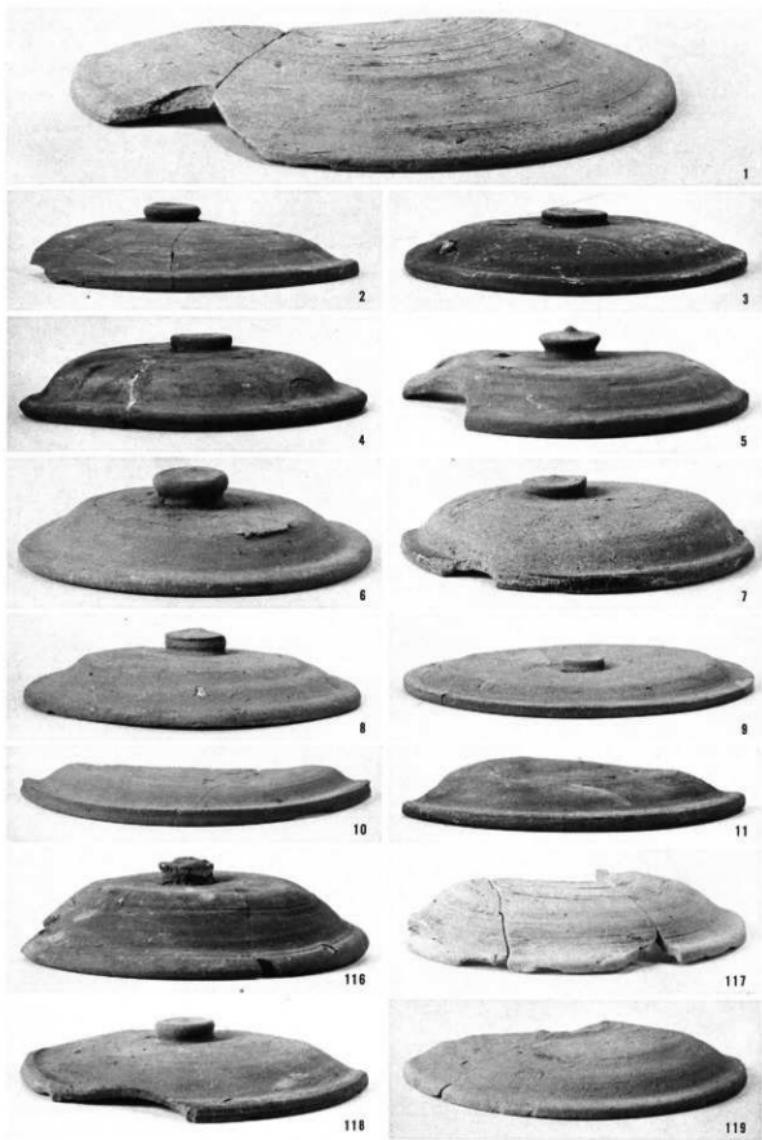
第50トレンチ（東より）

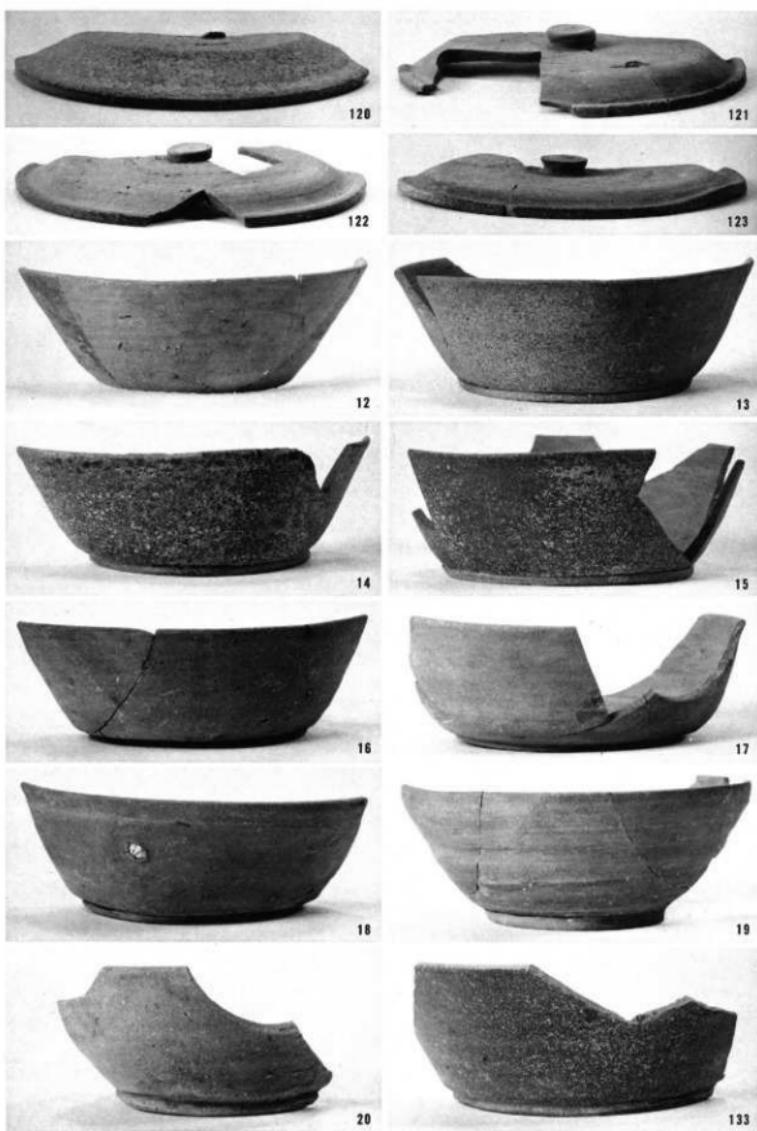


第41トレンチ（北より）

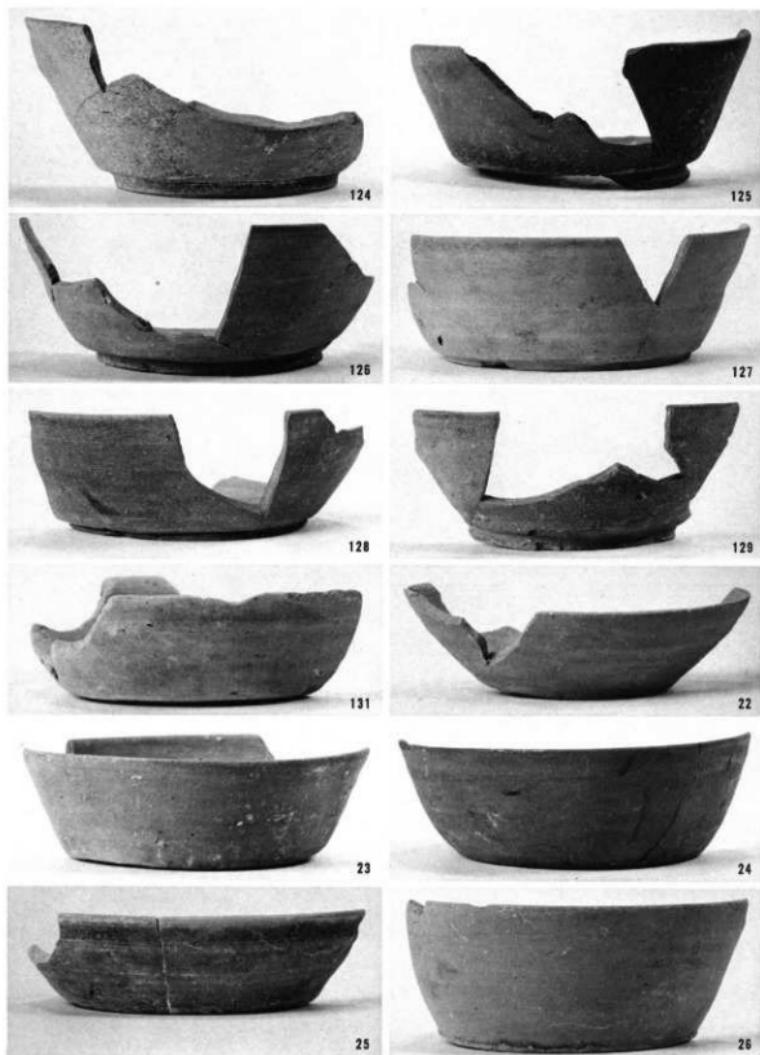


遺物包含層調査風景

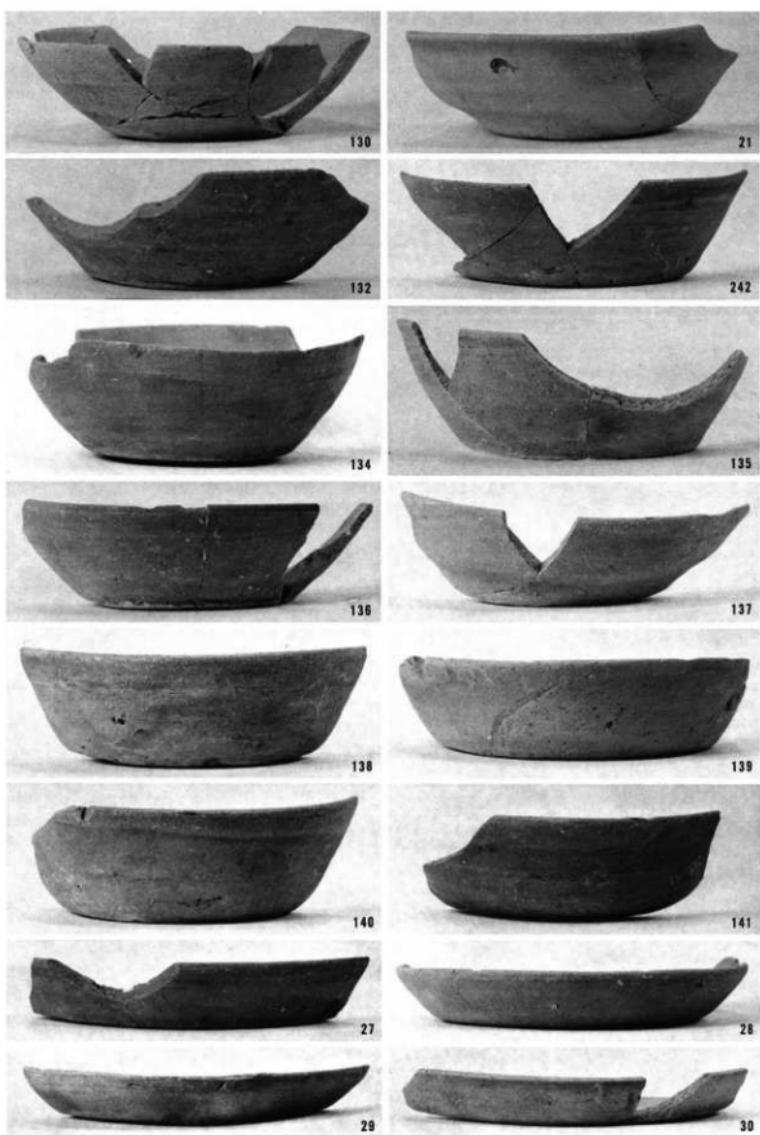




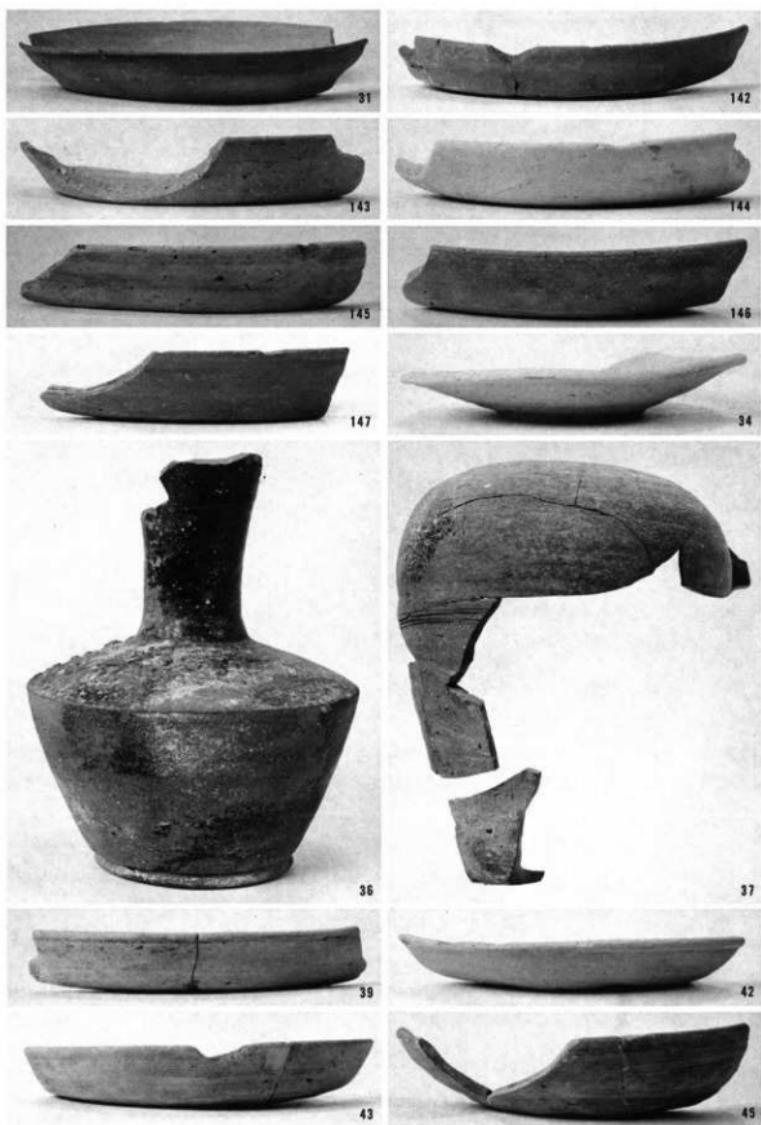
圖版六 小荒路十寺遺跡（遺物・須惠器）

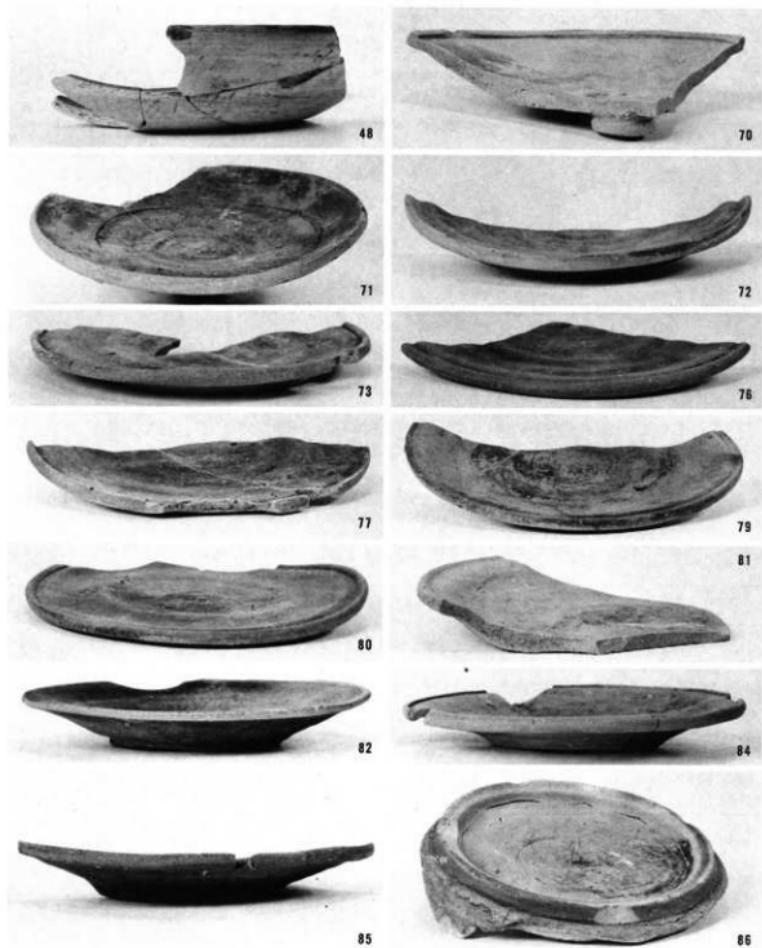


圖版七 小荒路十寺遺跡（遺物・須惠器）

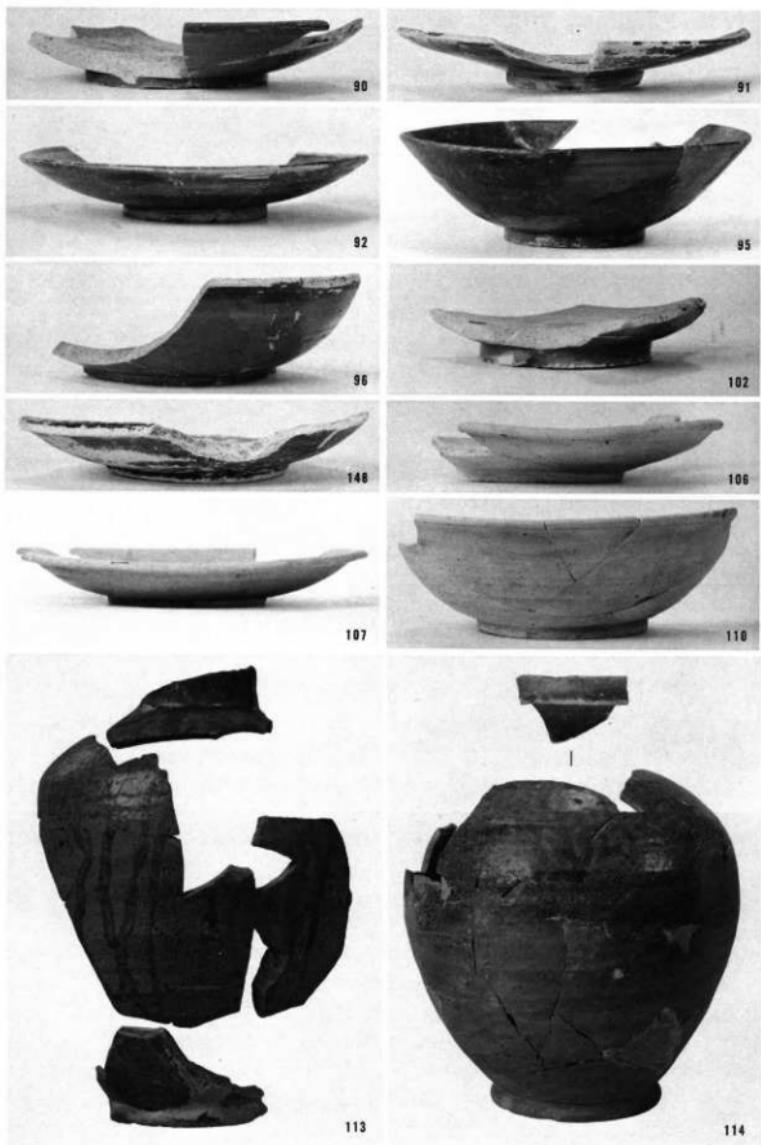


圖版八 小荒路十寺遺跡（遺物・須恵器、土師器）

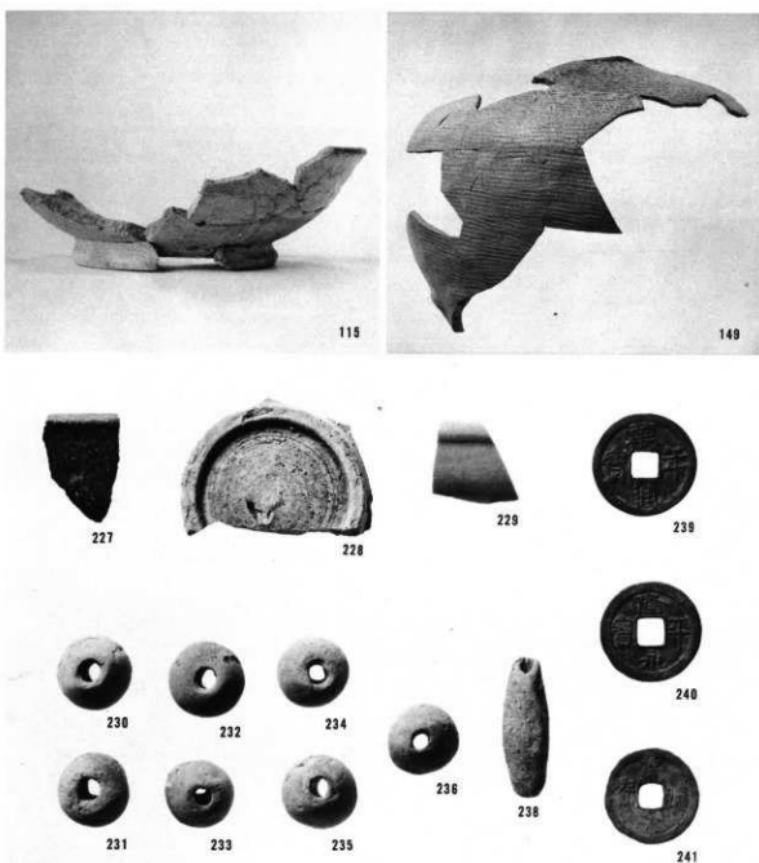




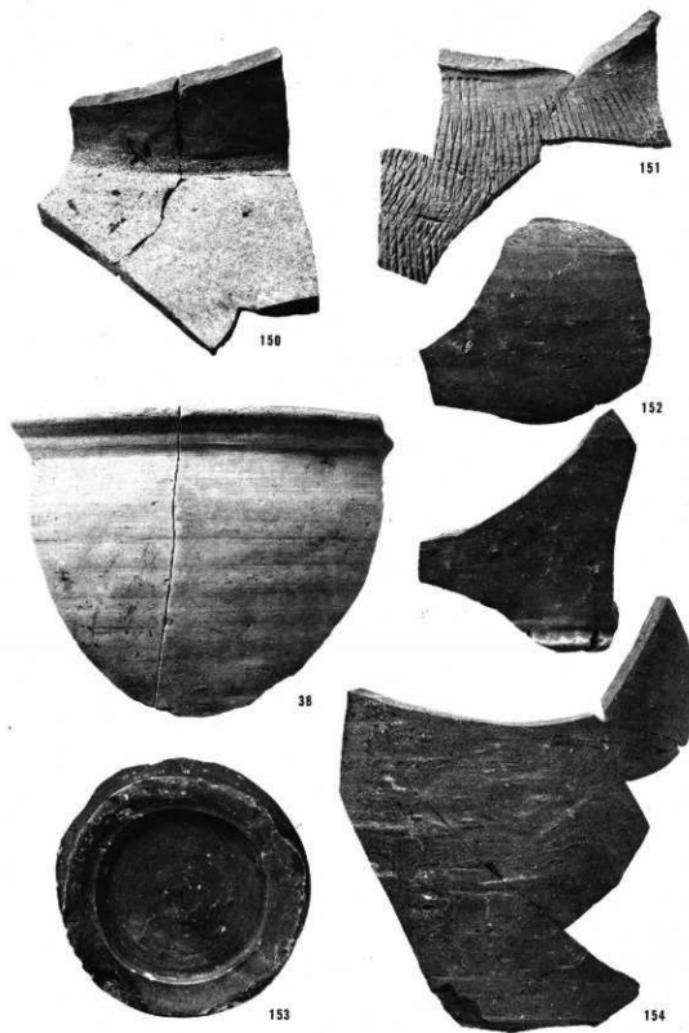
圖版一〇 小荒路十寺遺跡（遺物・綠釉陶器・無釉陶器・灰釉陶器）



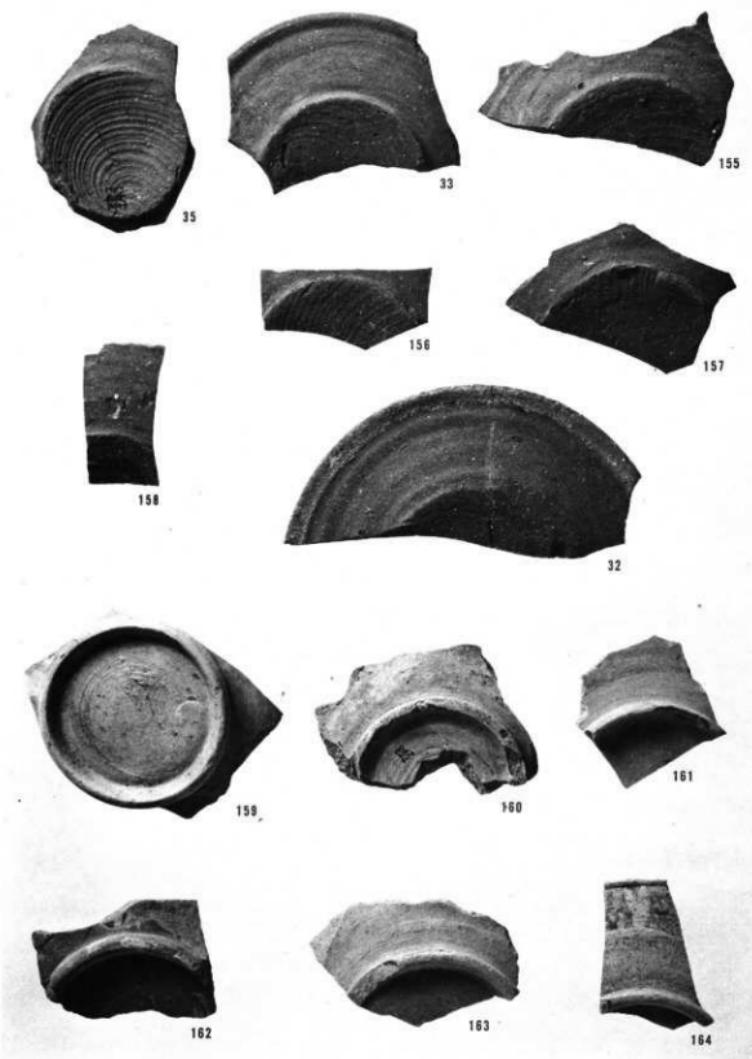
図版一一 小荒路寺遺跡（遺物・灰釉陶器、須恵器、その他）



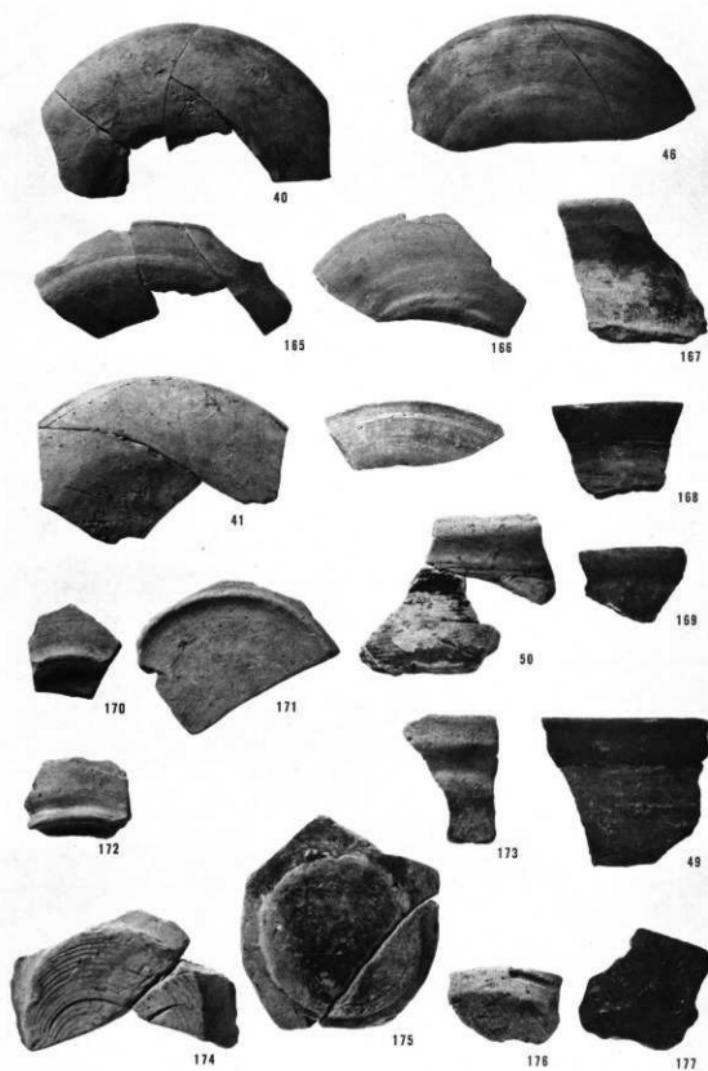
圖版一二 小荒路十寺遺跡（遺物・須惠器）



圖版一三 小荒路十寺遺跡（遺物、須惠器、灰陶陶器）



圖版一四 小荒路十寺遺跡（遺物・土師器）



圖版一五 小荒路十寺遺跡（遺物・土師器）



178



47



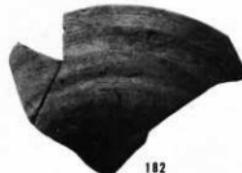
179



180



181



182



183



184



243



51

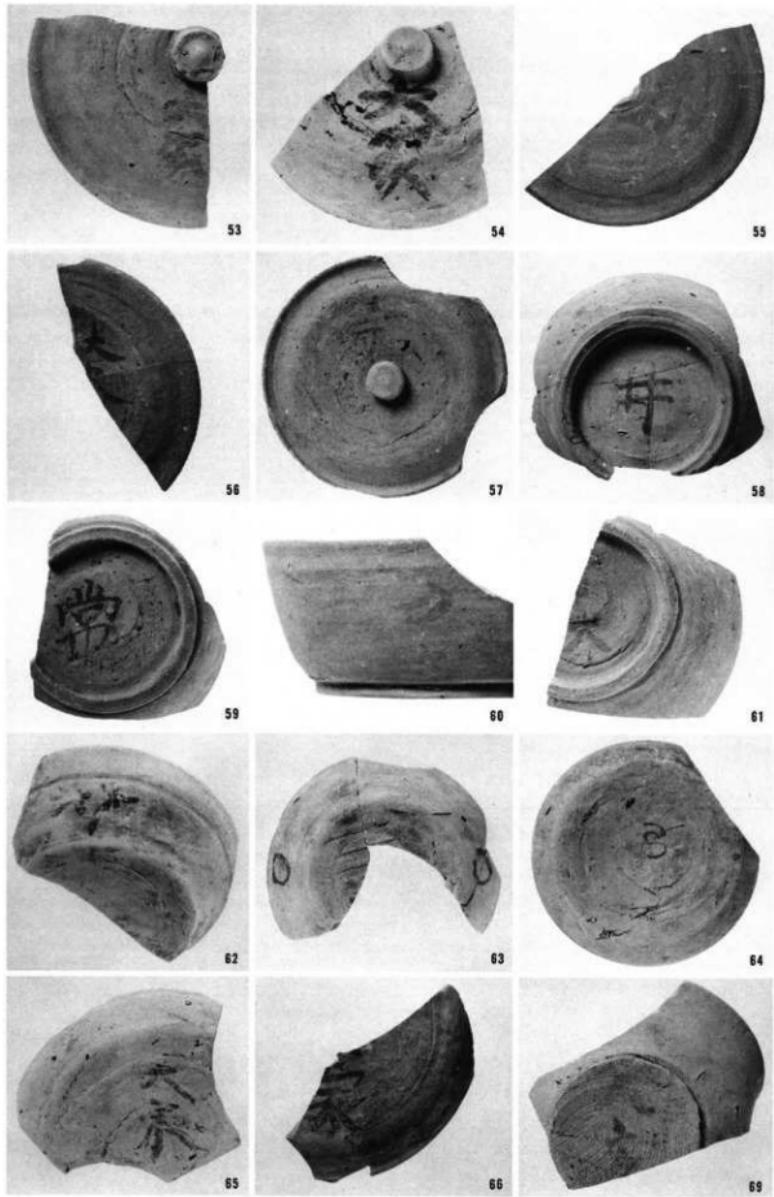


52

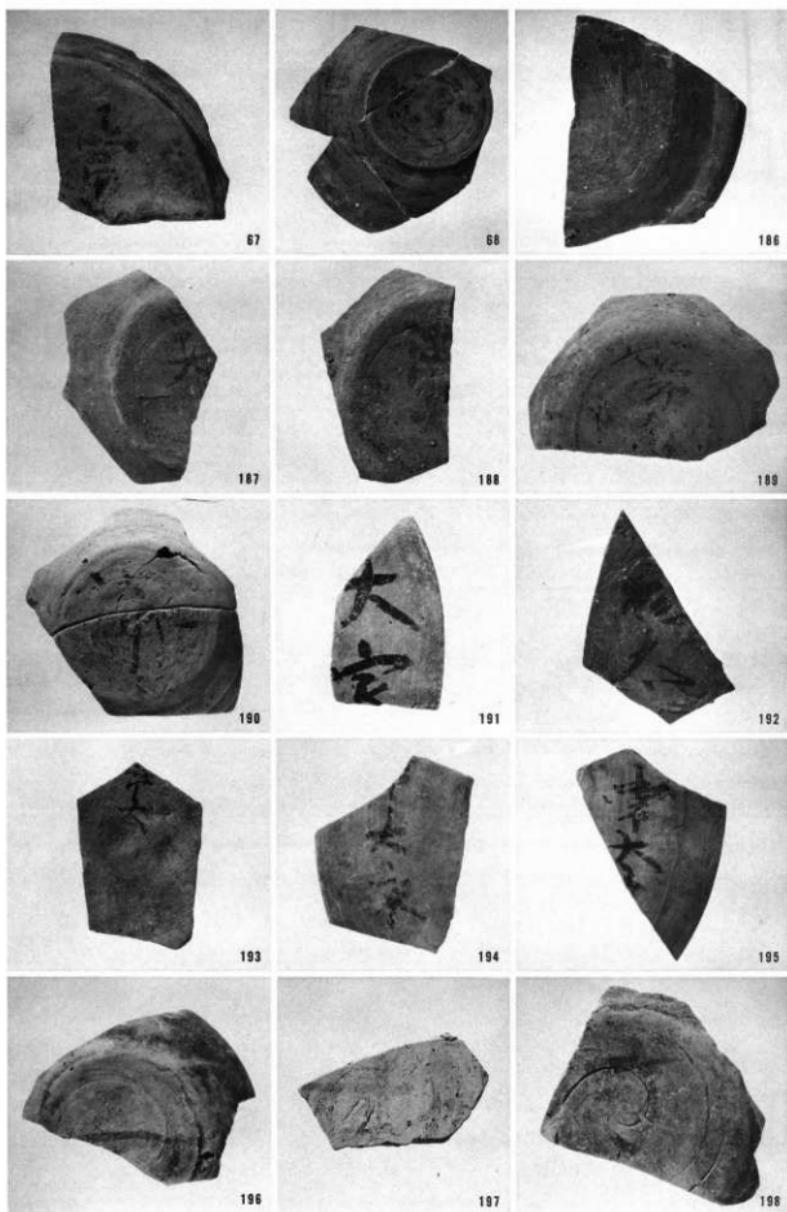


185

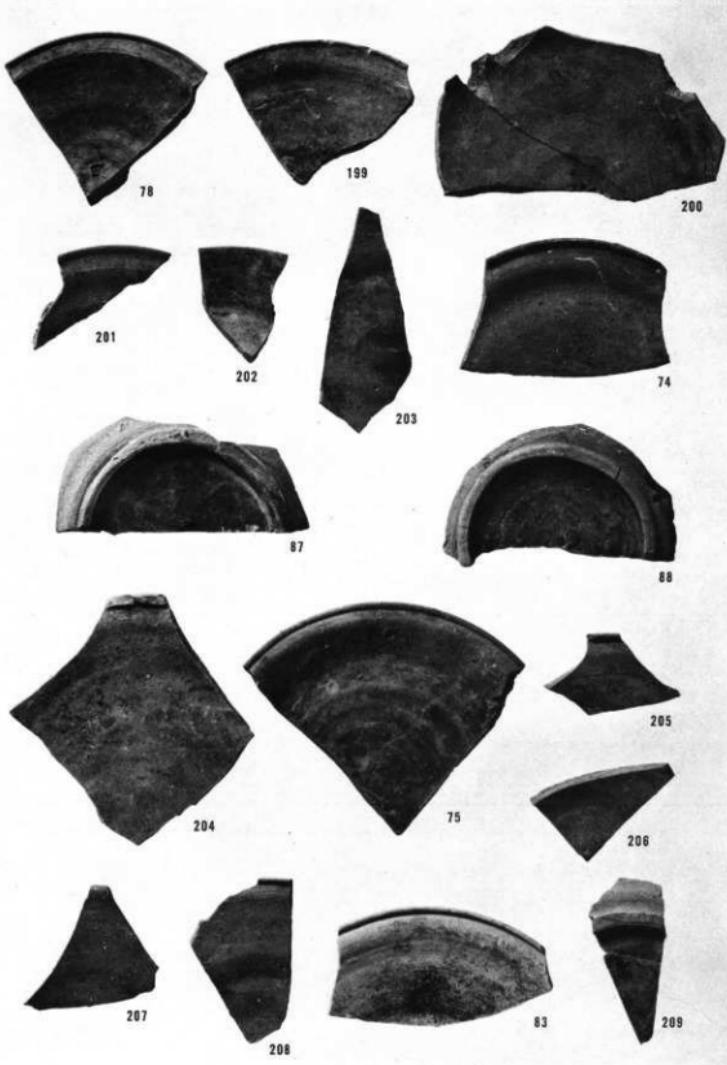
圖版一六 小荒路十寺遺跡（遺物・墨書土器）



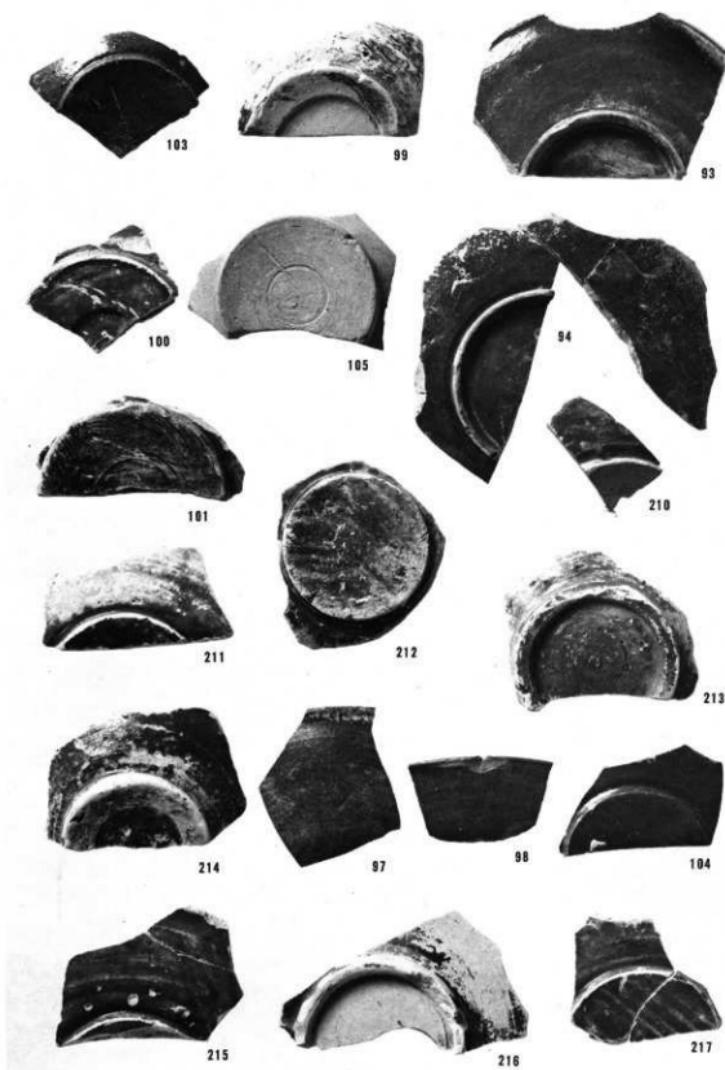
圖版一七 小荒路十寺遺跡（遺物·墨書土器）



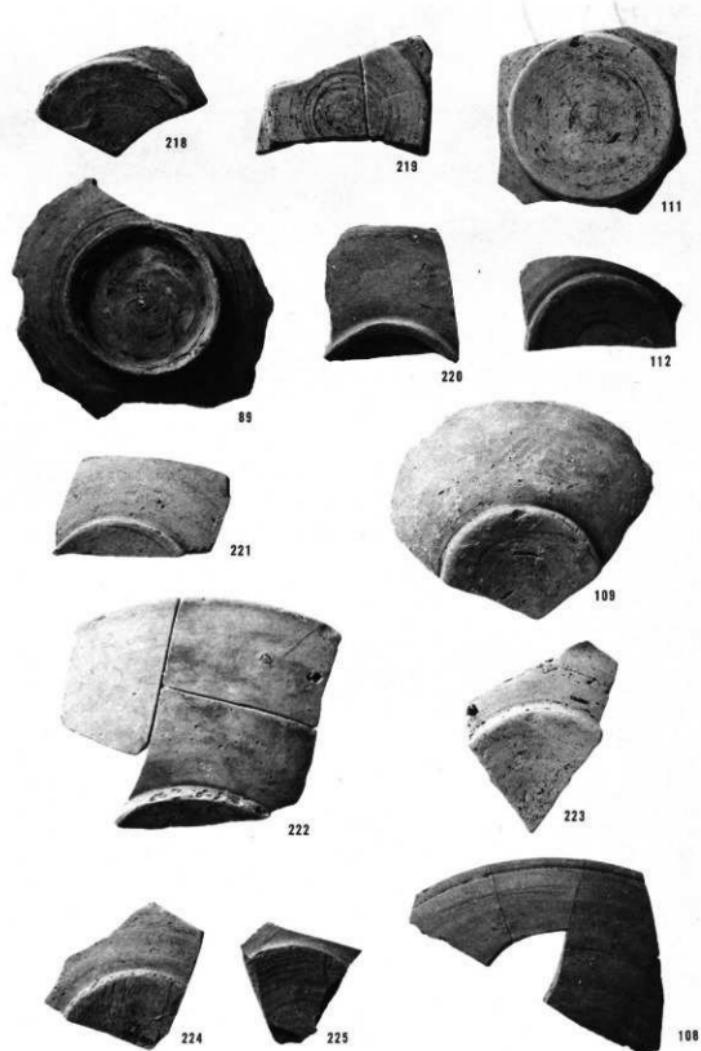
圖版一八 小荒路十寺遺跡（遺物・軸用鏡）



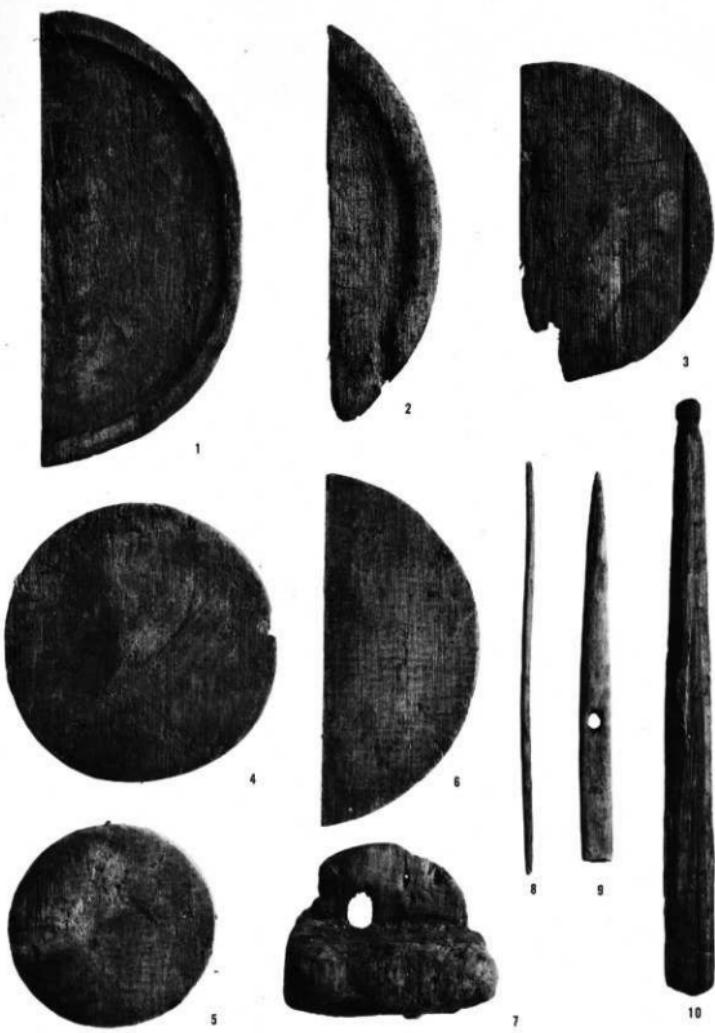
圖版一九 小荒路寺遺跡（遺物・綠釉陶器）



図版二〇 小荒路十寺遺跡（遺物・無釉陶器）



図版二 小荒路十寺遺跡（遺物・木製品）



## 第二章 高島郡今津町北仰・桂遺跡

## 1. はじめに

本報告は、高島郡今津町桂の県営は場整備事業桂第1工区で、昭和59年度に実施した北仰・桂遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

さて今回調査を実施した県営は場整備事業桂第1工区は、遺跡台帳にプロットされていない地点であった。しかし昭和58年度に実施した北仰西海道遺跡の調査地点から300mから400mしか離れておらず、北仰西海道遺跡では、縄文時代後期の集落の存在を示す土器群の出土や、工事中の採集ではあるが、弥生時代中期の土器の存在が明らかにされており、また今回の工事において削平される所が多いことから、至急に遺跡の確認、範囲を知る必要があった。そのため昭和59年5月25日から6月6日までと、同年10月16日から12月22日までの2回、滋賀県文化財保護協会技師横田洋三、同嘱託尾崎好則を主任に現地調査を実施した。その結果、弥生時代中期の土器が出土する遺物包含層と遺構が新たに確認された。それらのことから北仰遺跡群の1遺跡として、字名をとって北仰・桂遺跡と命名した。

なお調査にあたっては、今津県事務所土地改良課、地元北仰・桂の方々の協力を得たほか、今津町役場土地改良課、今津町教育委員会社会教育課からも種々御配慮をいただいた。また、本遺跡の発掘調査、整理作業にあたっては、水野正好（奈良大学教授）、酒井龍一（奈良大学講師）、下田順一、鶴田真佐子、山崎栄、赤嶽浩司、安藤修（奈良大学）、横田泰之（奈良大学OB）、大宮康男（京都大学）、宇野優子の諸氏の協力を得た。記して厚くお礼申しあげたい。

## 2. 位置と環境

**遺跡の位置** 調査地となった桂第1工区は、桂集落の東、北仰集落の北側に位置し、東限は国鉄湖西線近江今津駅～中庄駅間線路敷に接し、西限は南北に走る農道に面する東西約650m、南北450mが本年度の調査対象範囲である。

**遺跡の分布** 周辺遺跡の分布についてみると、石田川左岸の河岸段丘上に立地する心妙寺遺跡では、古墳時代中期～後期の堅穴住居址8棟、平安時代後期の掘立柱建物2棟と若干年代の遡る掘立柱建物3棟、櫛などが発見されている。さらに北側の丘陵上には、現在調査中の妙見山古墳群が認められる。下流域では、井ノ口に井ノ口中原遺跡あり、この遺跡では、和鏡、白磁、土器器、鐵釘などを伴う12世紀末～13世紀初頭頃とみられる土塙が確認されている。北西に移って、井ノ口の集落に接する井ノ口遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物、櫛などが認められている。さらに構造跡では、奈良時代末期～平安時代前期の掘立柱建物3棟が確認されており、平ノ前遺跡では、円墳4基、古墳時代堅穴住居址7棟、平安時代掘立柱建物などが検出されている。北に移って、縄文時代後期を中心とした遺物が出土した北仰西海道遺跡があり、さらに東側に寺院伝承地の興福寺遺跡、白米塚遺跡がある。白米塚遺跡は、古墳時代の円墳と考えられているが墳上から一字一石経が出土したといわれており、一字一石経塚との複合遺跡である。北仰の集落よりさらに東には、遺物散布地の北仰遺跡がある。



第1図 周辺遺跡

1. 酒波寺遺跡
2. 日置前B遺跡
3. 酒波東古墳群
4. 酒波三ツ又遺跡
5. 新田古墓
6. 日置前遺跡
7. 王塚古墳群
8. 紗見山古墳群
9. 構遺跡
10. 平ノ前遺跡
11. 北郷西海道遺跡
12. 興福寺遺跡
13. 白米塚遺跡
14. コクリュウ寺遺跡
15. 井ノ口遺跡
16. 井ノ口中川原遺跡
17. 井ノ口中川原遺跡
18. 心妙寺遺跡
19. 信當寺跡
20. 高田館跡遺跡
21. 杉沢遺跡
22. 弘川B遺跡
23. 弘川A遺跡
24. 中川原遺跡
25. ミコシ塚遺跡
26. 茅積塚遺跡
27. 将軍塚遺跡
28. 八郎塚遺跡
29. 大供古墳群遺跡
30. 大供遺跡
31. 円山塚遺跡
32. 平ヶ崎遺跡
33. 中ノ町遺跡
34. 北仰柱遺跡

第2図 北印・桂源幹レンチ配直圖



### 3. 調査の経過

発掘調査の方法は、まず遺跡の広がりを確認するため、は場整備によって削平をうける水田に、バックホウで順次  $4\text{m} \times 5\text{m}$  の試掘坑を穿ち、必要に応じて試掘坑の面積を広げて遺構、遺物の有無について確認を行った。その結果、東端の湖西線に接する水田から上郷川を挟んで西へ約 600m までの調査地区からは、遺物包含層や遺構など全く確認されなかったが、上郷川から北に約 150m の農道に面したところで始めて遺物包含層及び遺構が認められた。最も遺物の散布がみられるところを中心に  $15\text{m} \times 25\text{m}$  のトレンチ 2 本、それぞれ BT-1、BT-2 と  $4\text{m} \times 7\text{m}$  のトレンチ T-63、それらのトレンチのはば中央部の農道内で  $2\text{m} \times 43\text{m}$  のトレンチ T-3 を設定した。

### 4. 調査の結果

#### (1) 層位

基本層位は、第 1 層・耕土、第 2 層・茶灰色粘質土層で部分的に砂礫層が認められる。第 3 層・青灰色粘質土層、第 4 層・青灰色砂質土層で、包含層は第 2 層と第 3 層の間に認められ、主に BT-1 から BT-3、T-63 から T-75 の間にみられ、土層は暗茶灰色粘質土層で約 10cm 前後の厚さである。

T-63 このトレンチでは、詳細に層位を確認するため、耕土上面から約 1m 近く掘り下げた。その結果、上層から 25cm~30cm 下層で厚さ約 15cm の暗灰色粘質土層の包含層を検出した。さらに 60cm~65cm 下層で厚さ約 15cm の灰褐色粘砂土層の包含層を検出した。この土層は、さらに下層に続いているが、湧水が激しく下層への調査は残念した。

#### (2) 遺構

今回の調査で検出された遺構は、BT-1、BT-2 に集中しており、土坑、近世河道である。以下順を追ってトレンチごとに報告を行う。

BT-1 BT-1 では、土坑、近世河道が認められた。

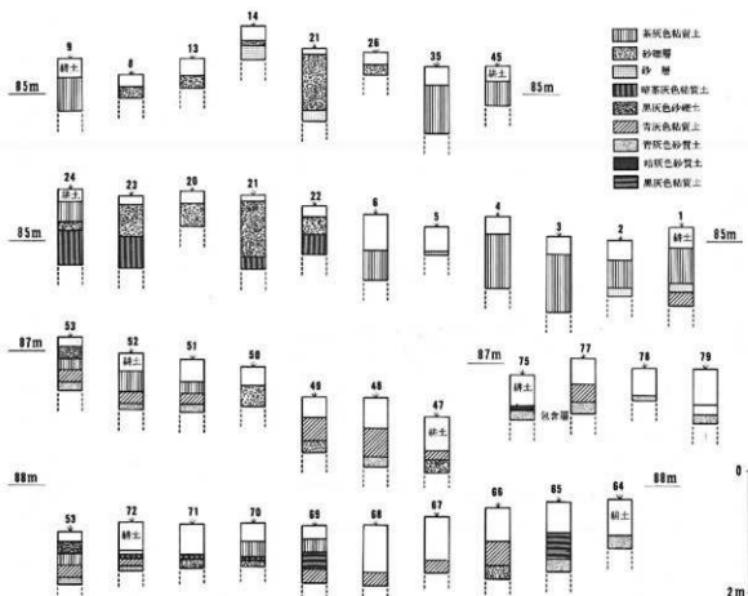
1. 土坑 SK1 トレンチの南東側に位置し、直径約 1m、深さ 50cm のほぼ円形の土坑である。土坑内からは、弥生時代中期の土器片が数点出土した。

2. 近世河道 近世河道 1 トレンチの東側に位置し、トレンチを南北に流れる。また、護岸施設と考えられる杭列が 2 条認められた。

BT-2 BT-2 では、土坑、近世河道が認められた。

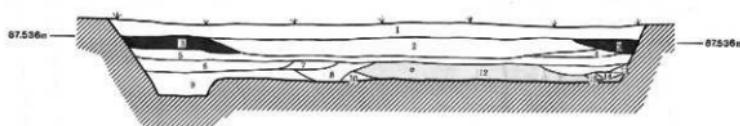
1. 土坑 SK1 トレンチの中央北側に位置し、長軸 3.5m、短軸 1.3m、深さ約 20cm を測る。不定形な土坑で北端は、トレンチで切断されており不明である。土坑内からは、弥生時代中期の土器が数点出土した。

2. 近世河道 近世河道 1 トレンチの東側に位置し、BT-1 から伸びる河道とみられ護岸施設と考えられる杭列が 2 条確認された。

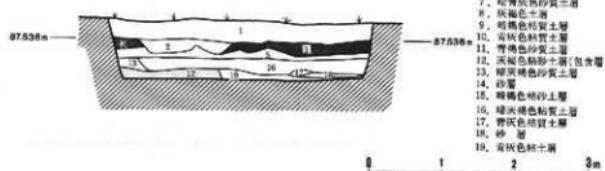


第3図 北仰・桂遺跡土層模式図

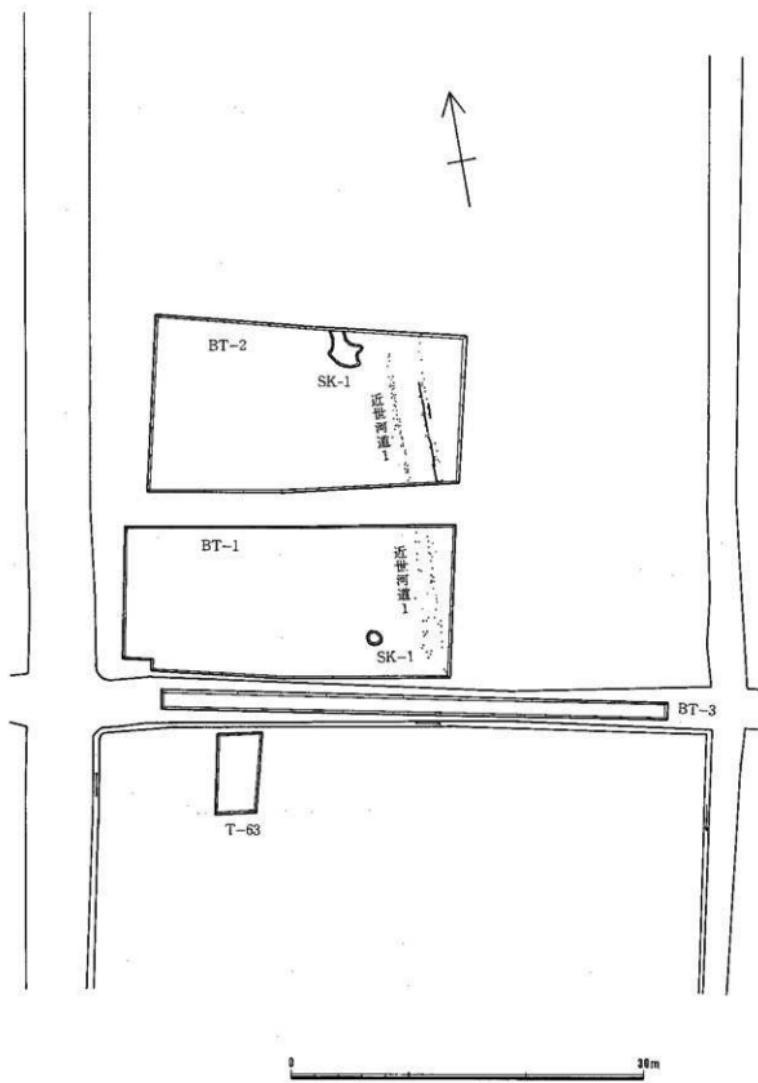
第63トレンチ西壁断面



第63トレンチ北壁断面



第4図 第63トレンチ断面図



第5図 遺構平面図

## 5. 北仰・桂遺跡出土遺物

### (1) 弥生式土器

弥生式土器の大半は、BT-1、BT-2の包含層中より出土したもので、時期的には弥生時代中期を中心としたもので、第III様式～第IV様式のものが大部分を占め若干それよりも古相の要素をもつ土器も認められる。臺灣土器 壺には、形態や文様などでいくらかの差異が認められる。

(1) は、口縁部がゆるやかに外方へ立ち上り、口縁部外面には2本1対の棒状浮文が認められる。

(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)は、上部でこしひらいた低い円筒形の口頭部の壺で、(2)は、外面に凹線文が施されている。残部が少なく確定できないが水差形土器であるかもしれない。(3)は、口縁端部をやや内寄りにおわらし、外面には縱方向のハケが認められる。(4)は、口縁上端部に四線文がめぐらされている。(5)は、口縁部はやや内寄りに立ち上り、外面は縱方向のハケを施す。(6)は、口縁部は内寄りに立ち上り、口縁部下間に凹線文が認められる。(7)は、口縁部が内寄りに立ち上り、口縁部外面には凹線文が施されている。(8)は、受口状口縁を有し、口縁端部に刻み目をめぐらし頸部に1条の沈線がみられる。残部が少なく壺として、確定的でなく甕の可能性もある。

(10)、(11)、(12)は、外びらきの頸部に、屈曲して上方に立ちあがった口縁部をもつ壺。

(10)は、口縁部外面に凹線が施された壺。(11)は、口縁部外面に櫛状工具による斜格子文が認められる。

(12)は、口縁端部外面にヘラ状工具による刻み目をめぐらし、口縁部外面には櫛描波状文を施しており、口縁部下半には、刻み目文をめぐらしている。

(9)は、無頸壺で口縁部外面に凹線を施し、体部には櫛描波状文、直線文が認められる。

臺灣土器 甕には、形態においていくらかの差異がみられる。

23)は、口縁部がやや内寄りに立ち上がり、口縁部下間に穿孔が認められる。

(24)は、口縁部がくの字状に立ち上がり、口縁端部外面に凹線文を施す。

25)は、口縁部はくの字状に外反し、口縁部外面に刺突文を施す。

(26)は、口縁部はくの字状に外反し、口縁部は、方形状をおわる。外面はハケ調整。

(27)は、口縁部がくの字状に外反し、口縁部外面に刻み目を施す。

(28)は、口縁部は外反し、体部がやや直立する。口縁端部に刺突文がめぐる。

(29)は、口縁部がくの字状に外反し、口縁部外面に凹線文を施し、口縁下部に刻み目をめぐらす。

(30)は、口縁部がくの字状に外反し、口縁部外面に凹線文を施す。

(31)は、頸部よりくの字状に外反し、口縁端部は方形状をおわる甕である。

(32)は、頸部よりくの字状に外反し、口縁部はわずかに受口状をなし、頸部から体部上半はハケ調整の後、櫛描直線文を施している。

(33)は、口縁部がくの字に外反し、内外面はハケ調整である。

(34)は、口縁部が外反し、上方で立ちあがる受口状口縁の甕である。

(35)は、外反する頸部に続く口縁部が垂直に立ち上がる受口状口縁の壺で、外面は縱方向に粗いハケを施し、内面には横方向にハケ調整がみられる。

(36)は、口縁部は外反し、上方に立ちあがる受口状口縁甕で口縁部内面に櫛状工具による刺突文を施して

いる。

(37) は、口縁部が外反し、体部がやや直立する甕で内外面は、ハケ調整である。

高杯形土器 高杯には、2タイプみられAは直口の杯部をそなえた高杯で、口縁部が内弯するもの。Bは水平にひろげた口縁部をもち、内縁に1条の凸帯をめぐらしたものでAタイプでは(16)、Bタイプでは(13)、(14)、(15)があげられる。

(16) は、口縁部外面に凹線文をめぐらし、杯部内外面はハケ調整である。

(13) は、口縁部外縁面がわずかに外方へ曲折し、口縁部内端の凸帯が内傾する。

(14) は、口縁部内端の凸帯は内傾し、口縁部外縁面は水平にのびておわる。杯部内外面ともハケ調整である。

(15) は、口縁部外縁面は下方に垂下し、口縁端部端の凸帯は内傾する。

(17) は、高杯の脚柱部で柄部端部は方形状におわらす。脚柱部外面は竜方向のヘラ磨きが、内面にはしばり痕が認められる。

鉢形土器 鉢には、直口のものと段状口縁部をもつ鉢がある。

(20) は、口縁部は内弯ぎみに立ちあがり、口縁部外面に凹線文と紐孔が認められる。

(22) は、口縁部が内弯し口縁端部は方形状におわり、口縁外面は凹線文が施されている。

(21) は、口縁部が内傾し段状口縁部外面に凹線文をめぐらす。

(18)、(19) は脚台部で、(18) は、柄部が内弯気味に外下方にのび端部は方形におわる。(19) は、脚部はラッパ状に開き口縁端部は方形で、外面には数個の穿孔がみられ形態から台付鉢形土器の脚台部かと思われる。

## (2) 石 器

石器の中には、磨製石斧・打製石斧・刀器・石棒状石製品など数点が認められた。

磨製石斧 (7) は、最大残存長11.8cm、最大残存幅 6.4cm、厚さ 3.7cm、重さ 513.2g で、蛤刃石斧の残存部かと思われる。

磨製石斧 (5) は、最大残存長10cm、最大残存幅 4cm、厚さ 3.1cm、重さ 201.1g である。

磨製石斧 (6) は、最大残存長 8.5cm、最大残存幅 5.6cm、厚さ 2.4cm、重さ 228.2g である。

打製石斧 (4) は、最大長14cm、最大幅 7.6cm、厚さ 2.1cm、重さ 371.4g を測り、刃先部は研磨されている。

石庖丁 (2) は、最大残存長 6 cm、最大残存幅 3.7cm、厚さ 0.7cm、重さ 18.7g の石庖丁の破片で、わずかに1孔の穿孔が認められる。

刃器 (1) は、最大残存長 6.1cm、最大幅 3cm、厚さ 0.4cm、重さ 14.1g であり、両面に刃部が認められ形態から石剣かとも思われるが断面を観察すると扁平で菱形をしておらず刃部に片よりがみられることから石庖丁の再加工かとも考えられる。

石棒状石製品 (3) は、最大残存長12.2cm、厚さ 1.5cm~2cm、重さ 73.3g で最も細い部分で3cmの加工痕が認められる。材質は結晶片岩である。

砥石 (8) は、最大残存長 6.3cm、最大幅 4.8cm、厚さ 2.3cm で2面が欠損しており材質は砂岩である。

砥石 (9) は、最大残存長13.8cm、最大幅 7.3cm、厚さ 3.5cm で材質は砂岩である。

## 6. ま　と　め

今回の調査において、知りえたことをまとめると遺構では、弥生時代中期の土坑、近世河道のみであり遺構においては、特に注目されるものは認められなかった。一方、遺物の出土は、包含層中のものが最も多いという結果であった。ただ層位において、第63トレンチで上層、下層に包含層が認められたが、その包含層の厚さが上層、下層とも15cm前後の厚さであり、出土土器も少片が主であったことから層位と出土土器の年代的新旧関係は顕著に認められなかった。遺物では、壺に短頸、細頸壺、無頸壺などがみられ、高杯では直口の杯部をそなえたもの、水平にひろげた口縁部をもち内端に1条の凸帯をめぐらしたもの2タイプみられ、甕においては、口縁部がくの字に外反するものと受口状をなすものがみられ、さらに受口状口縁の初源的なタイプのものも認められる。年代的には、若干古相を示すものもみられるが、主流は畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式併行期と考えられる。

石器では剥片などを含めて、数十点出土しており、写真図版に掲載したものでも磨製石斧、打製石斧、石庖丁、石棒状石製品などがみられる。打製石斧については、包含層中からの出土であるが、あるいは混入品の可能性もある。一方、石器の材質では、頁岩、砂岩などが主流であるが、石棒状石製品のみ結晶片岩である。形態的にも特異であるが、その材質の結晶片岩は滋賀県ではみられず、主に産地は和歌山県や山陰地方で産出される石材といわれ、石材の搬入経路について特に注目される。

### (註)

1. 兼康保明・山口順子・堀内宏司「高島郡今津町岸脇遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-1 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和55年)
2. 兼康保明・宮崎幹也・中川正人「高島郡今津町井ノ口中川原遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』X-3 滋賀県教育私員会・滋賀県文化財保護協会 昭和58年)
3. 吉谷芳幸「高島郡今津町井ノ口遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XI-2 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年)
4. 神谷友和「高島郡今津町構造跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XI-2 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年)
5. 吉谷芳幸「高島郡今津町平ノ前遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XI-2 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年)
6. 尾崎好則・前角和夫「針江南遺跡の調査」(『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』4 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年)
7. 山口順子・兼康保明「高島郡今津町弘川遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和56年)
8. 宮崎幹也「長命寺湖底遺跡発掘調査概要」滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和59年

出土遺物観察表

器形	No	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 12.2	頸部よりゆるやかに外反し、口縁端部はやや尖り気味におわる。	内、外面とも刷毛目を施し、口縁外面部はさらに横なでをしている。口縁部外面に棒状浮文を2本はりついている。	色調 明茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2 B-5
	2	口径 10.6	頸部よりくの字状に外反し、上方にのび、口縁端部は方形状におわる。	外面は凹線が施され、口縁部内面は横なで、内面は横の刷毛目を施す。	色調 明黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2
	3	口径 10.6	頸部より外反して上方にのび、口縁端部はやや内湾気味に尖り気味におわる。	口縁部外面は横なで、外面は刷毛目。口縁部内面は刷毛目、内面下方は指おさえのちなで仕上げる。	色調 灰白色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2
形	4	口径 12.5	頸部からゆるやかにたちあがり口縁端部は方形状におわる。	口縁上部と端部に凹線がめぐらされ、外面は刷毛目のち横なで、口縁内部は指おさえのちなで、頸部内面はなで、体部内面は刷毛目のちなで仕上げる。	色調 暗茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2 C-6
	5	口径 9.6	頸部はやや直立し、体部は丸みをもつ。	口縁部内外横なで、一部刷毛目のち横なで、体部内外斜めの刷毛目。	色調 黄灰褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2
器	6	口径 19.5	頸部は直立し、口縁部は内湾する。	頸部上方は横なで、下方は外面斜めの刷毛目、内面刷毛目。	色調 赤灰褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2 D-5
	7	口径 10.4	頸部よりくの字状に外反し、口縁部は内弯する。口縁端部は方形状におわる。	口縁部外面は凹線が施され、頸部上方は横なで、下方は斜めの刷毛目、内面横なでのち指頭圧痕あり。	色調 黒褐色 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2

器形	No.	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	8	口径 17.4	屈曲部をもち、ほぼ垂直気味にたち上がる。	口縁内外面ともに横なでを施し、口縁端部には割み目に入る。下方には刷毛目、沈線が施される。	色調 暗黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-2
	9	口径 21.6	内傾しており、口縁端部は方形状におわる。無頸壺	口縁部外面上方には凹線、中央部はたての刷毛目のち波状文、下部は彫描直線文を施し、若干波状文がみられる。内部は磨減が激しく調整不明。断面に外からの穿孔がみられる。	色調 暗茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2
	10	口径 21.2	頸部は屈曲し、口縁部はやや内湾する。	口縁部外面は凹線が施され、頸部上方は横なで、中ばは粗い刷毛目横なで、下方は細かい刷毛目。	色調 灰黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-2
	11	口径 37.3	屈曲部をもち、ほぼ垂直気味にたち上がり、口縁端部は方形状におわる。	口縁部外面は斜方向の刷毛目、体部外面は縱方向の刷毛目で、上部になで、口縁部内面は横なでであり、体部内面は横、斜めの刷毛目で仕上げる。	色調 黄褐色 赤黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-2
器	12	口径 31.8	頸部よりくの字状に外反し、屈曲部をもちやや内湾する。口縁端部は方形状におわる。	口縁部外面は横の刷毛目の横なで、頸部外面は縱の刷毛目の横なで、内面は横、斜めの刷毛目の横なでに仕上げる。	色調 暗茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-1
	13	口径 20.2	外周の水平面の端部は垂下しない。下部丸みをもつ。	口縁端部内外面横なで、下部内面指頭底圧のちなで、外面調整不明。	色調 淡茶褐色 胎土 2mmの微砂を含む 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2
高杯形土器	14	口径 31.6	杯部の口縁端部に内傾する隆	口縁内外面横なで、体部内	色調 姪黄褐色

器形	No.	法量(cm)	形 態 の 特 徵	手 法 の 特 徵	備 考
高 杯 形 土 器	14		起帶をめぐらせる。外周の水平線の端部は垂下しない。	面細かい刷毛目、外面傾め刷毛目。	胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-2 杯部
	15	口径 28.8	杯部の口縁端部に内傾する隆起帶をめぐらせる。外周の水平線の端部は垂下しない。	口縁内外面横で、口縁端部に凹線をめぐらす。体部外面指おさえ後で、内面は刷毛目。	色調 黄灰褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-2 杯部
	16	口径 32.3	外反気味で、口縁端部は方形状におわる。口縁内部は内湾している。胴部は扁平である。	口縁部は横なでを施し、外面に凹線をめぐらす。胴部は内外面とも刷毛目である。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-2
	17	器高 9.5 底径 9.0	高杯の脚柱部で外反し、裾部端部は方形状におわる。	脚柱部外面は縱方向のヘラ磨き、裾部は右方向のなでを施し、内面脚柱部にはしづり目、上部に刷毛目、裾内部は横なです。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-1 脚古部
脚 台 部	18	底径 9.1	脚台部であり、内湾気味に外下方にのび、端部は方形状におわる。全体に厚いが粒状上部はやや薄くなる。	外面上部にわずかに刷毛目がみられ、裾部に横なで、内面上部はしづり目がみられ、裾部には横なでがみられる。	色調 黄褐色 赤黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/2 地区 BT-2 D-5
	19	底径 12.2	脚台部であり、脚部はラップ状に開き、口縁端部は方形状におわる。	外面上部になで、中ばは刷毛目、脚部、口縁端部に擬凹線を施す。体部に外から内に向けた穿孔がみられる。	色調 暗灰黃褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-2
	20	口径 23.1	口縁部が内湾して、口縁端部は方形状におわる。	口縁端部と口縁外下方に凹線が施され、口縁外上方と胴部に刷毛目、口縁内部は横なで、胴部内面は刷毛目のち様なでが施されている。	色調 淡桃褐色 胎土 1mmの砂塵を含む 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2

器形	No.	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢 形	21	口径 21.6	口縁部は内弯し、端部は内側にわずかにつまみ出す。	内外面端部横なで、外面体部なで刷毛、内面体部刷毛、段状口縁部外面に凹線文をめぐらす。	色調 灰黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-1
	22	口径 25.0	口縁部は内弯し、口縁端部は方形状におわる。腹部は扁平気味である。	口縁部外面は凹線が施され、外面は上方が横なで、胸部外面は刷毛目のち磨く、内面は刷毛目のち横なで、胸部下方は刷毛目を施す。	色調 淡黄褐色 表面はかけて黒色にしている 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2 C-6
甕 形	23	口径 13.6	外反する頂部に統く口縁部はやや内傾きみに立ち上がる。	口縁端部内面横なで、下部に内より外への穿孔あり。内外面下部ともに刷毛目。	色調 灰黄褐色 胎土 0.5mm位の微砂含む 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2 C-6
	24	口径 17.3	口縁部はくの字状に外反し、体部に穿孔あり。	口縁部外面に凹線を施す。 口縁内外面刷毛目のち横なで。 体部に外から内への穿孔あり。 体部外面斜め刷毛目、内面指頭による横なで。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の微砂を含む 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2
土 器	25	口径 16.8	口縁部はくの字状に外反し、口縁部外面に刻み目を施す。	口縁端部外面ハケ状工具による刺突文、口縁部内外面刷毛目。体部内面刷毛目後横なで、体部外面刷毛目。	色調 灰黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2 D-5
	26	口径 12.2	口縁部はくの字状に外反し、口縁部は方形状におわる。体部は球形気味である。	口縁端部内外面横なで、体部内外面斜め刷毛目。	色調 明黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-2 C-6
	27	口径 16.5	口縁部はくの字状に外反し、	口縁部内面横方向の刷毛目、	色調 黄褐色

器形	No.	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕 形 土 器	27		口縁部外面に割み目を施す。	体部内面刷毛目。口縁端部外面窓状具による割み目を施す。 口縁外面横なで後刷毛目、体部外面刷毛目。	胎土 精良 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-2
	28	口径 19.4	口縁部は外反し、体部がやや直立する。	口縁部外面なで仕上げ、口面のみ刷毛目調整後なで仕上げ。口縁端部外面刷毛状工具による刺突文。体部外面横なで後刷毛目、体部内面刷毛目。	色調 灰黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-1 B-1
	29	口径 15.0	口縁部はくの字状に外反する。	口縁端部外面に凹線を施し、その下部に横なで後キザミ目が入る。上部内外面横なで、下部内外面刷毛目、内面のみ横なで。	色調 黄灰褐色 胎土 良 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-2 C-6 B-6
	30	口径 17.2	口縁部はくの字状に外反し、口縁部外面に凹線を施す。	口縁端部横なで、口縁外面横なで、内面斜め刷毛目のち横なで、体部外面刷毛目、内面刷毛のち横なで。	色調 外面明黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-2 C-6
	31	口径 18.0	頸部よりくの字状に外反し、口縁端部は方形状におわる。	外面は刷毛目を施し、頸部外面は横なで、頸部内面は粗い刷毛目、胴部内面は指頭圧痕のち刷毛目を施す。	色調 明茶褐色 表面上若干黒色をみる 胎土 2mmの砂礫を含む 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-2
	32	口径 17.0	頸部よりくの字状に外反し、屈曲部をもち、そのまま上方にのび、口縁端部は丸くおわる。体部は丸味をもつ。	口縁内外部、頸部内外部は刷毛目、体部外面は刷毛目のち、上方は横描直線文を施す。体部内面は指おさえのち横なで仕上げる。	色調 暗黄茶褐色 胎土 良 焼成 良 残部 1/4 地区 BT-1 B-1
	33	口径 13.7	口縁部はくの字状に外反し、	口縁部内外面横なで、体部	色調 暗黄褐色

器形	No.	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	33		最大径がほぼ器体中位にあるものと思われる。	外面刷毛目、頸部内面指揮え、体部内面なで後刷毛目。	胎土 精良 焼成 良 残部 1/3 地区 BT-2 B-5
	34	口径 19.6	甕か? 口縁部は外反し、上方で立ち上がる受口状口縁。	口縁端部外面横なで後刷毛目。体部内面刷毛目、外面深く粗い刷毛目。	色調 外面 赤灰褐色 内面 灰黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/8 地区 BT-1
	35	口径 19.0	外反する頸部に統く口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁端部外面は浅い凹線を施す。内外面に横なで、外面下部は刷毛目を入れた後横なで、体部内面横方向の刷毛目、外面刷毛目。	色調 灰黄褐色 胎土 良 焼成 良 残部 1/6 地区 BT-1
土器	36	口径 25.0	口縁部は外反し、上方で立ち上がる受口状口縁。	口縁部内外面刷毛目、横なで、体部内外面刷毛目。	色調 明灰黄色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2
	37	口径 24.8	口縁部は外反し、体部がやや直立する。	口縁内外面横なで後刷毛目、体部内面横なで、刷毛目、外面刷毛目。	色調 灰黄褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-2 上げ土内
甕	38	口径 25.4	口縁部はゆるやかに外反し、体部はほぼ直立する。	口縁端部に波状文が施される。頸部外面縦方向のなで後刷毛目、内面刷毛目、体部外面は刷毛目、内面なで。	色調 灰黄褐色 胎土 良 焼成 良 残部 1/2 地区 BT-2 C-6
	39	口径 31.8	口縁部はやや内傾し、方形状におわる。	口縁部内外面は刷毛目のち横なで、外面下部縱刷毛目、内面下部横、斜め刷毛目。	色調 喙茶褐色 胎土 精良 焼成 良 残部 1/10 地区 BT-1

# 図 版



遺跡遠景



調査風景



BT-3 (西より)



T-63 (南より)



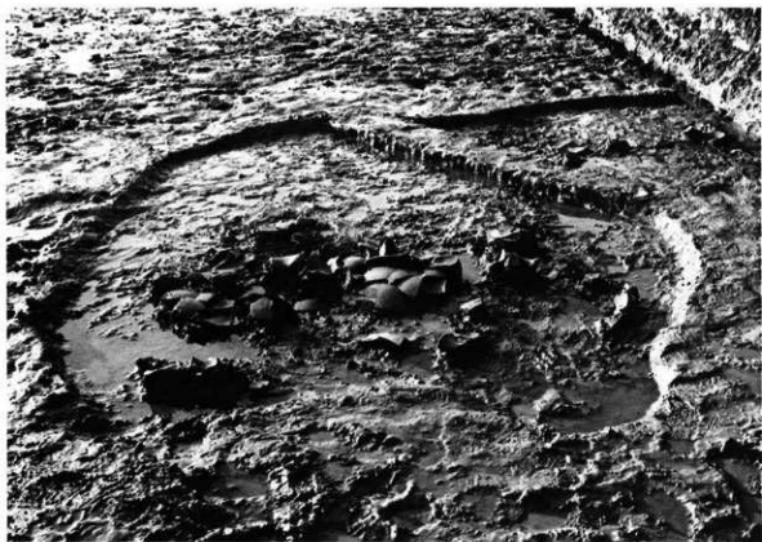
BT-1 (西より)



BT-1・SK-1



BT-2 (西より)



BT-2・SK-1



7



3

4



5

6



1

38



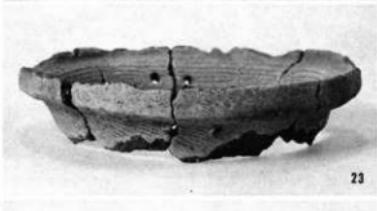
11

10



12

9



圖版八 今津町北仰・柱遺跡・遺物



28

29



8

25



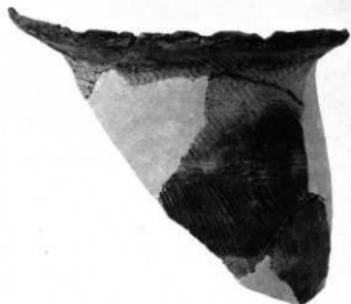
27



34



35



32



38



33



18



17

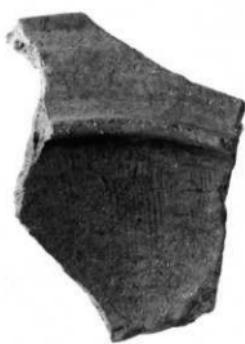


19

図版一〇 今津町北仰・桂遺跡・遺物



15



14



13



21



22



20



16

図版一一 今津町北仰・桂遺跡・遺物



2



3



4



5



6



7

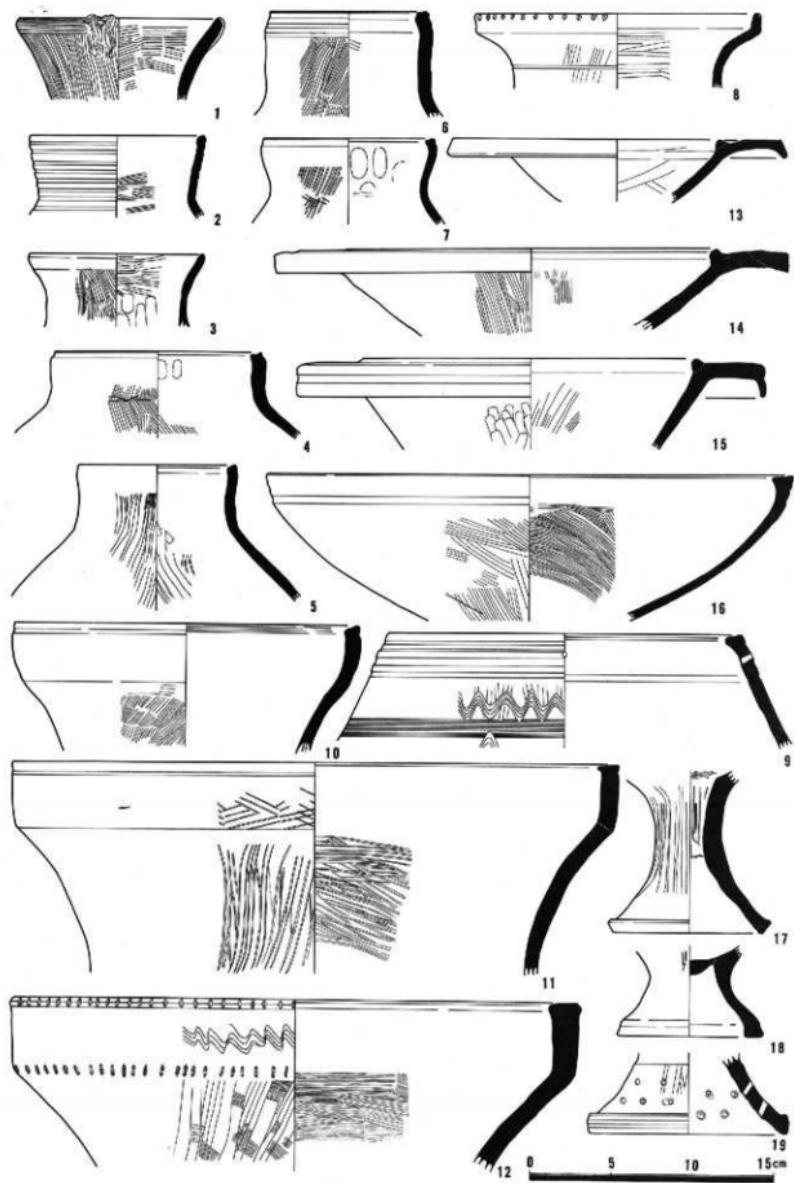


8

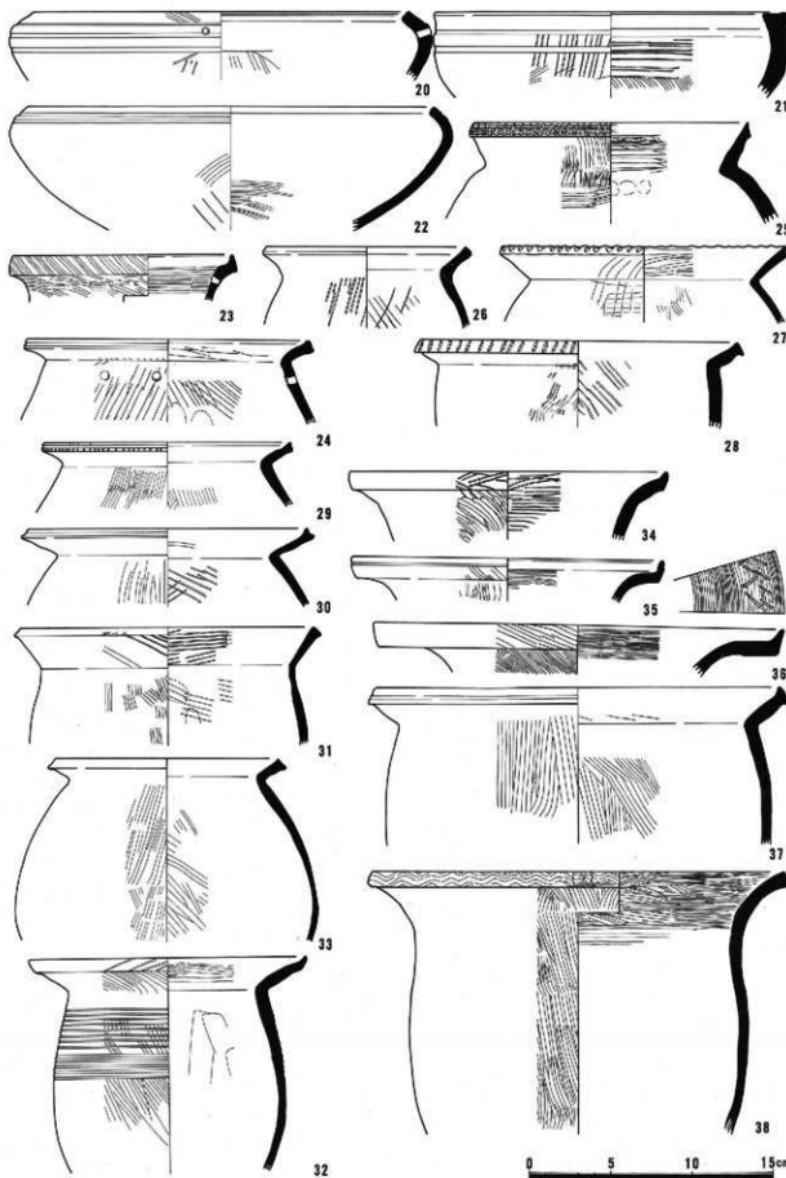


9

圖版一二 北仰・桂遺跡  
遺物実測図(1)



圖版一三 北仰・桂遺跡  
遺物実測図(2)



### 第三章 高島郡安曇川町四津川遺跡

## 1. はじめに

本報告は、安曇川東部地区県営は場整備事業（藤江工区）に伴う昭和59年度の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

今回の藤江工区に先だって、昭和56年8月、安曇川町役場土地改良課より安曇川町教育委員会にたいし、横江・下小川以東の県営は場整備計画区域における埋蔵文化財の照会があった。その際、当該地には『滋賀県遺跡目録』（滋賀県教育委員会 1981）によるかぎり周知の遺跡はまったくないけれども、藤江集落の周辺から松ノ木内湖にかけての水田地帯に、高さ1m前後の  
① 方形の独立した土盛が点在しており、これらは所謂中世の建物跡の可能性を充分に秘めていると回答し、同時に工事にあたっては現状保存されるよう要望した。

ところが、昭和59年度施行の藤江工区では、このような土盛の現状保存は難しいということから、事前に滋賀県教育委員会と安曇川町教育委員会と合同で分布調査を行った。その結果、土師器の破片および土鍤を表面採取したので、滋賀県教育委員会は今津県事務所土地改良課と協議し、とくに壁面に石垣を施した土盛（A地区）と土器を採取した土盛（B地区）との2ヶ所において緊急の発掘調査を実施することになった。調査は、まずA地区からはじめ、これの調査完了後、引き続いてB地点に移った。調査期間は、昭和59年8月1日より11月7日までの約3ヶ月あまりを要し、その後、遺物等の整理作業を行った。

なお、今回の調査で、これらの土盛が当初われわれが予想していた所の中世の建物跡ではなかったけれども、土盛中より近世の陶器類、あるいは土盛の下層より土師器・須恵器・土鍤等が出土したことから、両調査地区を四津川遺跡と呼ぶことにした次第である。

現地調査は、安曇川町教育委員会社会教育課技術中江彰が主として担当したが、調査に到るまでの事前協議や準備等については、（財）滋賀県文化財保護協会技師吉谷芳幸・清水尚の両氏の手をわざらわした。記して厚くお礼申しあげたいと思う。

## 2. 位置と環境

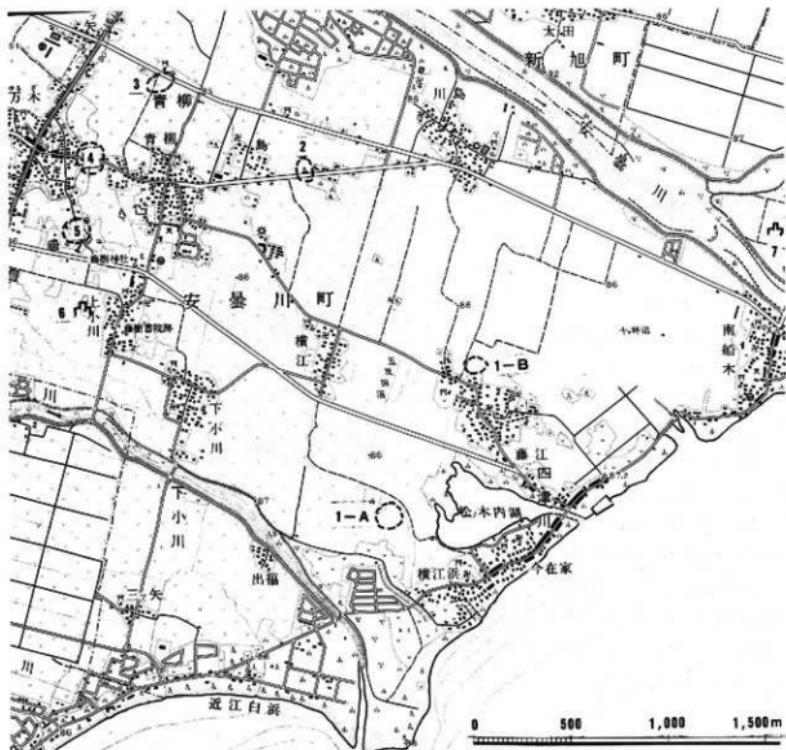
四津川遺跡は、高島郡安曇川町大字四津川地先に所在しており、安曇川と鴨川との両河川によって形成せられた高島沖積平野のはば琵琶湖岸よりに位置する。

A地区調査地点の東200mには、湖西地方最大の松ノ木内湖があり、また調査地点の北50mの所には十六蓮原沼がある。十六蓮原沼は、そのまま北を流れている青井川と接続しており、その青井川の源は大字田中の仁和寺集落にまで及んでいる。『高島郡誌』（昭和2年刊）によると、松ノ木内湖は、東西8町（約900m）、周囲25町（約2.7km）、面積32町歩の規模を有しているが、また同じ『高島郡誌』の別項には、周囲約1里（約4km）、面積23町8反2畝14歩とも記されており、いづれにしても現在の松ノ木内湖に較べて相当規模が大き



第1図 藤江地先の方形土盛

きかったことが知られる（第9図も参照されたい）。これは、1つには内湖に流れているいくつかの河川の土砂の堆積作用によって、陸化していることが考えられるが、さらに琵琶湖の水位の低下もこれらの要因にあげることができる。そうして松ノ木内湖が沼沢地化した土地や十六連原沼、あるいは青井川等の河川の両岸のいたる所に「ヨシ」が繁茂しており、このような植生からも遺跡の地勢的景観がある程度推測することができよう。



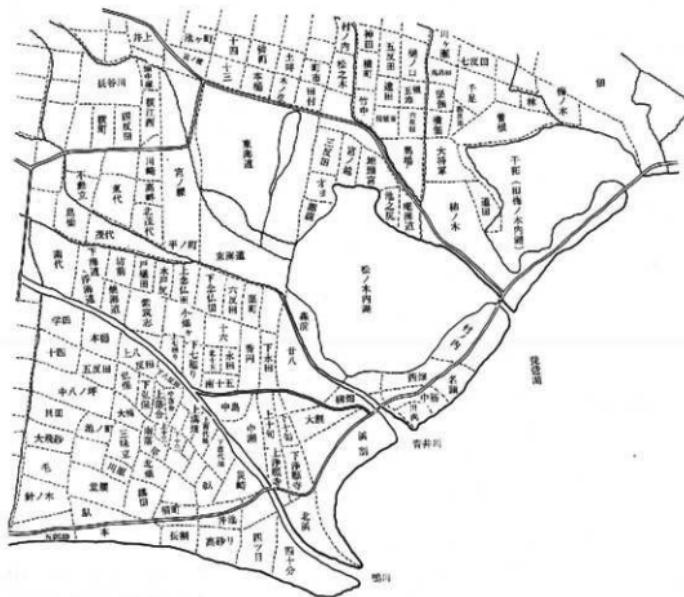
第2図 遺跡位置図

1. 四津川遺跡 2. 法仙寺遺跡 3. 太田神社遺跡 4. 西万木遺跡 5. 西万木南遺跡 6. 小川城跡 7. 船木城跡
- ところで、四津川という地名の起因については、「其沼地に流入する四川に基く。即ちどんばく川、はせ川、うな川、でんぐ川はなり」と『高島郡誌』に記されていることで容易に知り得るが、なお「其沼地」とは何をさして言っているのか判断し難いものの、古くは内湖という用語は使われておらずすべて松ノ木沼、あるいは梅ノ木沼と呼ばれていたことから、その沼地とはあるいは松ノ木内湖をさしていたものと考えてよい。したがって、四津川は松ノ木内湖に流入している代表的な河川名から起因していることがわかる。と同時に、河川名が地名として永く広汎に使われていということは、この地域の人々にとって河川がいかに生活の中で重

重要な役割を果していたかがわかるであろう。

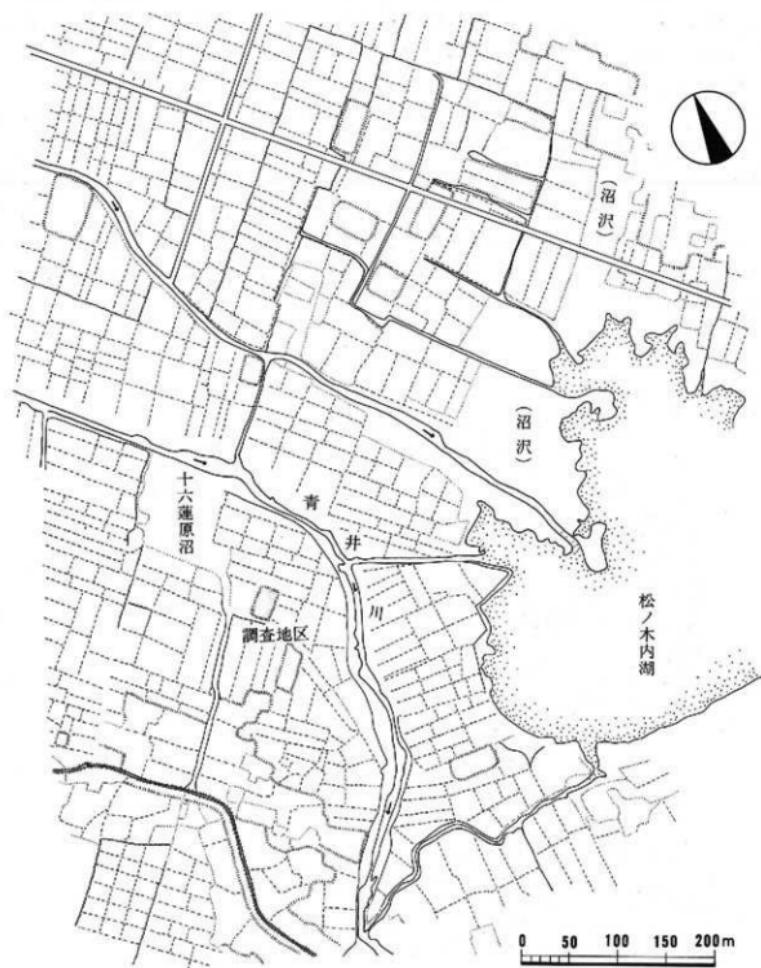
しかしながら、この四津川の地名がいつ頃から使われていたかは、今もって明確には知り難い。例えば、中世の絵図と推定されている『比叡新莊之図』(町文化財・竹内彦太郎氏蔵)には、現在の今在家集落を南浜と墨書きされ、さらにその横に「貴船」と書かれ神社の鳥居が描かれている。つまり南浜に貴船神社が鎮座していることをあらわしている。もっとも、南浜の西には松ノ木内湖は見られない。ちなみに中浜は現在の南船木、北浜は現在の北船木の集落に該当し、この湖辺一帯を船木浜と総称した。北船木若宮神社本殿の明応6年(1497)の棟札には、「船木北浜」云々と記されている。

次に、「吾妻鏡」の嘉承4年（1238）9月20日の条に、「賀茂別雷社領近江国安曇河御厨内藤江村の事、使の入部を止むべき由、守護人近江入道虚仮に仰せらる。これ敬神の他に異なるよってなり」という記述があり、このことから鎌倉時代前期の藤江村は京都上賀茂神社の莊園、つまり安曇河御厨であったことが知られる。また同じ中世の史料として、藤江觀音堂の銘口がある。この銘口は、もともと藤江の賀茂神社の本殿に掲げられていたもので、銘文に「賀茂大明神藤江郷 応永16年（1409）五月廿二日 順主神主貞重」とある。さらにそれから200年のちの慶長7年（1602）の検地帳の表扉には、「江州高島郡藤江今在家村御検地帳」と墨書きされている。



第3図 遺跡圖の字眼圖

このようなわざかな中世史料をいちべつしても、「南浜」「藤江村」「藤江郷」「藤江今在家村」と書かれてい、四津川という村名がどこにも出てこないわけである。四津川がはっきりと行政上の村名として登場するのは、じつは明治6年（1873）以降なのである。

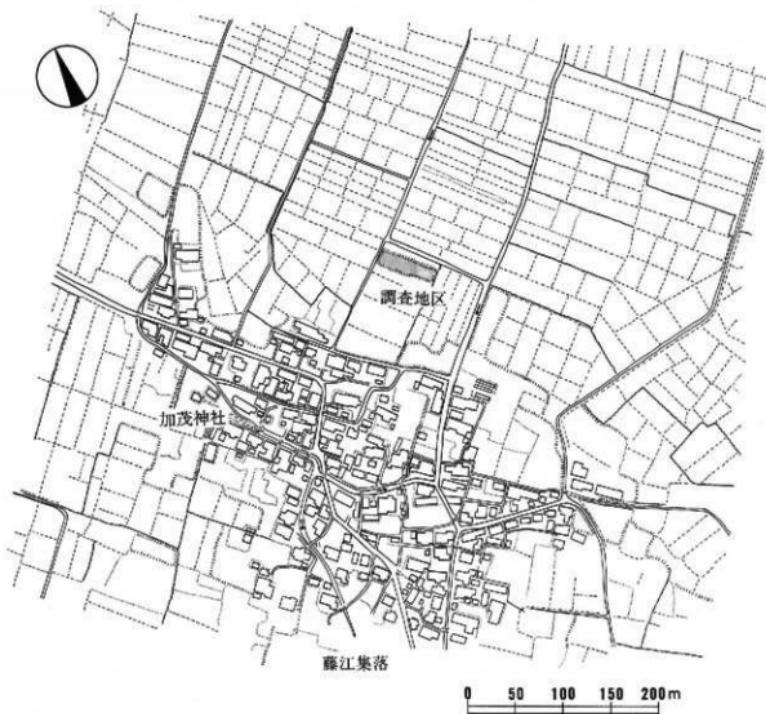


第4図 A地区調査位置図

B地区調査地は、藤江集落の北に位置し、その北には、広大な水田地帯が展開している。現在、調査地周辺の水田は乾田となっているが、地元の話ではこの10数年前までは、田植をすると足全体が沈むような湿田であったという。そうして、A地区調査地点とB地区調査地点とはさまれた藤江集落は、いわば水郷の町と言つてよく、集落内のいたる所を川が流れいて、人々は川を運河のようにして日常の生活の中で利用していた。それに対して今在家集落は、南北に細長い砂洲の上に立地しているといえる。

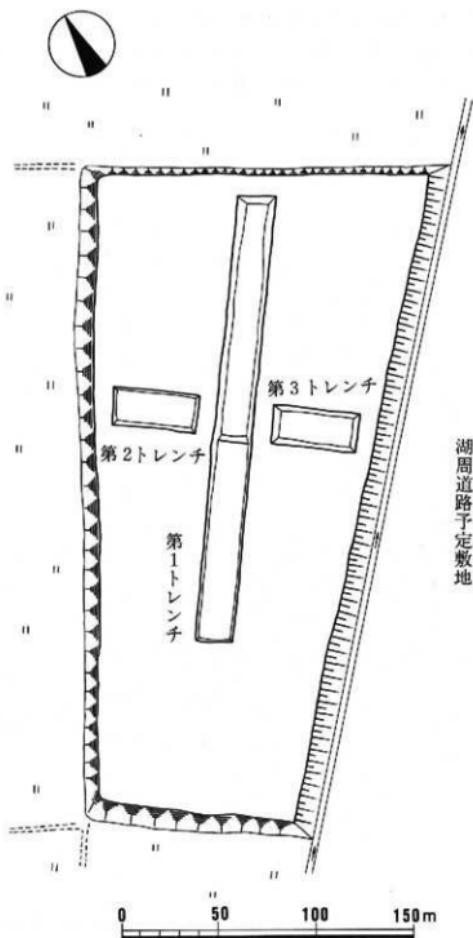
なお、A地区調査地点の所在は、高島郡安曇川町大字四津川字森前（もりまえ）930番地の1にあたり、もともとの面積は408m<sup>2</sup>をはかる。地目は畑地である。B地区調査地点は、同じく高島郡安曇川町大字四津川字六反田（ろくたんだん）214番地にあたり、423m<sup>2</sup>の面積をはかる。地目は畑地。

### 3. 調査の経過



第5図 B地区調査位置

A地区の調査は、所謂土盛の全容を把握するために、まずバックホーンを導入して表土除去からはじめた。その際、5~10cmごとに順次掘り下げながら、遺構の確認調査を行った。調査対象地の土盛を表土面から約30cm前後掘り下げた段階において、遺構検出ための精査を行ったが、何ら遺構らしきものが検出することができなかつたので、トレンチ調査に移った。



第6図 A地区トレンチ配置図

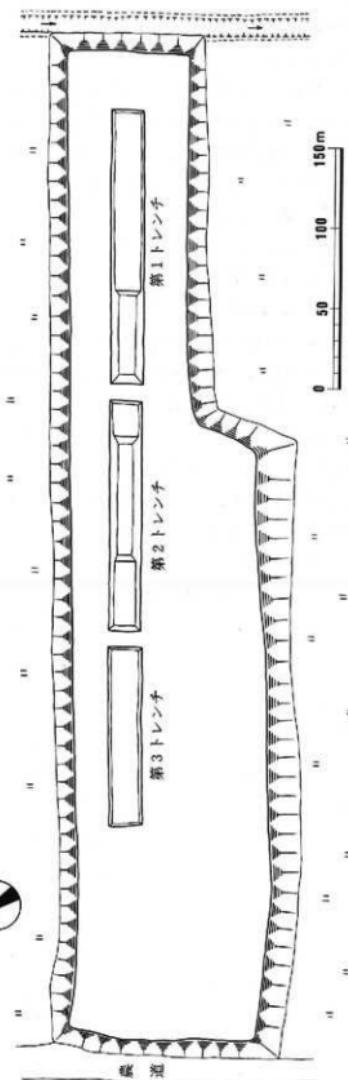
まず最初の第1トレンチは、調査地の中央を南北に細長く設定し、その大きさは巾2m長さ23mをはかる。そして第1トレンチの中央西側に第2トレンチを、また反対の東側に第3トレンチをそれぞれ設定し掘り下げを行ったが、結果として遺構は検出されず、若干の遺物が出土したのみである。第2トレンチの大きさは、巾2m長さ4.5m、第3トレンチの場合も同じく2m×4.5mである。

なお、A地区の土盛の東辺は、われわれが調査を実施する以前に、湖周道路敷地としてその一部がすでに削平されていたことを附記しておこう。その削平面積は、第3図と照合すると、大体3分の1ぐらいと推測できる。そうして湖周道路敷地内には河原石が散乱していることから、東辺の傾面にも石垣が施されていたものと思われる。

次に、B地区の調査は、A地区と同様のバックホーによる掘削をまったく行わずに、トレンチ調査から始めた。トレンチは、調査地の形状に応じ、東西に3本設定した。各トレンチの大きさは、第1トレンチ2m×17m、第2トレンチ2m×14.5m、第3トレンチ2m×11mをはかる。

そして第1トレンチから順次掘り下げていったが、いづれの層位においても遺構がまったく検出されなかったので、第1トレンチおよび第2トレンチの一部を深掘りして、所謂土盛下層の確認調査を行った。もっとも、この下層においても遺構は検出されなかつたが、土器類が少し出土した。

以下、参考までに調査日誌を抄出し



第7図 B地区トレンチ配置図

ておこう。

調査日誌（抄）

昭和59年

- 8月1日～6日 発掘器材等の搬入。A地区の除草作業。景観の写真撮影。
- 8月7日～21日 バックホーによる掘削作業。
- 8月22～25日 精査。写真撮影。
- 8月27日～9月3日 第1トレーナーの掘り下げ。
- 9月4・5日 第2トレーナーの掘り下げ。
- 9月6・7日 第3トレーナーの掘り下げ。
- 9月8・10日 清掃作業。
- 9月11日 写真撮影。
- 9月12～14日 A地区の平板等の実測作業。
- 9月17・18日 発掘器材等をB地区調査地へ。B地区の除草作業。
- 9月19～29日 第1トレーナーの掘り下げ。
- 10月1～11日 第2トレーナーの掘り下げ。
- 10月12～18日 第3トレーナーの掘り下げ。
- 10月19～30日 等1・第2トレーナーの深掘り。
- 10月31日～11月1日 清掃作業。
- 11月2日 写真撮影。
- 11月5～7日 B地区の平板等の実測作業。

## 4. 層序・遺物

### (1) A 地区の調査

調査は、まずバックホーによって表土を30cm前後掘り下げ、それからトレンチ調査に移行したことは、「3. 調査の経過」において述べた通りである。そうして、トレンチの上面から約40cm掘り下げた段階で、砂礫層を3本のトレンチの全面で検出されたことにより、結果として表土面からマイナス70cmまでを同一層とみなすことができる。

そしてさらに第2層以下の層序を追求するため、第1トレンチの北半分と第2・第3トレンチを掘り下げた。この砂礫層の上面60cmあまり下ると、粒子の細かい砂層にかかり、この細粒状の砂層の厚さは20~25cmをはかる。第1トレンチの北辺より5.6mの間では、この砂層の下より、かって水田として使われていたと推定される旧耕土（青灰色粘土層）が検出された。旧耕土の厚さは20cmで、その下層の床土にあたる土層は暗灰色砂質土であるが、湧水の流入がいじじるしく、そのためトレンチ壁の崩壊の危険性が大きいことから、床土以下の掘り下げはできなかった。

したがって、A地区における基本的層序は、第1層・耕土（暗茶褐色粘質土層）、第2層・灰白色砂礫層、第3層・細砂層、第4層・旧耕土（暗青灰色粘土層）、第5層・床土（暗灰色砂質土層）であり、地山は第5層もしくは第5層以下にみられると考えられる。ただし、第2層のすべてが砂礫層であるとはいうことができず、第1トレンチの北辺から南5mの位置と、第3トレンチの東辺から西3.5mの位置に、第1層と同じような粘質土層が、あたかも土壩を補強するために土手として築いたかのように、勾配をもって検出された。

これは、おそらく本来の土盛は現在のそれと比べて非常に小さかったと思われ、それがある時期に北および東へ向かって6~6m以上拉張したことが推測される。

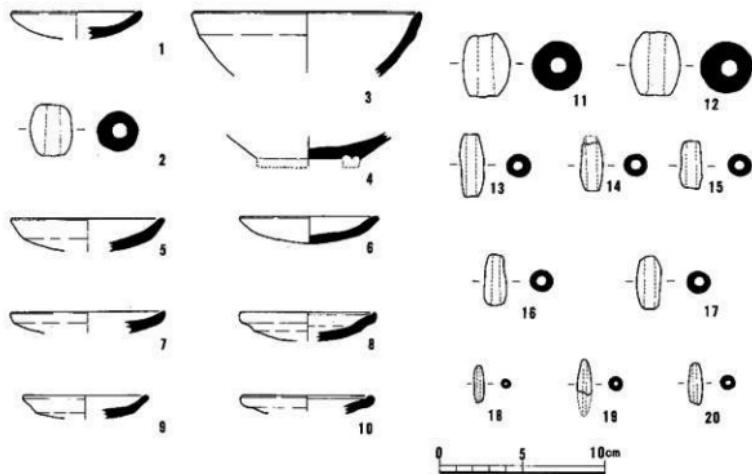
A地区的出土遺物としては、図版50-2に載せたものがそのすべてであって、須恵器・甕、土師器・小皿（第8図1）、土鍤（第8図2）、中世の陶磁器等である。このうち、須恵器・甕の外面には平行タタキ、内面には青海波文がみられる。土師器・小皿は淡黄色を呈し、口径7.8mをはかる。土鍤もまた淡黄色を呈す。同口径2.5m、長さ3.1cm。

### (2) B 地区の調査

基本的層序は、大きく4層に分けることができ、第1層・耕土、第2層・暗茶褐色粘質土層、第3層・灰白色砂礫層、第4層・暗灰色粘土層である。各層の厚さは、第1層が20cm、第2層が40cm、第3層が40cm、第4層が1.5mをはかるが、このうち第4層の掘り下げに際して湧水がはげしく、それ以上の掘り下げはできなかった。

この地区的層序とA地区的層序とを比較した場合、大体よく似た状態を呈していることがわかる。すなわちB地区的層序のうち、第1層から第3層までは土盛構築に伴う際の客土と考えられ、第4層は旧耕土（水田）であって、しかもこの層には床土に該当する土層が認められないことから、所謂床なしの溝田（しるた）といえよう。

B地区的遺物は、近世のものを除いて大半は第4層から出土し、図版50-1に取載したものがほとんどであって、須恵器・甕、土師器・小皿、黒色土器、土鍤、土釜、擂鉢等がみられる。



第8図 出土遺物実測図

須恵器は、高台のついた杯が2点出土したが、このうち第8図4は灰白色を呈し、底部に糸切痕がみとめられる。

土師器・小皿（第8図5～10）は、総じて淡黄褐色を呈し、焼成良好。口径7.5～9.2cm。形態は大きく3つに分類することができ、口縁端部が丸くおさめるもの（5・6・7・9）と、口縁端部を若干上へつまみ上げたもの（8）と、口縁端部の内面に段がついたも（10）である。

黒色土器（第8図3）は、碗であって、口縁部はやや内ぎみに立ちあがり、端部を丸くおさめる。また端部の内面に1条の沈線を施している。器体の内面は黒色、外面は淡黄褐色を呈し、焼成良好。

土塹（第8図11～20）は統べて暗黄褐色ないし赤褐色を呈し、焼成良好である。形態の大きさから、3つに分類することができよう。胴径3cm、長さ3.8cmのやや大型のもの（11・12）、胴径1.3cm、長さ3～3.7cmの中型のもの（13～17）、胴径0.6cm、長さ2.2～2.4cmの小型のもの（18～20）である。

## 5. まとめ

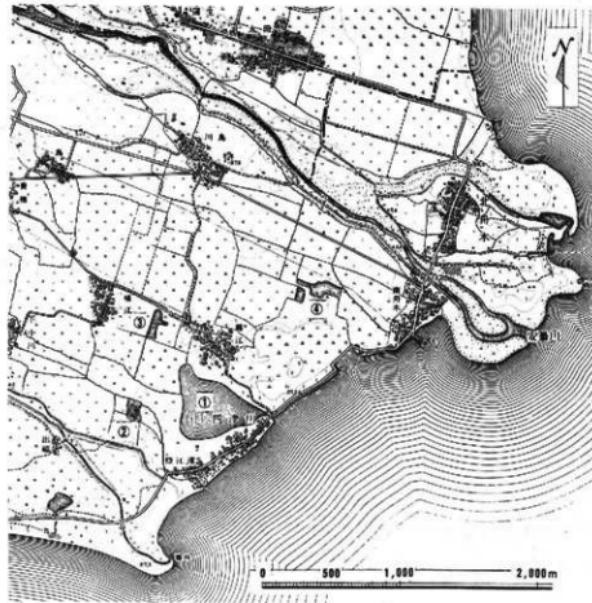
今回の発掘調査における主目的は、藤江集落から横江浜集落にかけての松ノ木内湖周辺を中心に点在している所謂土塹が、いったいかなる意味をもっているのか、言い換えると、どのような性格を有した歴史的記念物であるのかということにあった。沖積平野の水田地帯に、このような方形の土塹が点在するという景観は、安曇川町においてはこの地域にしか見られないである。しかも、藤江の場合は、「2. 位置と環境」でも若

千触れたように、平安時代に安曇河御厨が置かれ、そして鎌倉時代以降もつづいていた土地でもあることから、いきおい中世の建物跡の所謂基壇としての可能性が、充分に予想されたわけである。

今回の調査は、そのうちのは場整備によって削平を余儀なくされてしまう2ヶ所を実施したのであるが、その結果、当初われわれが予想していた遺構を検出するまでには到らなかった。すなわち、これらの土盛には建物はまったく建てられていないことが判明したのである。もちろん、今回の調査結果だけをもって、その他すべての土盛にも建物等の遺構はないかと判断することは、やや早計というものであろう。

それにつけても、平均1000m<sup>2</sup>前後の面積をもった、このような方形の土盛が、自然に形成せられたものとはとうてい考えられないということになると、どのような目的のもとに、甚大な労働力をついやって造作されたのであろうかが疑問として残る。その1つの解答としてまず上げられるのが、A地区・B地区とともに第1層の掘り下げ段階において、表土のあちこちから出てきた桑の根である。このことは、地元の古の話とも総合すると、もともとこの土地は桑畠として利用されていたという事実が浮上してくるわけである。

『高島郡誌』によると、「明治30年前に在りては養蚕行はれたりと雖も、盛ならず。32、33年頃桑園の改良発達と共に、……漸次盛になり、又郡農会・村農会に於ては之が奨励に努め」云々とあり、明治の中頃から養蚕業が盛んになってきたことがわかる。そしてそれが盛んな地方の1つとして、本庄村（現安曇川町本庄村）があげられている。『高島郡誌』に載せられている資料によると、大正7年（1918）において本庄村で養蚕業に從事している戸数は、じつに約450戸をかぞえる。



第9図 昭和30年代の湖岸地図 ①松ノ木内湖(松ノ内沼) ②十六蓮原沼 ③五反田沼 ④十ヶ坪沼

このように琵琶湖に接した旧本庄村は、明治以降、農閑期あるいは1年をとおして農家の副業として、養蚕業がさかんであったことが知られる。と同時に、このことを証明するかのように、掘り下げ段階において第1層（表土）に多くのいわば隙間のようなものが見られたということは、この第1層は客土であって、それが客土された時期はいくら古くさかのぼっても近世にまでさかのぼらないと思われる。つまり、明治以降において桑畠（桑園）として第1層が客土され、それが現在われわれが見ている土盛の景観ということになる。

もっとも、客土ということになると、A地区の場合第4層の旧耕土以上の砂礫層、あるいは砂層もまた、当然のこととして該当する。というのは、桑畠を作成するにあたって、湖岸の浜砂や川砂はこの附近に豊富にあるが、それに対して粘質土は近くで採取し難いことから、土盛の大半を川砂等で代用し、必要不可欠の土の厚み分だけ粘質土を運び込んだ結果であろう。A地区にしてもまたB地区にしても、土盛の下層は水田もしくは沼沢地のような状態であって、そこを埋め立てて桑畠をもつけたのである。そうして、その下層を掘り下げた時に、第7図に示した遺物が検出された。

今回の出土遺物のうち、土錐は魚網のおもしろとして使用されたことはいうまでもないが、やや大型の土錐をのぞいて、他の遺物の内容をみると、ほとんど法仙寺遺跡で出土した遺物と似ている。しかも、法仙寺遺跡の遺物は遺構に伴わずに検出され、この点からいっても本遺跡と法仙寺遺跡は、ほぼ同じ時期の同じような性格を有した遺跡ということができよう。

なお、B地区第3トレーニングにおいて、砂層の中に巾6~7cmの粘土帯が1m間隔に平行に走っているのが検出されたが、どのような性格のものかは、今のところ知り得ない。

土盛下層の出土遺物の年代については、特に第7図の土師器小皿の形態をみると、少くとも3型式を認めるができるので若干の年代幅があるものの、大体鎌倉時代前期（13世紀）にあてはめることができよう。したがって、このような土師器小皿と伴出した土錐もまた、それと同一時期のものと考えてよい。

なお参考までに、本町における同時期の土師器小皿の出土遺跡をあげると、上古賀遺跡・南市東遺跡・法仙寺遺跡の3遺跡があり、前2者は土墓に副葬されて出土をみたものである。また土錐の出土遺跡を列挙すると、上古賀遺跡・南市東遺跡・法仙寺遺跡の3遺跡があり、このうち南市東遺跡の場合は、旧河川跡から平安時代の須恵器にまじって全部で52個体分の出土をみたわけである。

#### 註

- ① 何らかの建物が確認された場合には、「墓壇」という用語をもちいるべきであるが、今回の調査ではそれが検出されなかったので、いちおう土盛と表現した。
- ② 十六蓮原沼は、第3図における「十六」にあたるが、さらに明治15年の「滋賀県小字取調書」によると、隣接の「堅町」「香円」にももとは「十六」があったことが知られる。したがって、第2図に十六蓮原沼が描かれていないので、沼が次第にせばめられて水田化されたためであろう。
- ③ 第2図と第9図とを照合すると、後者の場合、松ノ木内湖の奥は藤江集落の近くまで広がっていたことがわかる。
- ④ 『安曇川町史』（1984）の巻頭口絵を参照されたい。「比叡新花之図」の考察については、『町史』第4章第4節等に樺本鉄男氏が論及されている。
- ⑤ 中江彰『南市東遺跡発掘調査概報』（安曇川町教育委員会 1982）

# 図版



1. A地区遠景（南から）



2. A地区近景（北東から）



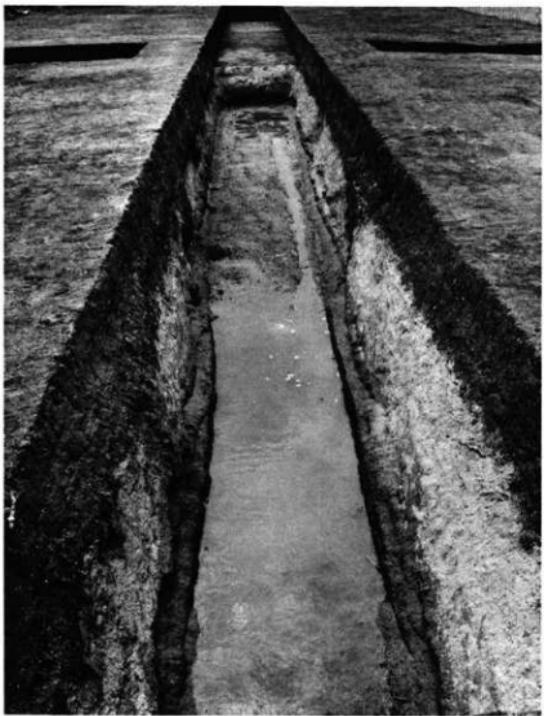
1. バックホーによる掘削（北から）



2. A地区全景（南から）



1. A地区トレンチ  
(南から)



2. A地区第1トレンチ (北から)



1. A地区第2トレンチ（東から）



2. A地区第3トレンチ（東から）



1. B地区遠景（藤江集落から）



2. B地区全景（西から）



1. B 地区トレンチ（西から）



2. B 地区トレンチ（東から）



1. B地区第1トレンチ  
(西から)



2. B地区第1トレンチ縦序 (東から)



1. B地区第2トレンチ  
(西から)



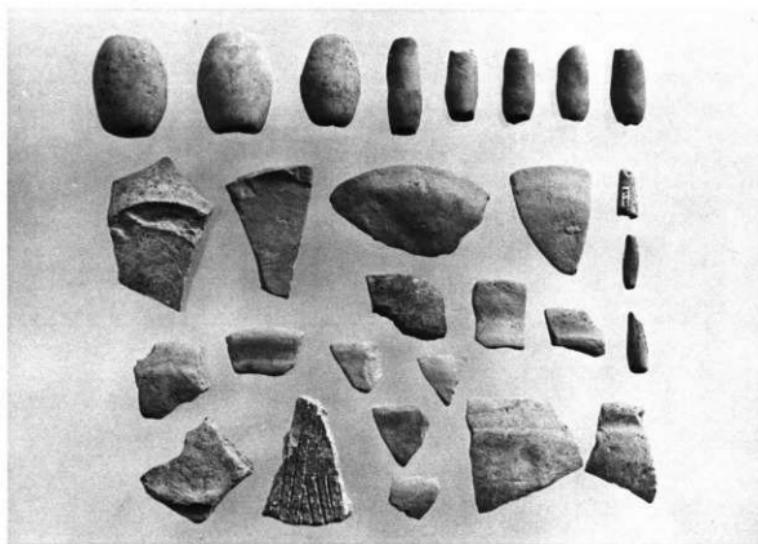
2. B地区第2トレンチ層序 (北東から)



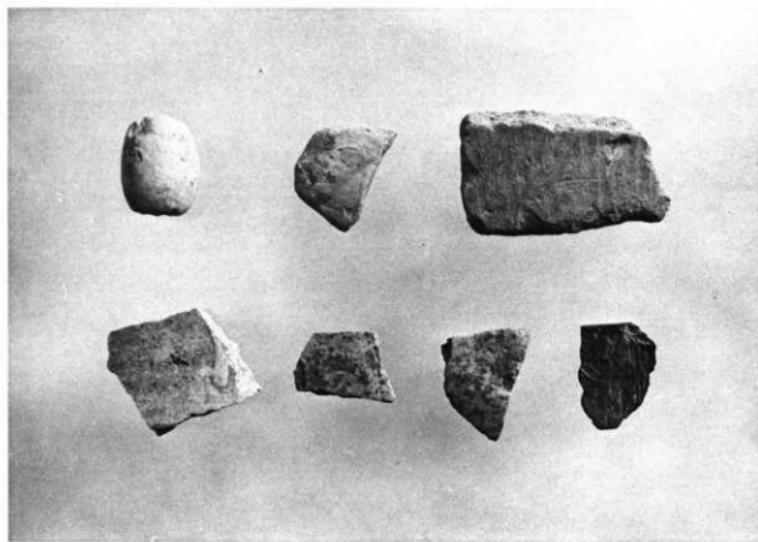
1. B地区第3トレンチ  
層序（南西から）



2. B地区第3トレンチ（西から）



1. B 地區出土遺物



2. A 地區出土遺物

## 第四章 高島郡高島町永田遺跡

## 1. はじめに

本概要是、高島郡高島町水田の県営は場整備事業に伴ない、昭和59年度に実施した永田遺跡の調査をまとめた概要報告書である。

水田遺跡は、中世の近江の守護職として古頭していた佐々木氏の勢力がこの地におよび、土豪であった永田氏もその傘下となり居城（永田城）を構え、それが現在の上永田集落の北西に土壘状の遺構を残存しているところより永田遺跡として呼びならわされて来た。

本年度のは場整備事業計画は永田遺跡を保護する状態で北側を実施する計画であるが、遺跡地と隣接するので同遺跡（永田城）の性格つけを目的とする調査をめざした。

調査はは場整備事業計画のうち、掘削計画のある排水路、道路予定部分を中心にトレンチを設定して調査を行ない、遺物包含トレンチは拡張を行なうという計画で実施して遺跡の保存資料を得る形をとった。

現地調査は昭和59年（1984）10月11日から始めて一応、同60年（1985）1月10日に終了したが現在も現地について観察・調査・整理を行なっている。ゆえに今後、どのような遺構、遺物が検出されるかわからないのでこの概要是あくまで調査の中間報告的性格を抜けきれない概要であることを予め断わっておく。

調査は高島町教育委員会が滋賀県文化財保護課、財団法人滋賀県文化財保護協会の依頼を受けて実施した。調査の体制は次の通りである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 （財）滋賀県文化財保護協会

高島町教育委員会

調査指導 （財）滋賀県文化財保護協会

調査課長 林 博通

技 師 吉谷芳幸

調査主任 高島町教育委員会

学 茄 員 白井忠雄

調査員 谷本 博

調査補助員 櫻井信也・山本 孝・谷口康治

作業員 橋本多寿子・万木ミヨ・中西美智子・山本まつ・山本定子・半井はな・平井よし子・山口時枝・  
村谷和子・山田朱美

カメラマン 寿福 滋（遺物写真）

なお調査にあたっては、今津県事務所土地改良課・永田地区の方々の御協力を得たほか、鎧帶・文字遺物については奈良国立文化財研究所の町田章・鬼頭清明諸先生の御教示を受けた。記して厚くお礼申しあげたい。

また、橋本鉄男先生（滋賀県文化財審議委員）には本地師関係についていろいろ御教示と示唆に富む御意見をいただいた。

## 2. 地理的環境

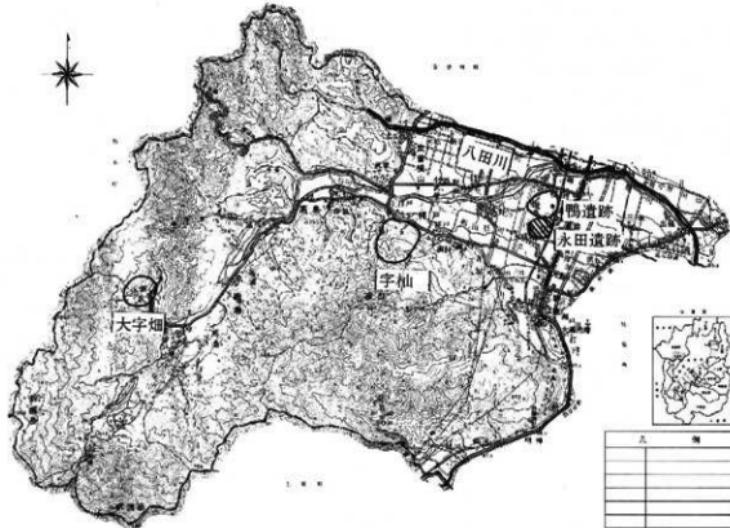
水田遺跡の所在する高島町は滋賀県の西部に位置している。京都から国鉄湖西線に乗り山科を抜け、三井寺・比叡山・雄琴・堅田を過ぎると右手に琵琶湖が広がり左手に湖西の雄嶺比良山地が脈々と続く。京都駅を発車して約1時間、志賀郡と高島郡を分ける明神崎のトンネルを抜けると広大な平野が眼前に飛び込んで来て右手に美しい乙女ヶ池（内海）が見え、翼を休めている水鳥が旅情をかきたてる。ここが高島郡で、すぐに近江高島駅に至る。同駅を発車して小田川を渡ると北西方向に上永田の集落があり、その北方の水田群が永田遺跡である。

高島町は滋賀県西部、湖西地域の高島郡の内、最南部に位置する。本町を北と南に分けると、北は鴨川や安曇川が形成した沖積平野の高島平野が継ぎ、南は比良山地北縁の山間部がそそり立つ。高島町は山あり谷あり川あり琵琶湖があるという美しい環境を形成している。現在の高島町の面積は約 64.27km<sup>2</sup>で人口約 6 千 6 百人の農山村地帯である。しかし、ほとんどが兼業農家型である。

水田遺跡は高島町内の平野部としては中心部に位置し、北の慾川と隣接している。遺跡地には多くの藪が点在しており、旧河道が近くにあったことを思わせる。ほ場整備事業が完了するとこの藪も取り払われてしまい、附近の景観は一変するであろう。

水田遺跡の西には蛇谷ヶ谷（西山）が、南には巌山が望め、これらの山々から集められた水流が鴨川となって町域を西から北へと流れ、母なる琵琶湖へ注ぐ。

気候の特色としては漸移地帯に入って、これより北は日本海側式気候で豪雪地帯である。毎年秋、10月のおわり頃より夕方を中心としてしぐれが多くなり、雪に変わってゆく。このしぐれを高島しぐれと呼びならわし



### 第1図 高島町全図

ている。ちなみに昨年（昭和59年）2月には60年来の豪雪を記録し、また、同年10月から12月頃にかけては少雨による琵琶湖の記録的な渇水を受け、異常気象の現象が見受けられる。

#### 参考文献

角川日本地名大辞典 25 滋賀県 昭和54年 発行

### 3. 歴史的環境

水田遺跡を取りまく歴史的環境は、古く縄文時代より始まる。昭和54年度の鴨地区のは場整備事業に伴なう鴨遺跡埋蔵文化財調査の中で、縄文土器片を検出されたことによる。

続く弥生時代もやはり鴨遺跡より弥生土器片の検出により確認された。しかし、本町では明確な縄文・弥

生期の遺構は現在のところ見出しえていない。ただ、隣町の安曇川町末広に所在する南市東遺跡より弥生時代中期・後期の方形周溝墓ならびに住居跡が検出され、集落の営なまれていたことが判明している。

古墳時代に入ると、高島郡では鴨川・安曇川・石田川などの主要河川を中心に古墳群が形成されている。水田遺跡に関連のある鴨川水系の場合、盟主墳として6世紀初頭に鴨稻荷山古墳が平野部に築造されている。山麓の音羽や押戸に5世紀代に遡り得る古墳が見られるが、発掘調査を伴なっていないので今は可能性だけを述べておく。

古墳時代後期の群集墳形成期には、阪畠古墳群、白螺神社古墳群、見張古墳群、音羽古墳群、押戸古墳群、東山古墳群などの数十基を構成群とした群集墳がつくられる。

奈良・平安時代には、平安時代初期を中心とする鴨遺跡が鴨稻荷山古墳の南方に出現する。

また、万葉の故地として三尾の勝野・三尾崎・真長浦・香取浦の名が出てきて、万葉集などに詠まれてい



第2図 位置図

る。壬申の乱（672年）の時、大友皇子軍が大海人皇子軍より防戦出来なかった三尾城や天平宝字八年（764年）、恵美押勝の乱の中心人物である恵美押勝が斬罪に処せられた藤野の鬼江もこの近くであろうと推測され、古代史の舞台に幾度も登場している。式内社としては、水尾神社（坪戸）・長田神社（永田）・宇伎多神社（野田）・志呂志神社（鶴）の四社がある。水尾神社は、三尾君の祖・磐衡別命を祭神とし、背後の三尾山を（神奈備山）仙山とも呼び、造東大寺の高島山作所の山であったと推定されている。明神崎の長宝寺山には比良三千坊の一院で、高島七ヶ寺の一つである長法寺（嘉祥二年—849年創建と伝えられる）の跡と思われる遺構が残る。

#### 参考文献

高島町史 編集高島町史編さん室 昭和58年 発行

### 4. 調査の経過

永田遺跡の調査は昭和59年の10月より開始された。主たる目的は、中世の永田城の範囲を確認することであった。調査方法としては場整備事業範囲内で水路や道路各部分に計画されている箇所へ任意のトレンチ（3m×3m）を設定し地下の状況を観察し今後の資料として記録を取り、トレンチを拡大するかの判断の目安とした。任意のトレンチとして53箇所を設定し調査した。

調査結果は、調査対象範囲を西と東とに別けると、西側は耕土面直下より疊層が堆積し旧形として河原であ



第3図 トレンチ配置図

ったことがうかがえる。東側は遺物の包含が若干見受けられる南のトレンチでは古式土師器片から近世陶磁器まで出土した。しかし、中世の水田跡付近では目立った遺物は検出できなかった。北のトレンチでは、九世紀代の遺物が出土した。主要な遺物は須恵器片や土師器片であった。出地点は、昭和54年度は場整備事業に伴う埋蔵文化財調査で多くの注目する九世紀代の遺物群を出土し、合せて高島郡衙推定地として有名な鶴遺跡より南へ300mのところに位置し関連遺跡であろうと想像させた。

この53トレンチの調査結果にもとづいて各トレンチを拡大し再調査を実施した。拡大トレンチは頭にBを付けて、B 1～B 9トレンチまで設定し調査を行なって下記のような多くの成果を得た。

(註) T T N T - B 1とはT-高島郡 T-高島町 N T-水田遺跡報略記号である。

——水田遺跡報告会—— 昭和59年12月16日(日) 午後より

『小さな・小さな現地説明会』と題して中間報告会を現地で実施した。当日は、あいにくの雪空で寒さが身にしみた。しかし、水田地区の人々を中心に約20名の方々が参加され有意義な埋蔵文化財の学習会ができた。



第4図 現地説明会風景

## 5. 調査の結果

### (1) 遺構

#### B 1トレンチ

長さ15m、幅3.5mを計り、南半分は耕土のみ除去し、北半部を0.6mの深さまで掘下げる。遺構は認められず、遺物も須恵器・土師器の細片少量が出土したのみである。

#### B 3トレンチ

長さ52m、幅3m、深さ0.3mを計る。遺構は認められず、須恵器・土師器の破片が少量出土した。

#### B 4トレンチ

長さ9m、幅3m、深さ0.3mを計る。遺構は確認出来なかったものの土師器壺半個体分の他、平安時代前期頃の須恵器・土師器破片少量が出土した。

#### B 5トレンチ (図版二・四)

長さ48m、幅3.5m、深さ0.2mを計る。遺構は確認されず、平安時代前期頃の須恵器・土師器破片が少量出土した。

#### B 6トレンチ

長さ29m、幅3m、深さ0.3mを計る。茶褐色砂礫のベースに若干の土塙・柱穴跡が認められた。

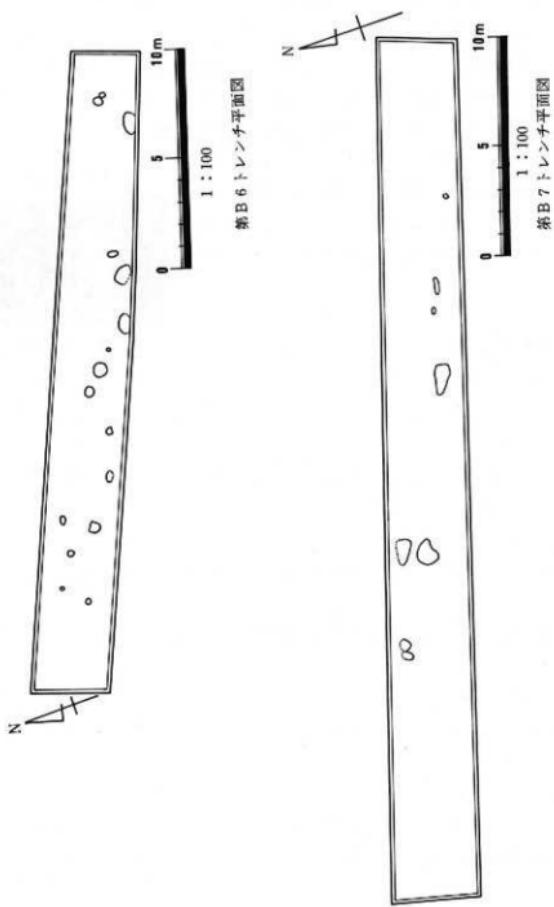
遺物は主に黒灰褐色砂質土層中から奈良時代から平安時代の綠釉陶器片を始め須恵器・土師器破片などが出士した。

#### B 7トレンチ (図版三)

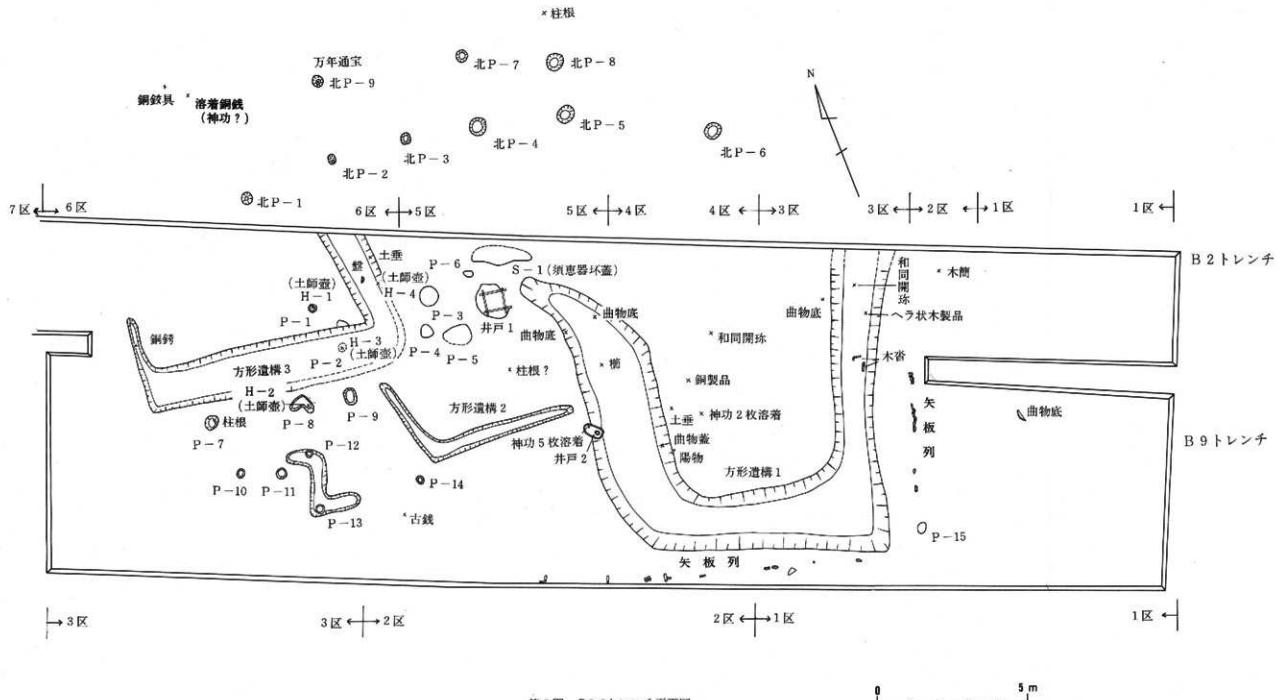
長さ39.5m、幅3.5m、深さ0.6mを計る。遺構は微砂質土のベースに土塙・柱穴跡などが認められた。

遺物は、遺構面附近に奈良時代から平安時代の須恵器・土師器破片が散在していた他、上部土層中にも同様の土器片が少量含まれていた。

#### B 8トレンチ (図版三・四)



第5図 第B 6・7トレンチ平面図



第6図. B2・9トレンチ平面図

A horizontal scale bar consisting of a black line with tick marks. The number '0' is at the left end, and '5 m' is at the right end.

長さ78m、幅3.5m、深さ0.3mを計る。平安時代の須恵器・土師器破片が散在するが、遺構は認められなかった。但し現水田畔下より、畔を強化する為に木材の並べられているのが観察された。

#### B 2・9 トレンチ（図版二・五）

B 9 トレンチはB 2 トレンチで検出された遺構を追跡する目的で設定されたものであり、ここでは一体のものとして扱うこととする。

先に設定されたB 2 トレンチは長さ56m、幅3.5m、深さ0.4mを計り、南接するB 9 トレンチは長さ37m、幅7m、深さ0.4mを計る。両者を区切る畔は最終的には大部分除かれた。両トレンチとも遺構面上を0.3mの厚さで包含層（青茶灰色粘質土・暗灰褐色砂質土）が覆っている。

検出された遺構は方形状遺構（以後、方形遺構と略す）3基・井戸2基、その他の柱穴跡・土塙などで、出土遺物から見ていずれも奈良時代後期から平安時代前期（8世紀末から9世紀初頃）にかけてのものと推測される。

方形遺構1はB 2・9 トレンチの東寄りの部分に存在し、外周規模はおよそ東西10m、南北9m以上を計り、幅1.5~2.5m、深さ0.1m前後の浅い溝が北に開くコの字形に通る。そして、それを閉むようにして東と南に矢板列が存在し、一部に板塀状の痕跡を示す。（図版六・十二）

遺物は、遺構面附近より多くの須恵器片を始め、土師器片、土師質土錐、焼けて溶着した神功開宝計7枚（5枚と2枚、グラビア写真の9と10）、陽物（図版一七の24）、火きり白（同25）、曲物底板（同21と29）、紡車（同20）、木査（同22・23）などの木器や一部がこげた木片多数が出土し、また、遺構埋土中からも同時期の須恵器・土師器片が出土した。なお、西側周溝の西端にかかる形で井戸2が存在し、一部が溝によって切られている様が観察された。

方形遺構2は方形遺構1の西隣りに存在し、溝の一部がL字形に残る。溝は南側のものが長さ5m、西側のものが長さ3m、幅は双方とも0.3~0.5m、深さは0.1m前後を計る。

遺物は遺構埋土より須恵器片が出土した。

方形遺構3は方形遺構2の北西に接して存在し、北開きのコの字形をしているが、溝は浅く、一部で不明瞭になっている。また、西溝は申し分け程度にしか残っていない。現状規模は東西8.5m、南北4.5m以上、溝幅は1~1.5mだが西溝は0.3mとなっている。

遺物は、遺構面より須恵器片や土師質土錐、木製盆の一部などが出土、遺構埋土より同時期の須恵器片などが出土したほか、溝底部のピット2ヶ所により土師質の平底壺がそれぞれ出土し、また南側溝をはさんで2つあるピットからも同様の土器が出土しており、うち2つの壺にはトチの実とみられる物が入っていた。（図版一五）そして西側溝埋土上面より銅鏡帶（巡方・グラビア写真の3）が出土した。

井戸1はB 2 トレンチ中央東寄りに位置し、上部は方形に木枠を組み、下部は曲物を上下2段に据えている。上部方形枠は65cm×60cmを計る。

遺物は掘方や本体埋土より須恵器・土師器片のほか上部枠埋土より斎巾（図版16-17）下部枠埋土より和同開称（グラビア写真5）、井戸底部より完形の須恵器壺蓋（図版一四の1）が出土した。

井戸2は、前述の如く方形遺構1によって一部切られており、これに先行する遺構であることがわかる。井戸枠は横円形の曲物を使用し、内枠として円形曲物を据えている。前者は長径0.6m、短径0.35m、内枠径0.1mを計る。遺物は埋土などより須恵器片が出土した。

その他の柱穴跡・土塙などからも同様の土器片が出土している。

なお、特記すべきこととして、B 2 トレンチ内東方で青茶灰色粘質土中より木簡が出土したことがあげられる。くわしくは別記にゆずるが、秦氏の名が記されており、遺跡の性格を考える上で重要な位置を占めることは間違いないであろう。

またB 2 トレンチ北の区域外でピット群が検出され、北P-9内から萬年通宝（グラビア写真の8）が出土したのを始め、附近の包含層（B 2 トレンチのものと同一）中より銅製帶金具3点（鉄具一グラビア写真1、丸頭一同2、巡方一同4）や焼損神功開宝、須恵器・土師器片などが出土した。

## (2) 遺物

永田遺跡出土遺物量はコンテナーにして約百箱を有に越すであろう。現在も整理中であり、特に目に付いた遺物についてのみ説明を行なう。

### 木器

#### 木簡（図版13・16-13）

##### 第一号木簡

付札と考えられる。目釘穴の部分でちょうど削れているので大きさは左に同形の半転した大きさが原形であろうと推定される。現存値は、長さ25cm、幅3.9cm、厚さ0.4cmで材はヒノキ材であると思われる。

判読については奈良国立文化財研究所の鬼頭清明先生にお願いし、今までのところ図-7の文字が読み取れ、はたのひらひとよかざか人名として、秦掠人酒公、秦廣鳴が見えるとのことであった。伴出した土師により8世紀末から9世紀初頭の年代があたえられよう。

#### 斎 串類（図版-16 14・15・16・17・18・19）

時代としては、B-2・9 トレンチは包含層中の土器が9世紀初頭を中心であるので、所属時期も同様であると考える。Mの記号は木器取り上げ番号で図-6と対応する。

図版	出土地	現存値 長幅厚(cm)	備考
16-14	B 2 トレンチ4区 暗褐色砂質土	18.7×2.0×0.4	
16-15	B 2 トレンチ4区 暗褐色砂質土	17.7×2.2×0.3	
16-16	B 2 トレンチ4・5区 灰色粘質土	13.6×1.9×0.2	
16-17	B 2 トレンチ 井戸1表土より	10.5×2.0×0.2	
16-18	B 2 トレンチ4・5区 灰色粘質土	7.9×2.1×0.2	
16-19	B 2 トレンチ4・5区 灰色粘質土	9.5×1.9×0.4	本器の端に丸穴2箇所が見とめられ人形である可能性がある。

表-1 斎串計測表



第7図 第1号木簡略図

その他の木器（図版17）

図 版	出 土 地	現 値 幅 厚 (cm)	備 考
17 - 20	B 2 トレンチ 方形遺構-1	7.3 × 1.2 (直径)	紡錘車 穴の直径 1.2cm
21	B 2・9 トレンチ M-7	16.1 × 0.7 (直径)	曲物の底板 目釘の釘あり
22	B 2 トレンチ1~5区 暗褐色粘質土	15.0 × 6.5 × 3.8	木柵のつま先部分
23	同 上	20.0 × 8.0 × 2.5	木柵のかかと部分
24	B 2・9 トレンチ M-9	17.5 × 2.8	陽 物
25	B-2・9 トレンチ1区 方形遺構1埋土	36.7 × 3.2 × 2.2	火きり臼 臼の直径 1.3cm
26	B 2・9 トレンチ M-10	35.0 × 8.7 × 1.2	円 板
27	50トレンチ 暗灰褐色砂質土	23.7 × 10.5 × 0.5	木 盤 時期不明
28	B 2・9 トレンチ M-8	23.0 × 8.7 × 0.6	木 盤
29	B 2・9 トレンチ M-3	15.3 × 8.3 × 0.5	曲物の底板

表-2 その他の木器計測表

※Mは木器の略記で挿図-6と対応

須恵器・無釉陶器・綠釉陶器（図版-14 1・2・3・4）

図 版	出 土 地	現 値 径 高 (cm)	備 考
14 - 1	TTNT-B 2 トレンチ 井戸-1より	13.2×2.5	須 恵 器 蓋
14 - 2	TTNT-B 2・9 トレンチ S-1	16.7×0.3	"
14 - 3	TTNT-B 8 トレンチ 灰褐色粘質土	12.0×2.7 (復元)	皿
14 - 4	TTNT-B 5 トレンチ 灰色粘質土	11.8×3.2 (復元)	皿

表-3 土器計測表

※Sは須恵器の略記で挿図-6と対応

墨書き器 (図版-14 5・6・7・8)

14-6は“媛”、14-7は“志津”と鬼頭清明先生に判読していただいた。外の2点については破片で資料不分であった。

木の実包藏土器 (図版15)

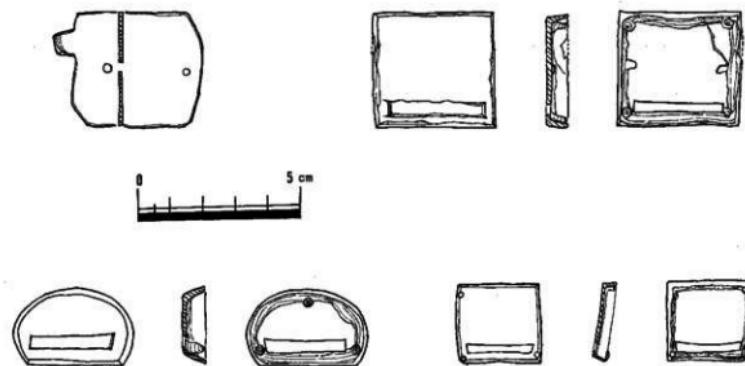
4点とも平底の土師器である。図-6と対応して15-9はH-4・15-10はH-3・15-11はH-2・15-12はH-1である。全て倒立した状態で出土し、特にH-4とH-3は器内にトチの実と思われる木の実を包蔵している。人為的に入れられたか流入されたか、今後の問い合わせである。馬遺跡では柿の実が皿の上や下に置かれていたようであると述べられている。

帶金具 (グラビア写真)

B2・9トレンチより4個の帶金具が出土している。貨幣としては21枚出土している。

番号	名出 土 地	名 称	備 考	横幅 枠幅 厚さ 透孔(cm)
1	TTNT-B2トレンチ 6区北区域外レキ含む 青灰色粘質土	銅帶具	表金具・板金	4.5 3.5 0.1 0.25 (直径)
2	TTNT-B2トレンチ6区 北区域外 青茶灰色粘質土	銅鋳帶九筋	表金具鋳造表周縁に面取り 鋳造裏面の三方に鋳足つく	3.7 2.4 0.1 2.5×0.4
3	TTNT-B2・9トレンチ 暗灰褐色砂質土	銅鋳帶巡方	表金具鋳造表周縁に面取り 裏面の四隅に鋳足をうえる	3.7 3.5 0.1 2.9×0.5
4	TTNT-B2トレンチ5区 北区域外 暗灰褐色砂質土	銅鋳帶巡方	表金具鋳造 火を受けてもろくなっている 鋳足の補修孔があり1側に銅製の釘を残す	2.4 2.4 0.1 2.0×0.3

表-4 帯金具計測表



第8図 帯金具実測図

## 貨幣（グラビア写真）

写真番号	名称（年号）	出土地	備考
5	和同開珎 (708)	T T N T - B 2・9 トレンチ 井土1枠内埋土より出土	
6	#	T T N T - B 2 トレンチ K-5	
7	#	T T N T - B 2 トレンチ K-4	
8	萬年通寶 (760)	T T N T - B 2 トレンチ 北区域外P-9	
9	神功開寶 (765)	T T N T - B 9 トレンチ 2区 K-3 方形遺構1埋土	2枚溶着
10	#	T T N T - B 9 トレンチ 2区 K-2 方形遺構1埋土	5枚溶着
11	#	T T N T - B 2 トレンチ 暗灰褐色砂質土層	火を受けている
12	寛永通寶	T T N T - B 9 トレンチ 2区 青茶灰色粘質土	
13	#	T T N T - B 2 トレンチ 1区	火を受けている
14	寧元宝 (1068)	T T N T - B 1 トレンチ	
15	元豐通寶 (1078)	T T N T - B 9 トレンチ 2区 K-1	
16	不明	T T N T - B 2 トレンチ 5区 北区域外暗灰褐色砂質土	5枚溶着

表-5 出土貨幣表

※ Kは金属器の略記で挿図-6と対応

〔註〕 1高島町教育委員会 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 「鴨遺跡」 昭和55年

2佐藤興治他「平城宮発掘調査報告書VI」 奈良国立文化財研究所学報第23冊 昭和50年

3龟田博「銅帯と石帯」(「関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢」) 昭和58年

## 6. ま と め

今回の永田遺跡調査の目的は、中世の高島七頭の内、永田氏の居城である永田城の範囲確認調査が主たる課題であった。しかし、調査結果は永田城関係については多くの成果が得られなかった。が、しかし、高島郡の古代、特に九世紀代を考えるには一級の資料を今回の調査によって与えられた事は考古学を学ぶ者として最大のようこびである。

この遺跡を考える時、第1号木簡に記された人名「秦掠人酒公 秦廣嶋」が有力な手がかりとなる。この木簡出土によって、この地が古代に秦氏と何らかの関係を持っており特に「秦掠人酒公 秦廣嶋」の2名はこの地と切り離せないであろうと併に、秦氏の勢力が伸びていたことが十分に考えられる。秦氏については、昭和54年に調査された鴨遺跡から、奈良・平安期の木簡（荷札）として「遠敷郡遠敷郷小丹里秦人足崎唐米六斗」と墨書きされており、秦氏がここでも見受けられる。

奈良朝時代から唐制を受けて施行された官位を示す帯の内、銅製の鉢帯で鉢具（表金具）1個・丸柄（表金具2種）2個・巡方（表金具2種）2個が出土しており、形式としては透孔を有しており古相を呈する 帯2種類以上は有していたと考えられる。時代としては九世紀前後と考えられる。貨幣もまとめて出土している。皇朝十二文銭の内、和同開珎3枚・萬年通寶1枚・神功開寶8枚が出土している。ただ、5枚溶着している貨幣がありさきの神功開寶8枚全てが溶着しているので、この貨幣も神功開寶と考えてよいと思う。溶着の原因を考えると、近くから出土する木片が焦げていたり、銅鉢帯の一部に火を受けたあとが認められたりするので、火災があったとみられる。

調査成果を総合すると、この地に9世紀前後、秦氏と深い関係（同族）を持って、銅の帯金具を身に付ける下級官僚同位のクラスの人物が居住していたことがうかがえ、ある時、火災にみまわれて廃棄化したことが推定される。

では、この人物とはいってどの様な人であろうか。この問題を取り上げると、やはり高島山作所の設置へと思ひは移る。高島山作所は正倉院文書に見え、八世紀の大事業である奈良の東大寺を造る時に、近江国内に高島山作所・甲賀山作所・山上山作所が設けられたとある。高島山作所の位置については、今回調査を行った永田遺跡の南西に望める押戸の袖山にもとめる説が定説化しており、その時代、附近に山作所が設置されていたと考えられる。山作所には木工職を中心として多くの工人が出入していたであろう。近江の国へは勝屋主を中心として秦の姓を持つ工人が造石山院所へ遣わされていたとある。

その内に秦廣津と呼ばれる人物が木工職として造東大寺司より造石山院所へ遣されたと記されている。秦廣津の姓名の人物は造石山院所へ来たことより、当然高島山作所へも赴いたと推測される。時代的に約百年ぐらいいの差があると考えるが、先述の鴨遺跡より「廣津」・「廣津跡」の墨書き土器が出土しており、推測の域を出ないが「秦廣津」とはまったく関係ないとは思われないのである。

一枚の木簡が出土した事によって得られた情報は多くの史料を導き出す結果となった。特に秦氏の関係については、より一層深いものとなつた。永田遺跡を中心に九世紀前後、秦氏と関連を持つ下級官僚クラスの人物がここに居住したと推測され、この人物が高島郡に大きな影響力をおよぼしていたことうかがえる。今後、高島郡の古代史は九世紀代を軸として研究が展開されることは確実である。

〔註〕 1 橋本鉄男『木地屋の系譜』（『山の民俗・歴史公論3』）昭和60年3月発行

2 日本古代人名辞典5 発行所吉川弘文館 昭和54年刊行

# 図 版



1. 全景 嵐山をのぞむ（北東より）



2. 全景 鴨道跡よりのぞむ（北より）



1. 第B2トレンチ（西より）



2. 第B5トレンチ（東より）



1. 第B7トレンチ（西より）



2. 第B8トレンチ（東より）



1. 第B 5 トレンチ（東より）



2. 第B 8 トレンチ（東より）



1. 第B 2トレンチ（東より）右手ポールの地点が第1号木簡出土地点



2. 第B 2・9トレンチ（東南東より）



1. 第B 9トレンチ L字形矢板列が見受けられる（東より）



2. 第B 2トレンチ 木器類の出土状況（東より）



1. 第B 2 トレンチ 井戸ー1 検出状況（南西より）



2. 第B 2 トレンチ 井戸ー1 検出状況（北東より）



1. 第B 2トレンチ 井戸ー1 埋石を除去状況（南より）



2. 第B 2トレンチ 井戸ー1 井戸枠検出状況（西より）



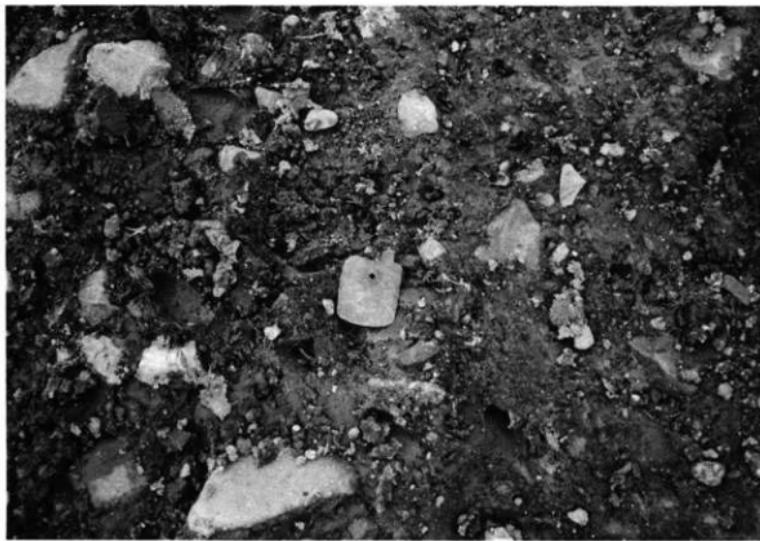
1. 第B2トレンチ 井戸ー1 井戸掘方検出状況（南より）



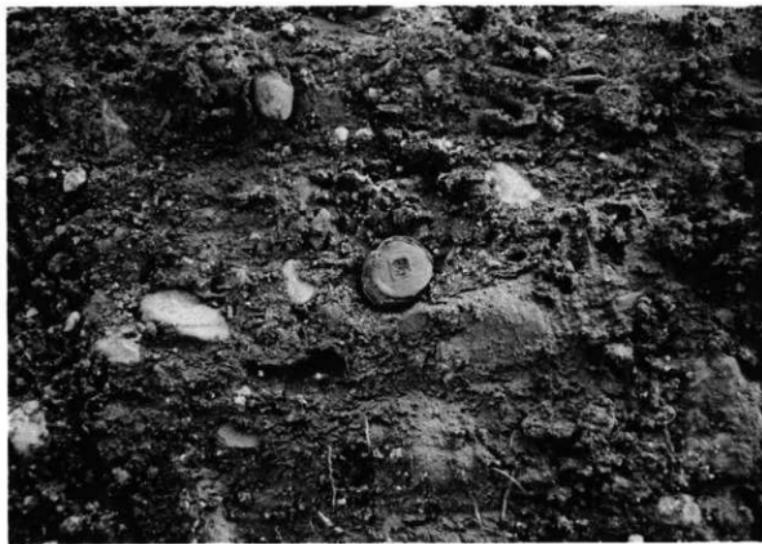
2. 第B2トレンチ 井戸ー1 底部曲物井戸枠検出状況（南より）



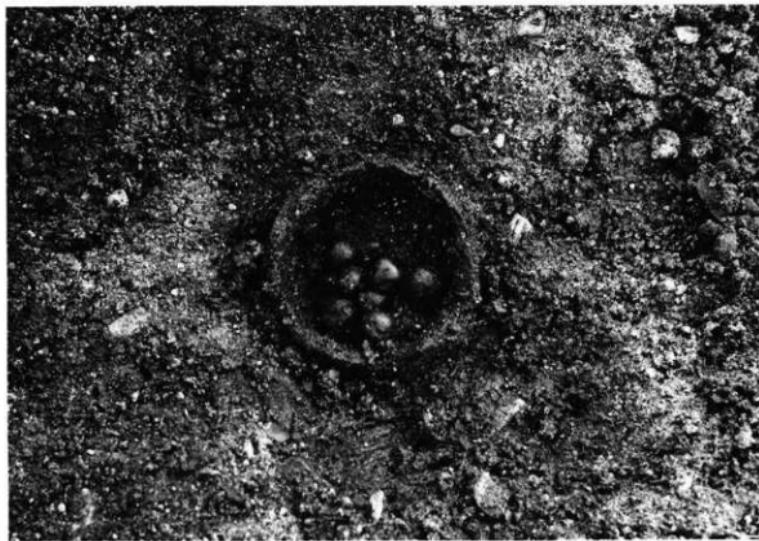
1. 第B 2 トレンチ 鎏帶道方（銅製品）



2. 第B 2 トレンチ北区域外 鎏帶鉸具—裏金具—（銅製品）



1. 第B 9 トレンチ 沿着状の神功開宝（天平神護元年—765年）



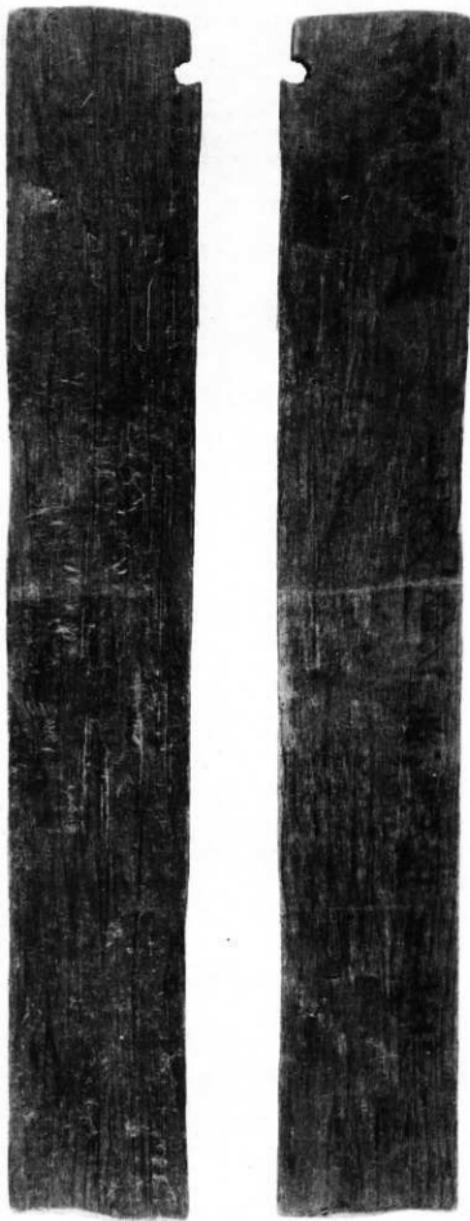
2. 第B 2 トレンチ H-4 土師器木の実包藏状態



1. 第B 9トレンチ 方形遺構-1の外部L字牆列検出状況（南より）



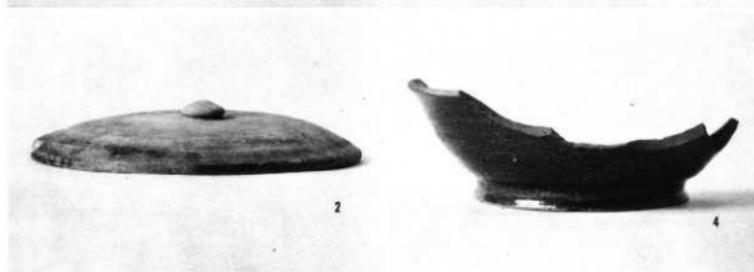
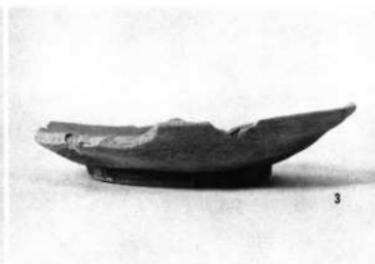
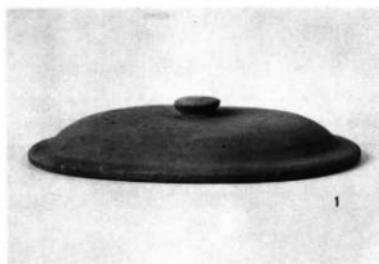
2. 第B 2+9トレンチ 方形遺構-1の最終遺構面検出状況（西南より）



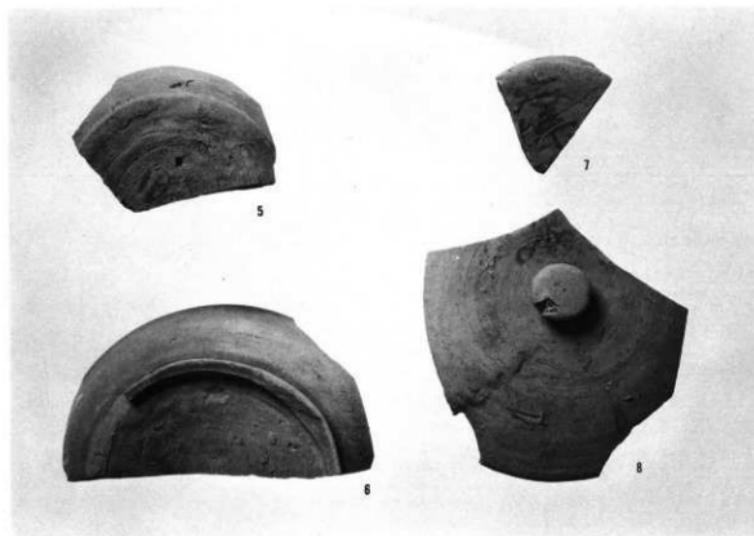
裏

表

第1号木簡 赤外線写真(奈良国立文化財研究所提供)



1・2. 須恵器 3. 無釉陶器 4. 緑釉陶器



墨書土器



9



10

TTNT-B2・9tr6区  
H-4(トチの実)

TTNT-B2・9tr  
H-3(トチの実)



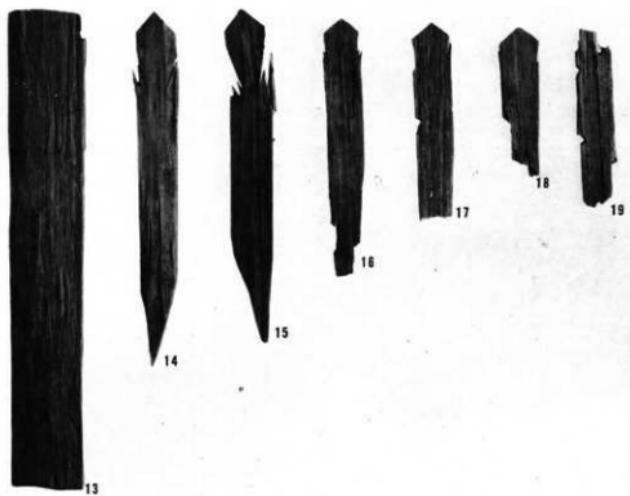
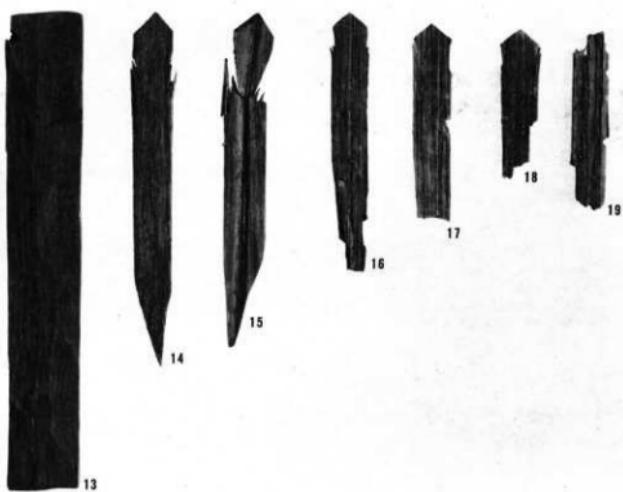
11



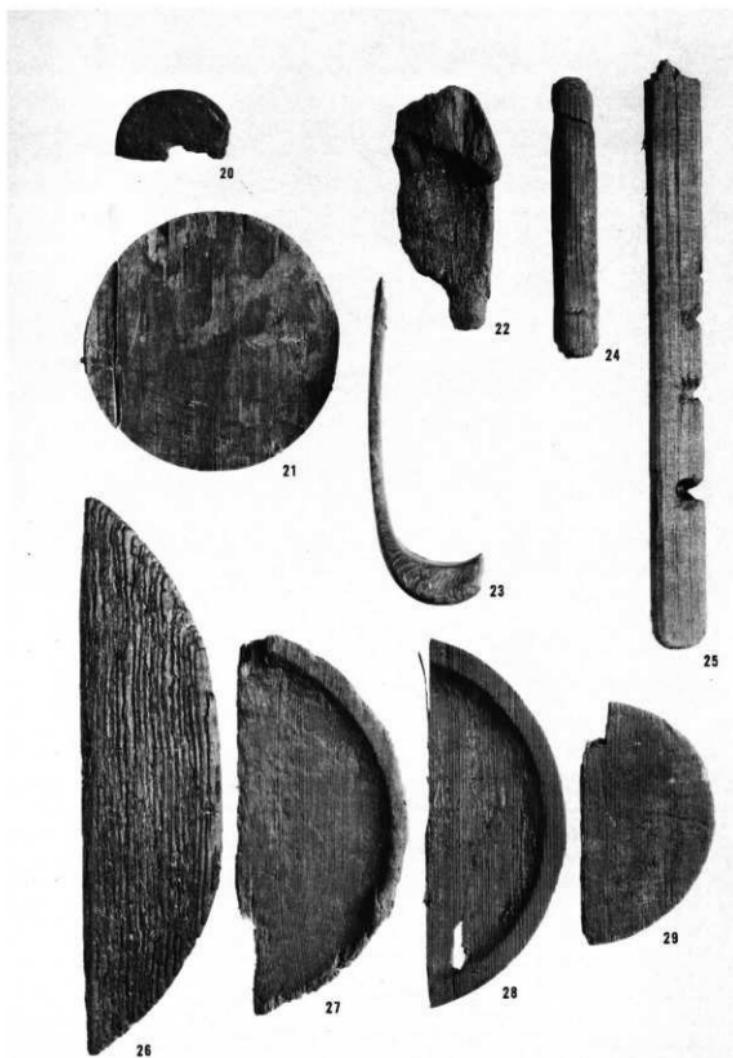
12

TTNT-B2・9tr  
H-2

TTNT-B2・9tr  
H-1



13. 第1号木筒 14~19. 斎串類



木器類

ほ場整備備関係遺跡発掘調査報告書

III-8

編 1985

編集滋賀県教育委員会  
発行財團法人滋賀県文化財保護協会

印刷株式会社 中村太古舎